クリエ・オスオン

浅上夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クリエ・オスオン

【Ｎコード】
Ｎ９２０７Ｔ

【作者名】
浅上夢

【あらすじ】
レルナと呼ばれる強い感情の励起によって生み出されるエネルギーを使い「空想」を現象として行使する術「具象」。
「具象」を操る「具現師」とレルナを食らう怪物「ドゥルウ」は人々の知らぬところで果てのない戦いを続けていた。
九大魔王第九位ムエリカは己を九つの心臓に分かち人間へ移植、自分を除く八人の心臓を奪うことで魔王位を継承させる大儀式「戴冠式」を発動させた。
進藤響は心臓を移植された幼馴染とある約束を交わし、それを守

るために奔走する。

プロローグ

――それじゃあ、一発ジャスりますか。

進藤響の放課後は、彼女のそんな決まり文句から始まる。

樋浦要。

いつも響の前に立つ勝気な幼馴染。

踊るような足取りで、歌うような口ぶりで、いつも彼女は宣言する。

腰の後ろで手を組んでお気に入りの歌詞を口ずさむのは機嫌がいい時の癖だ。

揺れるポニーテールを眺めながら進藤は小走りで追いすがった。

上機嫌な彼女は周りが見えない。だから頭一つ分背が高い彼女がどんどん先に進めば、歩幅の関係で響はいつも早歩きか小走りになるのだ。

我ながら情けない図だと常々思う。

彼女はふと思い出した様に足を止め振り返ると、若干バツが悪そうに舌を出し笑った。

ごめんね、なんて恥ずかしそうに笑う彼女に、いいよ、と返した。

「さぁ、今日もがんばるぞー！」

両腕と背筋を伸ばすと、要はきょろきょろと周りを見渡した。

あいつらの反応はないようだ。その明るい表情に変化はなく「平和で何より」と要が笑う。

土曜の昼下がり、半日授業が終わった後の帰路は学生達の笑い声で満たされていた。

要はこの風景を守りたいのだ。

科学が栄華を極めたこの現代で、彼女は勇者を目指している。

他人が聞いたら笑ってしまうような、もしくは首を捻るであろう、そんな目標。

でも、彼女は本気で、そしてその道はとても危険で険しいものだ

った。
「ねえ、なんで要は平然とこんなことを続けられるの？」
「ん？」
「だって、危ないよ？　正直命が幾つあったって足りないし」
だから抱いた疑問に、彼女は困惑したように、
「ボクにはそれが出来る。出来るのに出来ることをしないのは、とても不自然なことだと思うんだ」
さも当然という風にそう言い切った。
「あいつらを知っている人は少ない。
あいつらと闘える人は更に少ない。
そうなってしまったボクはとても不幸、――なんて思わない。
この力で守れる人がいる、――それこそ幸福だとボクは思う。
だからボクはジャスるんだ。
この手はもうただの女の子の手じゃない。
たくさんの人を救う手になったのだから」
歌うように、
誓うように、
彼女は強く、とても強く言い切った。
それが彼女の誓いの言の葉。
「響、ボクは白銀を目指すよ。そしていつか九大魔王を越えて見せる」
「カッコいいね、まるで勇者だ」
「だろ？」と彼女は朗らかに笑ったので「でも」と続けた。
「それでも、進路希望用紙に勇者と書くのはいけないと思います」
ツッコミに、彼女は目を大きく広げて取り乱す。
「いや、え、ちょっ、何で知っているんだ！」
「相棒ですから」
即答すると彼女はちょっとだけ拗ねたように顔を背け、そして二人して笑い出した。
高く、高く、どこまでも、どこまでも、その声は澄み切った青空

へ吸い込まれるように木霊した。
それは彼女と過した黄金期の一幕。
決して色褪せず、そして忘れることの出来ない記憶。

淡い思い出は疼痛だった。刺を抜くように回想を遮断する。
瞼を上げる。
記憶の中の青空は、飲み込まれそうなほどに暗くなっていた。
深夜の公園のベンチで少し休むつもりが、どうやら眠ってしまったらしい。
「ねえ、約束を覚えている？」
誰にでもなく自分に向けた言葉だ、だから答えるのも自分自身。
「大丈夫だよ、僕は覚えているし、そして破るつもりもない」
だからどうか安心して欲しい。
「君は僕が倒して見せる」

第一章・狩人達の夜

声が続く限り叫んだ。
喉が張り裂けるほどに強く。
溺れる子供のように我武者羅に。
諦めが人を殺すというなら最後まで抗ってやる。
だからテメー、ちょっと一発殴らせろ。

覚醒動悸、守屋歩の場合。

「零時ジャスト、篤倉（すずくら）トンネルに高密度レルナの展開を確認。三分後、綾瀬が先遣隊を放つも踏み込むと同時に退路が絶たれたと入電、領域系具象であることが判明。七分後、トンネルの物理的な通行止めを終え一般人からの隔離を完了。十分後、先遣隊から交戦開始の報告、以後定期報告もなく、全滅と判断。
んで、現在十二分経過中、我等、枢機機関第四分隊は現場へ急行中、何か質問は？」
前方で赤に変わる信号を無視して三隅梨穂はアクセルを踏み込んだ。髪を短くまとめた細身の長身、だぶだぶのタートルネックにクラッシュタイプのジーンズというラフな格好の女が車内の面々に口早に説明する。
守屋歩は窓に目をやる。逆立てた髪を銀髪に染め上げた三角ピアスの強面＝自分が胡乱気な瞳で見返してきた。
久しぶりの休日を謳歌しようと実家で惰眠を貪っていたところに緊急招集が掛かり、隊長である梨穂の車に乗り込んだのが一分前。
そして今、法定速度？　何それおししいの？　と言わんばかりに爆走するステーションワゴンが住宅街を駆け抜けている。一瞬で置き去りにされる風景を眺め、これならば三分もあれば現場につくな、と守屋は推測した。
「隊長ぉ、ユカちゃん思うにウチ等今日非番じゃね？　態々命賭け

てドゥルウに喧嘩吹っ掛ける意味が分らないっす」
右目だけを隠すように伸ばした不均等な前髪の少女、鈴木結花はケータイを早打ちしながら疑問を口にする。
「つーか、神崎一門が動いているならウチ等が行くとこじれるだけじゃん？　オマケに綾瀬って介入されんの超嫌いだし」
「そんなの――金に決まっているでしょ！？」
疑問は音速で返された。車内に「うーわー」という空気が漂い、オーディオから流れるアップ・テンポのラップが沈黙の中で虚しく流れ続ける。
「なによ、なによぉ、こちとら二十三歳で一家の大黒柱やってんのよ！　愛する弟が飢えて死んでもいいと言うのか！」
「ユカちゃん思うに、隊長は別に死んでもいいけど翔ちゃんは死んだらやだなあ、格好いいし、優しいし、今の時代とても稀少だもの」
「でしょ？　でしょ？　私の自慢の弟だかんね！　でもさあ、最近外泊多いのさ、避けられているのかな？　どう思う？」
「ね？　ね？　何で？　どうして？」という梨穂のウザイ懇願に、車内の面々はそれぞれのやり方で回答を放棄。
「そらなあ」
守屋の隣、身長一九〇センチの巨躯にスキンヘッドとサングラスという怪人、岩倉庸介の述懐。どう見ても軍人か傭兵かヤクザの、喫茶店経営者である彼が静かに言う。
「隠したエロ本見つけた後、見なかったことにして元の場所に戻して、定期的に確認して傾向を理解したらこっそり増やしておくとか、割と結構どうかと思うわ」
「えー？　そういうの買うのって恥かしいって言うじゃん？　だからお姉さんが変わりにですね」
「自分では完璧だと思っていた隠しスペースに、しかも性癖ばれたとしか思えへんような特集本が何冊もいつの間にか増えている方が自殺並みの恥辱や。
ちゃんとした手順で引き出し開けないと中の物が燃えてしまうト

ラップとか、某殺人ノートばりの扱いをエロ本に施す高校生なんて、日本全国探しても奴くらいのもんやぞ」
「むー」とどこか納得できないように梨穂が唸る。気分の消沈に比例して車も減速する。
「利穂、脱線し過ぎだ」
中性的な声で意識のシフトを呼びかけるのは助手席の柊司。シャギーを入れた亜麻色の前髪から覗く切れ長の瞳の容赦ない一瞥を受け、さすがの梨穂もたじろぐ。
分隊結成以前からの知り合いで六年近い付き合いらしい、当時から利穂の舵取りを行っていたので軌道修正はお手の物だった。
「でもでも、このままだと家庭崩壊の危機じゃない？　そうなるとわたし的にこの仕事を続けるモチベの崩壊になるんですけど？」
司の嘆息。瞳に駄々っ子とお母さんの板ばさみになる店員の苦悩が浮ぶ。
「相互理解が必要なら話し合えばいいだろう。夕飯にでもさりげなく聞いたらどうだ？　『今後も密にアレな本とか買っといた方がいい？』とか、な」
どこの地獄絵図だ、と喉まで出かかった言葉を噛み殺す。食卓で実の姉にエロ本買い物代行について問われる異次元的なシチュエーションを想像、意識せず顔が引きつった。
全く戦闘前の空気じゃない、守屋は長い嘆息を吐く。ほどなくして現場に到着した。

篤倉トンネル前、峠道は丙夜の静けさを粉砕する騒ぎになっていた。
トンネル前には漆黒のボックスカーと警察車両が壁を組み、赤色灯を点し一般車両を塞き止めている。気性の荒いトラックドライバーなどがクラクションを鳴らし、中には降りて警察と一悶着をしている場面もあった。
現場近くに車を止めると扉をスライド、五人が一斉に下車する。

外に出た瞬間ほんのりと冷たい夜気を浴び、薄着だったかなと守屋は自分の腕を擦る、と腕章の付け忘れに気付き慌て取り付けた。不気味に笑う案山子の上に、枢機機関第四分隊の文字が躍る。三隅梨穂率いる第四分隊の登場に現場を封鎖する筈の黒服が揃って道を開ける。

向う先は指揮本部、警察と、この篤倉という土地に置いて警察以上の特権を保持する神崎一門に近づいていく。

指揮官は組んだ腕を苛立った風に指で叩いていた。ダークスーツを鎧の如く着こなす眼鏡の痩身は、接近する守屋達を確認すると露骨に舌打ち。

「何しに来た？」イラつきを隠そうともしない問い。

「深夜のドライブよ」優雅な笑顔での梨穂の返答。

「急ぎの用があってね、邪魔だからこいつ等どかしてくれる？」

「ふざけるな」

篤倉の警察を掌握する綾瀬の次期当主のプライドか、他の勢力の助力を拒んでいるようだ。

「この程度の些事に貴様等戦争屋の出番はない。大人しく諦観していろ」

「でも芳しくないでしょ？　実際」

梨穂は優しく微笑んだ。こういう手合いとの交渉はいかに自尊心と地位を貶めず、かつ納得できる形に落とすかが肝となる、現段階では梨穂の手腕に期待する他ない。

「達巳、何度か貴方の指揮下で戦った経験がある一戦士として言わせて貰えば、貴方の力は信用に値する、本来ならこの程度の敵は些事、ということになるでしょうね」

梨穂は含みを持たせつつ続ける。

「でも、具象の基本原則にある様に『領域は重複しない』のよ。既に領域系具象が発動した場所に別の領域は展開出来ない。領域系は早い者勝ちですものね？　そして貴方が力を発揮するのは大規模戦闘の指揮、巨大な領域と高度に訓練された集団戦闘のスペシャリス

ト達の合わせ技は、これまで撃滅してきたドゥルウの屍が実力を証明している。でも今回はその戦略の前提が封じられている、つまり威力半減って訳ね」

痛い指摘を受けた綾瀬も苦い顔を隠しきれなかった。

「確かに今回は領域に踏み込んでの討伐、僕達の領分が防衛戦なら今回は攻城戦、いつもと勝手が違う、それで苦戦しているのは認めよう」

「手勢で劣勢、にも関わらず補強もなく戦闘を続けるのは如何なものかな？　特に今回は先に領域を展開された所為で、貴方特有の位相空間に転移しての戦闘及びそれによる隠蔽が徹底出来ない。スピード解決が重要されるのにあんまりもたついていれば、例え勝っても名将の名に泥が付くわよ」

そこまで言うと、梨穂は喚き散らしているドライバーに視線を送る。ドゥルウとの戦闘・情報は世間に隔離する方針が取られている。そういう意味ではドゥルウ事件は余り目だって欲しくないのが本音で、これ以上長引き注目を浴びるのは確かに綾瀬にとっては面倒な筈だ。

「別にわたし達でなくとも身内に応援を頼んでもいいんじゃない？」

「……玖珂は別件で動いていて、相沢と春日井は相変わらず連絡が取れない」

若干苦味が増した顔で吐き捨てた。

「ならもう、神崎か、三本足しかないわね」

「神崎は『銀』の護衛、三本足はその補佐、こんな事で動くか」

今度こそ本気で忌まわしそうに、神経質な視線をぶつけてきた。基本的に神崎一門は九席以下が動く。第一席から第八席、通称上尾八傑は『銀』の護衛、綾瀬の言うとおり「こんな些事」では動かない。

更に言えば野心家な彼は神崎一門における自身の席次に満足していない、今後のし上がることを考慮すれば、なるべく単独で片をつけたい筈だった。

「つまり、貴方の手札はここにあるだけ、と。ならもうえり好みしている暇もないと思うけれど？」
「例えそうであっても貴様等の助力など請うつもりはない」
「だーかーらっ！　別に私等はあんたに契約を持ちかけてるんじゃないの、最初に言ったでしょ？　急ぎの用でドライブだって、あんたはただわたし等がここを通ることに目を瞑ってくれればいい、後は邪魔な小石を蹴って進むだけだから」
　その申し出に綾瀬だけでなく、背後に控える四人も目を丸くした。正式な依頼ではないのだ、今回は綾瀬と契約を結ぶ以外に報奨金は発生しない。
　契約を蹴る言いように、綾瀬の瞳に不信が灯った。
「本気か？　超上級の具現師であり、《最強》や《不可能可能者》とも呼ばれるお前が真摯にボランティアとは……明日は金でも振るのか？」
「おう、いいね。そしてインフレとか起こるんだ、わらえねー」
　視線の交錯は一瞬。
「貸しにでもする気か、ある意味、契約するより性質が悪そうだが」
「だから普通の私用なの、貸し借りが嫌なら、ここまで来るまでに割と飛ばしちゃったから、警察にマークされていたら便宜図っといて、それでチャラにしましょ？」
　綾瀬の逡巡。破格の申し出、だがそれ故疑心を抱かせる内容。それでも決断は二秒で決まった。綾瀬は黙って顎をしゃくる。包囲の一角が割れた。

　領域に突入した瞬間、視線の先には灰暗い闇が続いた。等間隔に設置された照明がトンネル内を照らし出す。妖しいオレンジの光を浴びた壁面は、まるで魔物の喉を幻視させ進むごとに嚥下される様な錯覚を生んだ。
《接続完了。各員接続の感度はどうだ？》
「ＯＫだ、良く聞えているぜ」

「こっちもオッケーっす」
「異常なしや……うおおぅ、緊張してきたで」
「全員無問題ね、良い仕事よ、それで、具象解析は出来た？」
《四秒待て……簡易解析完了。領域系牢獄型、侵入は自由だが脱出は術者の打破が必要だな、典型的過ぎて面白みに欠ける》
説明を聞きながら利穂が片手を振る、進めの意を汲み取りそれぞれが動いた。
隊列はいつも通りの布陣だ。前衛に岩倉と守屋、中衛に結花、最後尾に梨穂、精神同調を得意とする司は領域外から支援に回っている。守屋達は四方に視線を配りながら漸進。
《領域の特性は未だ不明、解析完了しだいコールする》
「おっけー、ありがと」
司の報告に軽く返すと利穂は「じゃあ」と部隊員を見渡し、
「注意深く慎重に、されど可能な限り速やかに、まあテキトーにいつも通りやるわよ」
いまいち引き締まらない音頭を取った。

進入から三分、敵影も見当たらず冷えた汗が背を濡らす頃。
「で、結局どこから金を取る気だ？」
緊張から出た言葉。どうせ相手の領域内、既に動きはバレているので隠密性はあまり意識していなかった。
「うーん。たまにはボランティアもいくね？　とか言ったら」
「戦闘放棄、声援飛ばすから頑張ってくれ」
頷く一同。隊長・三隅梨穂への信頼の度合いを端的に表す言動だった。
「は、は、は。安心なさい、金は入るから」
「依頼者不在でかよ？」
「今回のドゥルウ、何を隠そう先月の『大侵略』で暴れた一匹よ」
余りに自然に出た台詞の意味を解すのに、守屋は数秒を要した。
「って、待てこら！」出た声は悲鳴に近かった「『大侵略』の一匹

だと！」
「そうよ、あんだけ暴れまくったからね、各方面から多額の懸賞がかけられているのよ」
「収入が申し分ないのは分かった、が、でも『大侵略』の生き残りってことは……」
意識せず声が上擦る。それは先月のドゥルウ事件を思い出したからだ。篤倉市内に忽然と現れた九体の真紅級ドゥルウ。
三本足まで出陣し、数十人の死者を出しながら事を収めた惨劇。
その生き残りが、この領域の主だと？
「いくらなんでも無茶過ぎだ！　隊長はともかくとして、結花やマスターはよくて橙辺りが交戦できる限度だろ！」
「そ。銀髪の指摘通り、今回の敵は橙よ」
利穂は続ける。
「消耗したのはわたし達だけじゃないってことよ、この場合連中の方が深刻ね、力を使い過ぎて位階が下がったもの」
つまり、と利穂は言う。
「橙級を相手にしながら真紅級の賞金が出るってこと、これって結構おいしくない？」
総員絶句。どういうルートで仕入れた情報かは知らないが、この目ざとさと嗅覚の良さにはいつも驚かされる。
「楽に稼ぐのがもっとーだもん、無茶はさせないわよ」
なんて軽口を叩く利穂になんと返すべき、言葉を続けようとすると先頭に立つ岩倉が片手を伸ばし静止を呼び掛けた。細くした瞳の先に一台の軽自動車を見つける。領域の展開時にこの篤倉トンネルを通行していた一般車両だろうか。一見しただけでは乗員は見当たらなかった。
「ちっ、もう喰われてやがるか」
岩倉の怒気を孕む呟き、周囲を警戒しながら車に接近する。後、三歩という所で守屋が右耳に通すピアスが見えない糸に引かれるように眼前の車を指した、足元から駆け上がる戦慄、守屋、そして司

の絶叫が重なり、寸前で岩倉が真横に跳躍。
次の瞬間。獣の唸り声に似たエンジン音が轟く、無人自動車のヘッドライトが点灯すると急発進、間一髪で躱す岩倉を抜け、後続する守屋達に驀進。
「《皮被り》や！」
振り向きながら岩倉が叫び個々で臨戦態勢を取る。守屋も目をスッと細め意識を集中した。
（羽根がなくとも飛べると知れ、この身はただ吹き抜ける一陣となる）
誓言を唱え象徴痕を起動。右手の甲に四つのLが連なる卍のような紋様が浮かび上がると、守屋の身体が藍色の光に包まれた。
幻想色（レルナ）。強い感情に触発し励起され、個人の空想を周囲に顕現させるエネルギーが発光。
空想を現実に侵食する、といっても幾つか制約がある。その一つが源案で、具象は源案を基にしたイメージしか実現できない。
守屋は象徴痕に保存されている具象の中から一つを掬い上げ駆式開始。
身の丈を超える槍、鋼の光沢、手に加わる重量感、鉄の匂い、そして風を吹かす穂先。只のイメージにレルナを注ぐ、さあ、仕上げだ、ただ想え、その実を持たない鋼の穂先が守屋という空想者を突き破り現実に侵食する程に強く、この槍がここに在ると信じ込め。
藍色の粒子が無数の円環となり縦に羅列、徐々に収束し空想と寸分違わず、目の前に長大な半不可視の長柄槍が出現、守屋の手に収まる。
先天系統と異なる器物系具象の発動、その為、位階は本来より一段階下がり赤銅級となっているものの、守屋によく馴染んでいるため展開速度が異様に速いのが特徴だった。
半秒で展開完了。スポーツカー並みの加速で肉薄する無人車に突撃、槍を水平に薙ぎ払いつつ交錯。左前輪を引き裂き、無人車は弧を描きつつ暴走、トンネルの壁面に肩から突っ込みサイドミラーが

吹き飛ぶと、車体が擦れ星屑の火花と甲高い悲鳴を巻き散らし推進力が失われるまで走り続けた。
「結花！」守屋の意図を察し「了解っす」結花は即座に追撃する。
「突撃爆破ガールッ！　ユカちゃんいっきまーす！」
結花は首に巻くコードを手に取り先端のイヤホンを耳に装着、胸ポケットに仕舞うＭＤの音量を操作、耳に流れる『Ｄｏ（やっちまえ）ｉｔ』の歌詞を口ずさむ。
法則系・白銀級具象《加熱の刻印（ロック・アンド・バースト）》を起動。その能力は『視る』ことで対象の保有するレルナを熱に変換する。人間に使用すれば五秒で体温が百度を振り切り、存在全てをレルナで構成しているドゥルウならば爆破に至る灼殺の魔眼が発露する。
動きを奪われた無人車は熱を帯びた視線を浴び続けきっかり五秒で炎に塗れた。
轟音と衝撃波が周囲に吹きぬけ窓硝子が全て吹き飛び炎の柱が舞い踊る、焦げ臭い熱風と熱気、火の粉を振り撒きながら無人車の輪郭が陽炎のようにぼやけると端から緑の粒子となり分解、数秒後には炎諸共消え去った。
「――ふぅ、マスター、前衛があっさり抜かれるなよ」
「すまん、あんなんに擬態しとるとなんて、想像してなかったわ」
互いの無事を確認するように軽口を叩くも、脈拍は中々平常に戻ってくれなかった。
何より岩倉の言い分には守屋も同意している。
ドゥルウの擬態能力である『皮被り』は喰った対象の容姿・能力・記憶を自己に複写するというもので、大抵、生物に対して行い社会に紛れるのが連中のやり方だった。まさか無機物まで複写するとは、守屋も初の体験である。
「まあ、いい経験になったんじゃない？」
意地悪く言うのは梨穂である。特に慌てた様子もないのでこっちは何度か経験があるのだろう。
《……銀髪の反応が一拍遅れていたらマスターは轍になっていた、

部下を殺す気か？》
　司の声には、珍しく怒りが篭もっていた。大音量の『囁き』でも受けているのか、梨穂は自分の両耳を押さえながら「ごめん、ごめん」と快活に笑っている。
「結果オーライ、結果オーライ、そんなに怒らないでよ。ついでに言うと、無機物に対す皮被りの逆に、皮被りを解いた原形が剣とか盾っていう場合もあるから気を付けてね」
「知れば知るほど無茶苦茶や、一体なんなんやねん、ドゥルウって」
　げっそりした表情で岩倉が肩を落とす。その後、深呼吸、前衛として最大の失敗を行なったので意識のリライトをしたいのだろう。
　再び隊列を組みながら守屋は岩倉の問いを反芻していた。
　太古より人間と果てのない死闘を繰り広げてきた存在に対し、人が知ることは余りに少ない。
「ドゥルウが何か、ね」岩倉が持ち直すまでの時間潰しに梨穂が返す。
「異界侵略者、さる具現師の具象、様々な憶測こそ飛交うが真実は一切不明。膨大なレルナでその身を構成する概念存在、故に物理攻撃の一切を遮断する反則者」
　梨穂は思い出すように続ける。
「複合具象体……というのが現在の見解かしら。レルナで肉体を構成しているからその栄養摂取も同じくレルナ……つまり精神ね。だからドゥルウはこの地球上で心を有し最も数の多い人間を襲い喰う。更に心、なんて曖昧模糊な概念で肉体を構成するが故、物理攻撃では干渉不能。『ナイフで心は殺せない』、知り合いの具現師の格言だけど、中々的を射ていると思うわ」
　篤倉に住み着くまで梨穂は国と土地を変えながらドゥルウと戦ってきた猛者だ。性根こそ腐っているが、その知識と実力は折り紙つき。全員が耳を向け傾聴の姿勢を取っていた。
「複合具象体、つまり連中は具象の塊なのよ。《心臓（オスオン）》という核に喰った具現師の具象とレルナを纏め、状況に応じ使用する。更にレ

ルナで肉体を構成している特性上、わたし達より具象に長けているわ、レルナの絶対量にも尋常じゃない差があるし、何より工程ね。わたし達が思考で具象を発動するのに対し、存在が具象である連中は手足のように具象を繰る、意識的に行なうか無意識でも行なえるかの違い、だからこそ単体でも強力無比となり、その討伐は常に多数で行なわれる」

保有する戦力の差は絶望的だ、と梨穂は宣言する。それは今までの経験からも理解していたが、隊を預かる者から言われると受ける不安も大きく変わる。

「でも、弱点もある。まずに連中は具象を生み出せない。その理由は源案を獲得できないから、わたし達が覚醒した時に繋がった《アレ》が、自分に害なすドゥルウに源案を授与するはずないもの。後は寿命の問題。わたし達にとってのレルナの消費は単なる精神疲労だけど連中にとっては血肉の消費、使いすぎれば、絶命する」

だからこそ、対ドゥルウ戦術は常に二つの道がある。枯渇を狙った消耗戦か、核を破壊し即死を狙う短期決戦か、だ。

「さらに領域系具象の維持には四系統中最大の維持レルナが必要。敵が《赤》以上なら、それこそ十年は無休で展開することも可能だけど、今回は――《橙》、なら二〇分が限度、そろそろ維持限界が近づいている筈よ」

すっかり指揮官の顔になった梨穂に、守屋はふと気付いた疑問を尋ねた。

「そういやさっきのドゥルウは？　倒したのに領域解除されないけど？」

「大抵の領域系がそうであるように、あれは敵の部下なのでしょうね、そもそも《緑》に領域系具象の行使は無理だし」

「ユカちゃん思うに、部下ってどのくらいいんの？」

「まあ、多くて二・三体よ。多数で行動するとどうしても索敵され易いし、ね。多くても術者も含め四体、この人数なら……まあ何とかなるでしょうね」

そう締めると同時、前方に異変。照明が一際激しく点滅し、不意に消えた。
濃い闇に落ちる前方に、ゆらりと浮ぶのは二つの紅点。紅点が近寄る毎に照明が落ちる。
薄暗い闇に浮ぶ影は人の形をしていた。二〇〇センチ近い巨躯に針金を束ねたような筋肉で構成された四肢、指の先には長大な、鎌を思わせる鉤爪が伸び、一歩進むごとに地面を揺らし振動が足元から伝わる。
目が慣れ全体を把握するに至る。二つの紅点は象嵌された双眸だった。血のような、もしくは燃えるような赤眼に、コールタールを浴びたような漆黒の肌が全身を覆っている。
人の形態こそ模すものの明らかに人ではない――人外異形の獣の登場。
それは無位と呼ばれる赤子、ドゥルウの初期形態で本来なら怖れるに足らない雑魚である。
「おいおい、ちょい待ちぃな！」
岩倉の悲鳴、続いたのは結花だ。
「ユカちゃん思うに、確か領域内の敵は多くても三って言っていた気がするなぁ！」
「あれぇー？」
広がる闇と増え続ける紅点。眼前に犇く無位は、既に二〇を越えている。
「ま、まあでも、無位なら例え大軍で押し寄せてきても物の数じゃないし、うん、誤差範囲内っしょ、まだ！」
言い訳を始める梨穂を横目に睨みつつ守屋も槍を構えると、敵が動いた。
カッターの刃を伸ばすような乾いた音が反響する。天を仰ぐ無数のドゥルウが鳴らす声は次々に重なりやがて耳を劈く音の津波となって脳を揺らした。
そして唐突な殺し合いが始まる、否、食い合いだ。ドゥルウがド

ゥルウを食い始めたのだ。数十のドゥルウは壷の中の毒蟲の如く、蠢き群がり肉団子を形成しながら同族に歯を立てる。
嘔吐感が込みあがるのを感じ、思わず口を押さえ、暫しの間、守屋はその異様な光景を前に呆然と立ち尽くしていた。
《呆けるな！　総員、全力攻撃！》
思考通信からの号令。凍った時間が溶け出し自分達が今、途方も無い間抜けを晒したことに思い至る。
先制するのは結花だ。矢のように飛ばす視線には《加熱の刻印》が載っている。対象を爆殺する視線を浴びるドゥルウの塊、しかし、
「ユカちゃん思うに――これって最悪！」
灼熱の視線は激突寸前で黄色の波紋に防がれた。
《幻想鎧》。レルナを大量に消費し具象の威力を減殺する結界の展開。
しかし、無位には絶対に発動不能な能力。敵の幻想色が緑から黄色に変色していた。これにより結花は無力化、守屋の戦力が半減したことになる。
ようは共食いである。レルナで肉体を構成するドゥルウだからこそ出来る芸当、弱い個体を一つにまとめることで戦力を強化するという、まさしく蠱毒の融合だ。
顕れたのは黒々とした球体。軽自動車を軽く踏み潰せそうな巨大なボールの表面は、滑らかではなく無数の突起が起こっている。それは人の上半身、絡み合った無数の無位が球体からはみ出し、爪をアスファルトに立て移動する。無数のパーツが個別に動くその様は、どこか百足やヤスデという多足類を彷彿させた。
行くぞ、利穂が先陣を切り走りだし、岩倉と守屋がそれに続く。
《幻想鎧》の対策は、上昇した防御力を突き破る大火力による打撃、《幻想鎧》と同じ汎用具象《点火》による攻性強化で強引に突破、もしくは遠距離具象を連発し相手のレルナ枯渇を促すかだ。ただし後者は人間相手なら有効だが、莫大なレルナを持つドゥルウには焼け石に水、効果は期待出来ない、からこその前衛三名による速攻突

撃。
　岩倉が梨穂の隣を抜けて球体に飛びついた。打ち出す拳は砲弾だ、紙細工を潰すよう、突起の一つ、無位の頭蓋を粉砕――同時に爆風。
「なっ！」疾走を停止、黒煙を貫いて岩倉が飛び出すのを確認、放物線を描き地面に激突すると、右肩、背中、左肩、の順に路面に叩きつけながら高速で転がっていく、徐々に速度を落とし七回繰り返しようやく停止、爆圧によるダメージで全身は焼け爛れていた。傷口から蒸気が噴出され岩倉の治癒具象がオートスタート、肌の表面が目に見える速度で再生され、跳ね起きると岩倉は小さく頷いた、戦闘続行は可能らしい。
「突起の一つ一つが爆弾か、微々ウザだな、こいつ」
「呑気に感想垂れている場合かよ！」
　破損と同時に自爆し攻撃者を迎撃する近接殺しと、具象を減殺・無力化する《幻想鎧》による後衛殺し、これは既に詰みではないか。
「そうでもないさ」
　梨穂は守屋の心中を見透かして、なお笑って見せた。
「なあ、お前達、具象とは何だ？」
　仲間にすら能力の全様を知らせない権化系・大奇蹟級具象《Cのデーモン》が展開、梨穂の周囲に霧が撒かれた。霧の正体は一滴が超微細な白色の立方体である。それらが自動的に組みあがり、二振りの短刀を形成する。
「具象とは、空想の顕現だ。源案という縛りはあるものの、それを基にしたイメージ、『在り得ざる現象』を世界に侵食させ顕現させる術……それが具象だ」
　梨穂は無人の野をいく気安さで無位の塊に歩みよっていた。唇を弓の形に曲げ玲瓏な声を響かせる。
「ならばわたし達具現師に『手詰まり』、『万策尽きた』、『詰み』なんて言葉は存在しない、何故ならわたし達の扱う具象は空想の顕現だからだ――いいか？
　思考を止めるな、意思を閉ざすな、空想し、幻想し、夢想し続け

ろ！
手段も手札も、活路も血路も、勝機と決めての一切を！
わたし達は、空想の数だけ用意出来る――だからっ！」
跳躍、不用意に突貫する無位の塊に、岩倉同様飛びつき逆手に握った短刀を無位の胸に叩き込み横に薙いだ、無位一体を削り取るが――爆発は起こらなかった。
「――アイン・ソフ・オウル、わたしは無限、故にわたしに負けはない」
踊るように舞っていく、ドゥルウの胴と、腕と、首の束が、銀光と共に球体の上を滑るように移動しながら片端から削り屠る。レルナ枯渇による消滅まで数分と掛からなかった。
（相も変わらず無敵まっしぐらだな、この女）
《最強》三隅梨穂の戦闘を目の当たりにして、守屋の肩は小さく震えた。
「てか、どうやって爆発を止めた？」
思わず衝いて出た疑問に、梨穂は呆れたように肩を竦める。
「思考を止めるな、意識を閉ざすな、そう言った。自分で考えろ、馬鹿者」
守屋を嗜めると思考通信が入る。
《前方四〇〇メートル地点にドゥルウの反応を確認した》
「完璧よ、それじゃあみんな、用意はいい？　大捕物を始めるわ」

トンネル内に在りえざる古木の森に、薄汚いローブで全身を覆う長身が立っていた。フードを目深に被っているために性別は確認できないが、守屋達の接近に気が付いたドゥルウが、顔を僅かに上げる。
「今度はそれなりに兵らしい」
低くくぐもった隙間風のような声だ。
「先遣隊はどうした、なんて、愚問でしょうね」
「さぁ、仰る意味がワタクシには……まあ有効利用させて貰います

がね」
　ドゥルウの腕には木製の籠がありそこに熟れた林檎が詰まっていた。姿と合わせると毒林檎を配る魔女を連想する。
「司、で彼女は？」
　利穂が言うのはドゥルウの隣に佇む少女のことである、若草色のブレザーと灰色のスカートは月之宮学園指定の制服である。彼女はどこかぼうっとして宙空に視線を彷徨わせていた。
《今のところ幻想色は確認できない》
「先遣隊の生き残り？　どうにも腑に落ちないけど」
「ユカちゃん思うに、ドゥルウ倒せば万事解決じゃね？」
　ローブ姿のドゥルウは守屋達を一通り確認し「ふむ」と思案するように口許を手で覆った。
「邪魔が入りました。としましょうか？」
「あら？　夜はまだまだ始まったばかり、シンデレラでもないんだから、もうちょっと付き合ってくれてもいいんじゃない？」
「アナタ方は少々手強い、戴冠式も未だ中盤、《王の法典》の完成を前にあまり余力は使いたくないのですよ」
　言って、遅々とした動作でドゥルウは林檎を一つ手に取る。
「名乗りが遅れましたね、ワタクシはムエリカ派の次期魔王《戦血君（シャイロ・ーン）》の騎士、《林檎売り（アンドゥリル）一》。
　篤倉の具現師諸君、それでは良き夜を過ごされよ」
　言うや世界を覆う異質な圧迫感が消失する。真っ先に気がついたのは梨穂だ。
「領域が、解除された……？」
　疑問より先に守屋が動く、林檎売りの対応は林檎を放るだけだった。
　林檎売りの足元で林檎が跳ねて、守屋に向う。守屋の動きが一瞬遅滞、跳ねて、転がる度に動きが鈍り、そして停まる。
　何故なら跳ねて転がるその度に、林檎の体積が一回りずつ大きくなっていくからだ。

「おいおいおい」
巨岩並みの大きさになった林檎に真一文字の横線が閃くとバクリと口を開くように割れ、切断面が地面に被さった。扁平で長楕円形の丸みを帯びた外観、側面からわしゃわしゃと無数の歩脚が溢れ、蔕が二股に分かれ周囲を索敵するように揺れる。
ようやく、守屋はそれが林檎でなく丸まった赤い団子蟲であることを理解した。
「爆ぜなさい」林檎売りの哄笑交じりの指令。
攻性レルナの圧力の高まりがこれから起こることを瞬時に理解させる。
（風で加速すれば爆発圏を抜けることは出来るが）
視界の端にちらつく少女は一切の無防備、一秒後の攻撃に一切の構えを見せない。
（ああくそっ！）
進路を変更、団子虫と少女の間に割って入り《幻想鎧》を展開、爆圧を強引に減殺しながら少女を抱きかかえ飛翔。自爆による横殴りの突風を浴びながら全速離脱を試みる。
煙がトンネル内に充満し視界を塞がれ、その奥でドゥルウがこの場を去る気配を感じた。
「微々ウザ！」梨穂は守屋と林檎売りを交互に見る――追うことは無かった。
「ああもう、ホントに嫌なシチュね、これ」
「撃滅失敗。ユカちゃん思うに、綾瀬は喜々として嫌味いいまくると思うなぁ」
暗鬱に翳る梨穂は守屋が抱く少女に目をやる。
「まあ、人命最優先ってことでいいっしょ」
にしても、と梨穂はつぶやいた。
「もとからここはドゥルウの集まりやすい場ではあったけど、ここ最近の情勢は流石に異様よねえ」
先月から頻発するドゥルウ事件にただならぬ不安を抱くのは、何

も梨穂だけでない。これが何かの凶兆でなければいいのだが、そんな気分になるのは守屋も同様だ。

炎の臭気が鼻につく、背後から車の気配、領域消失を確認し綾瀬が現場に踏み込んで来たのだろう。説明とか小言とか、色々面倒そうだなあ、強制された割に実りのない結果に守屋は「はあ」と項垂れた。

少女を抱きかかえた腕に感じる熱が心地よい、今はこのまま眠りたい気分だった。

第二章・噂は踊り狼を招く

過ぎた信仰とは狂信。
過ぎた祈りとは呪い。
真水が魚を殺すなら。
純粋は人を殺すんだ。

覚醒動悸、鈴木結花の場合。

篤倉トンネルで起きたドゥルウ事件の発生から約八時間、守屋歩は枢機機関篤倉支部の一室でソファーに身を沈めていた。
窓の外から陽光が差し込む。結局一睡も出来なかったのは、撃滅失敗を知るや対策として綾瀬と枢機機関の双方から事情聴取を任意で求められたからだ。
任意と言ってもほとんど強制だったけどなあ。
即座に組まれた捜索班も結局、目標を完全に見失い追跡活動を断念。現在新たなる作戦行動が可決され行動開始しているらしい。
守屋達に与えられた命令は『潜伏しているドゥルウ、《林檎売り》の捜索及び撃滅』だった。
乗り気ではないものの、自分が関わったからには途中でほっぽり出すわけにもいかず、死人が出ても寝覚めが悪い、最終的には希望を出して捜索任務に乗り出すあたりに彼の性格が覗えた。
扉のノブが回り人の入室する気配を感じながらも守屋、そして利穂は一向動く気配を見せないのは、やはり疲労によるものだろう。
「日本人は礼節に厳しい人種と聞いたのだがね」
流暢な日本語で男が苦笑する。
隻腕の青年だ。
枢機機関は表向きにはボランティア目的の公益法人であり本部が米国にある。篤倉は戦略拠点として重要である為、篤倉支部には本国籍の具現師が派遣されていた。

それがこの男である。
枢機機関篤倉支部第一作戦室室長・レナノルフ。
三十名の具現師を束ね指揮する男はド派手の一言で形容できた。オールバックに纏めた短髪も、鷹の如き鋭い双眸も、そして身を包むコートも、全てが赤。
「いつ見ても正気を疑う出で立ちね、前世はポストか何かかしら？」
「ポストが赤いのは万国共通ではないだろうに」
利穂の口撃を軽くかわしながらレナノルフは自席に着座する。
つうか俺達室長室でリラックスし過ぎか、平社員が上司の個室で爆酔とか普通に首が飛ぶレベルだよなあ。
「ともかく本題だ、時間が惜しいし聞きたいこともある」
表情を改めたレナノルフに対し、守屋も億劫そうにではあるが姿勢を正した。

「まず対象が発見された地点がここ」
片腕ながら手早い操作でＰＣを操作する、投影機が映し出す市内の地図が拡大され光点が点る。
「そして最終消失点がここだ、住宅街から少し離れた雑木林、国道からも遠く土地勘のあるものが裏道に使う場所だな」
どう思う？　とレナノルフが呼びかける。
発見地点と消失地点、二つの光点を眺めながら「妙ね」真っ先に応えたのは利穂だ。
「例のドゥルウ、確か《林檎売り》ね、アレは先月の『大侵略』に参戦した一体なのよね？」
「そうだ、交戦の果て橙に落ちているが、もともとは真紅級のドゥルウだな」
「力を大幅に失った以上、敵はもう獣ではなく獲物となったと言っていい」
親指の爪を噛みながら、利穂は疑問する。
「なら、どうしてわざわざ市内に逃げる？」

光点は市外ではなく市内へと移動していた。篤倉は世界から見ても高水準の組織複数が置かれる重要拠点だ。等級的には中堅であり絶大な戦力を保有しているとはいえ、本気で捜索と撃滅を旨とした行動を取られれば命はない。

「そもそも先月の『大侵略』自体が異例中の異例だ。具現師組織が置かれる拠点へのドゥルウの侵入行為の平均は年で九程度、一日に九体の、真紅級による侵入などもはや戦争といってレベルだよ、そんな事例……近代以降では初だろう」

「そうね、弱体化した時点でここから逃げるのが普通、潜伏を続けるなんて普通じゃないわ」

まあ、と利穂は言う「仮にここから離れられない事情があるなら別だけど」、と。

思い出すのは去り際に林檎売りが零した台詞だ。守屋は記憶を辿りながら口にだしていた。

「……ムエリカ派、次期魔王、『戴冠式』、『王の法典』それに《戦血君》ねえ」

単語として覚えていてもそこにある意味まで汲み取れない、のは守屋だけだったようだ。「第九位、ムエリカ派のドゥルウか」レナノルフの瞳が過去に飛ぶ。「アレにはいい思い出がない」

「腕の関係で？」レナノルフは黙って頷いた。「どれをとっても不穏な単語ばかりだな」それ以上は話すつもりはないらしく即座に会話を修正。興味もないようで梨穂も追求しなかった。

「あれ？　皆あいつの言葉の意味分かるのか？」

話に置いていかれる前に守屋は質問する。

「不勉強極まる」

返って来たのは容赦ない一瞥。まったく、と呆れながらレナノルフが続けた。

「戴冠式とは魔王が後継を選び自己の全てを委ねる儀式だ」

レナノルフは嘆息交じりに肩を竦めた。

「《林檎売り》は《戦血君》の騎士を名乗った、鵜呑みにすれば奴

は次代の《黄金》に仕えていることになる」
しばしの沈黙の後、利穂が言葉を継ぐ。
「この篤倉に、《黄金》が潜んでいるってわけね」
部屋に言い知れぬ質量が増し硬質的な緊張感が生まれた。

「具象というものが体系化されてどれほどの時間が経過したかは、実は定かではない。というのも具現師は元来敵同士だった。継承は個人レベルであった為に資料が散逸しているからだ」
眠気覚ましのコーヒーをそっと口に含め、司は続く言葉を整える。
視界に広がる教室には等間隔に白いテーブルと椅子が設置されている。座る十六人の生徒に共通点はない。
十代から三十代の男女の視線の集中にも大分慣れた。
「具現師としての覚醒、その第一条件は現実を侵食してしまう程に強くなった想い。現実的な手段では叶えることのできない絶望的な願いを持っていることだ」
生徒達の瞳がそれぞれ揺らぐ。各々、自身が何を思いこの力を得たのか再認識しているのだろう。
「具現師が元来敵同士って言ったのは、空想顕現なんてふざけた力を持つ具現師ですら、一番に抱いた願いを容易く顕現できないからだ」
それが俗に言う『不可能域』。
空想顕現は一定以上のレルナを発動した時に起こる現象だ。そして発現に必要なレルナは空想の内容に大きく変わる。　荒唐無稽なものほど莫大なレルナが必要であり、些細なものは少なく済む。
空想顕現なんて術自体が既に荒唐無稽ではあるけれど、内心の苦笑を無視して脱線した思考を元に戻した。
「『異界創造』『時空干渉』『霊魂練成』『万象改竄』『終焉否定』。以上五つに類する空想は具現師に存在する四系統に区別なく、ほぼ実現できる類のものでない」
必要なレルナが莫大過ぎてまともな手段ではどうあがいても行使

不能。
「そう、具現師は元来敵同士、その理由がここにある。私達にはどうしても叶えたい空想がある、しかしそれを成すにはレルナが足らない。さて問題だ、レルナの発動条件は何か？」
視線を投げて問いとする。不意打ちに少女は一瞬慌てるがすぐに回答した。
「厳密にはレルナは精神を宿していれば誰でも保有しています。強い感情の励起というトリガーで生まれるレルナを『象徴痕』が増幅、増幅量は『源案』の量で変動します」
「正解」と微笑み講義に戻る。
「具現師が獲得できる『源案』は一種のみ、その状態の増幅倍率じゃ、どうあがいても『不可能域』を実現できない」
ならば。
「問題なのは数であり、足りないのは『源案』、ならばそれを得ればいい」
望みを絶ち、望みを得る。かつて具現師は血を血で洗う戦を起こし、他者から『源案』を奪う行為を繰り返してきた。
「そんな具現師同士の争いも長くは続かなかった、なぜなら連中が現れたからだ」
ドゥルウ、と誰かが呟いた。殆ど独白だが異質な響きは波紋となりそれぞれに浸透する。
「連中の出鱈目加減に説明は要らないな？　単体で私たちの十数人分の実力を誇る怪物、具現師が結束したのは当然の帰結だ」
『枢機機関』。『神崎一門』。『王国』。篤倉にしても具象を扱う戦闘集団が三つ在る。昔ではありえざることだ。
「国というより地域単位で存在する具現師組織に対して、ドゥルウの勢力は九つしかない」
一拍。
「この世に九つ限りの最悪。九大魔王を筆頭としたドゥルウ九派。魔王、陳腐な表現かもしれないが、九派の首領達はそんな表現し

かできないくらいに……外れている。その全てが『不可能域』の到達者と言えば少しはイメージが沸くだろう」
返ってくるのは沈黙、まあ当然か、と割り切り話を進める。
「位階を色で示す手段は昔からあるな？　日本で言えば冠位十二階。具現師とドゥルウにもそれが当て嵌まっている」
説明しながら部屋の隅に移動、部屋の明かりを落とした。
「それが幻想色だ」
象徴痕を起動しレルナを纏う、司の位階は《夜天》。漆黒とは違う、それは濃い藍、夜の空を思わせるレルナが司の周りを静かに覆う。
「もう一つ質問、具現師とドゥルウ、それぞれの幻想色を答えて見ろ」
はい、と答えてから彼女は即答する。
「基本は虹の七色です。具現師もドゥルウも基本は《緑》、そこから《青》《藍》《紫》と昇り《白銀》と至るのが具現師であり、《黄》《橙》《赤》と堕ちて《黄金》と化すのがドゥルウです」
淀みない返答に内心感心した。中々優秀な子だと思う。
「等級で表すともう少し細分化されるな。《緑》《深緑》は共通位階。
具現師は《青》《蒼天》《藍》《夜天》《紫》《紫紺》《白銀》。ドゥルウは《黄》《黄昏》《橙》《暁》《赤》《真紅》《黄金》。以上九段階のレベル分けがされている、彼我戦力を測る目安だ、覚えておけ」
そこまで話すと教室に電子音によるチャイムが鳴り響いた。
「では今回の講義を終了する、各自自分のカリキュラムに従って移動しろ」
それぞれの速度で支度をする新人達を見ながら、司の脳裏に昨夜の出来事が遮る。
（もし『戴冠式』が起こっていて《魔王》が潜伏しているならば）
重い足取りで司も教室を後にする。

（戦闘の規模は『大侵略』を遥かに超える）
戦闘経験皆無の新人達も駆り出されるだろう。被害も甚大だ。
ままならないな。
自然と吐き出されたため息はとても重いものだった。

回転椅子の背もたれに重心を掛けつつ腕を伸ばした。長時間椅子の上に座りパソコンとにらみ合っていたので目の疲労も濃い。
少年が背筋を伸ばすと天井には剥き出しの排気ダクトが何本もうねっている。大樹の根を彷彿させ、ここが地下であることを意識してしまう。ランプの光だけ浴びるというのもどこか不健康な気がした。そう思うと何だか無性に外に出たくなる。最後に出たのはいつだったか、少なくとも三日はこの部屋を出た記憶がない。
「せめて一段落してくれれば、な」
「ねえ、今何時かな？」
背後から声、「十二時過ぎだ」と短く答えるとバタン、と倒れる音。二度寝だろうか。
繁華街の裏路地、元々は地下クラブだかライブハウスだったのを改造した自宅で、周囲から畏怖と畏敬を込められライオンの穴倉と呼ばれている。
その穴倉で、唯一のベッドを占領していたのは女だった。
「昼は？　俺はピザを頼むがどうする？　今なら四五分で来るらしいぞ」
振り返ると女は上体を起して億劫そうにベッドから這い出ていた、何故か裸だった。
天井の照明から光を浴び陶磁器のような白い柔肌が艶やかに映える、ベッドの足元に服が乱雑に脱ぎ捨てられていた。その中からリボンを手に取ると、肩から前に垂れ胸を隠していた黒髪を取り、一まとめに結う。動作が一々扇情的である。
「やーん、エッチ」
指摘され長い時間見とれていたことに気付かされた。慌ててパソ

コンに向き直る。口を吐いたのは悪態だ。
「裸で寝るな、動物かテメーは」
「うーんこれはもう習慣だからね、何ともならないよ、それよりどう《暴賢帝(ウェルフリオン)》？　あたしのプロポーション？　欲情した？　した？　何なら犯ってみる？」
「抜き身の刀を抱く趣味はねえ」
「お、上手いこと言う」
何がおかしいのかケタケタと笑う女。衣擦れの音に思考を乱されながら少年はクリックとプラウザバックを続ける。
イラつきが瞬時に沸点に到達。ただし取っ組み合いの喧嘩では普通に勝負にならないので煙草でストレス解消を図る。　テーブルの隅にある箱から一本取り出して口に咥え、ライターを探っていると背中に声が投げられた。
「あーっ、酒と煙草は二十歳からだよ」
「んなもん、今日日道路の速度制限並みに守られてねーよ」
だから破っていい道理でもないのだが、親や教師のような言い分につい反抗してしまう。なにかしら言葉が飛んで来ると思ったが無言。ライターを見つけ火を点けようとすると後ろでパチン、と指を弾く音――咥えた煙草が粉微塵と化す。
「ぶッ！」吸いたいのは煙であって粉末ではない、鼻腔からのニコチン直接吸引に思わず咽た。
何か文句でも言おうと思ったが、辞めた。法律破ろうとしている時点で道理と正義で勝つ見込みが全くない。仕方ないので溜息一つ。
「で、そっちはどう？」
「進展無しだ、中々見当たらないよ。まだマイナーな噂だしな」
カチッ、とマウスのクリック音が室内に響く。
「ホントに実在するのかも怪しい、《十一桁の零(イレヴン・ゼロ)》なんて制裁人、なんてな。お前はどう思う？　《斬切姫(ガルデロ)》」
「半信半疑。単に携帯で０００-００００-００００に電話を掛けて憎い相手の名前を言うと制裁人が現れて罪に等しい裁きを与える、

なんて与太を聞かされただけだかんね」
「《戦血君》は」トーンを落とし言う「もう既に《存在干渉》に飲まれている」
「そうだね」
「なら、《魔王の心臓（クリエ・オスオン）》の最終状態に突入している筈だ」
「《〜するだけの存在（ラスト・シェイプ）》、か」
「だとすれば、存在しない番号を媒介にして、《十一桁の零》なんていう『在り得ざる現象』の元、制裁する存在がいりゃ、それは《戦血君》で間違いない」
　再びクリック音。そして静寂。
「……ねえ、久しぶりに外に出ない？　煮詰まってもいいことないし、ちょっとした気分転換も必要だと思うよ？」
　そう言って背後から抱きつかれた。腕には白いシャツが通されているので着替えは終ったらしい。背中越しに感じる体温がとても心地良かった、顔が綻びそうになるので寸前で堪える。出たのはやはり悪態。
「無い胸を押し付けても嬉かねえし何も感じんぞ、俎板胸」
「……ホントにあんたってツン目デレ科よね」
「男に対する評価じゃねえし、ツンはもう類でいいんじゃねえか？」
　ふとある事実に気付き口に出してみた。
「今気付いたけどマナイタムネって何か刀剣の銘っぽくない？　今度からお前の綽名に」
「とりゃっ」なんて可愛い掛け声と共に肩を掴まれる反転、繰り出されるのはギロチンチョーク。顔面を貧乳に埋められ慌ててタップを連続。
「おらおら！　嬉しくないし何も感じないだろう！」
「当っている、当っている、いやいやそれ以前にマジで絞まっているから！」
「へいへいへ〜い？　ツキガク時代からあたしの前で悪事を働く身の程知らずと、胸をネタにからかう命知らずがどういう末路を辿っ

たのか、もうすっかり忘却の彼方ですか？」
「思い出しました！　思い出しました！　大事なことなので二回言いました！　ああクソッ！　やっぱ言うんじゃなかった！」
ぎゃあぎゃあ騒ぎながら突き飛ばすように裸締めから抜け出す。ぜぇはぁ、言っているとポーン、というＳＥ。
「ナギャから？」問いにメールを開き「違う」と短く返す。
「まった面倒なことになっているな、おい」
緊急報告は情報収集に駆り出していた従者からではなかった。内容は昨夜《林檎売り》が起こした具現師との戦闘の経緯、その結果だ。
「それに……こいつはオマケか」
《十一桁の零》に関する報告書である。現在確認されているだけで七人が《十一桁の零》と接触、軽傷、重傷と様々であり名前を伝えた後、消息が掴めないとされる者もいるらしい。
ハッ、と短く笑う。
「まあいい、とりあえずは一区切りだ。どうする《斬切姫》？　久しぶりの外出としゃれ込むか？」
一にも二にもなく少女は頷いた。

新人に対する講義を終えた司は貸し与えられている研究室に戻り、資料を机に置くと椅子に座った。付けっぱなしのＰＣにメールが来ているのを確認、手早い操作で開いた。
昨日保護した少女の詳細だった。
（月之宮学園一年、樋浦要、風紀委員、具現師としてはフリーランスか）
結花の一つ下だ、聞けば何か分かるかも知れない。
画面をスクロールし経歴を辿る。途中で司の動きが止まった。
（『大侵略』の際に死亡……だと？）
戦闘記録を参照する。真紅級ドゥルウ《水銀の竜（グーヘリアン）》と交戦、《腐毒鱗粉》により全身腐敗を起こし即死とある。

嫌な記憶を掘り起こされた。第四分隊も『大侵略』の際動いていた。《水銀の竜》が暴れた跡地……あの途轍もない惨状を目の当たりにしている。
毒性レルナを周囲に散布し、吸い込んだ者の中で増殖、対象を腐食し抹殺する広域殲滅具象は、出現を確認し真っ先に迎撃に向かった七名の具現師を熱した飴の様に溶解させ虐殺した。
身元の確認など不可能。だから参加した具現師を総員死亡としたのだろう。
（樋浦要は生きていた）
疑問は一つ。
（どうやって生き延びた？）
《腐毒鱗粉》は呼吸の他、皮膚からも侵入するとある。つまり近接戦闘を挑んだ時点で何の対策もなければ即死を被る剣呑さ、初見のドゥルウの情報などあるはずもなく、だからこそ七人は全滅した。
（位階は《藍》、《真紅》の具象を防御する手段があるとは考え難い）
せめて話が出来ればいいのだが。
昨日から一言も話さない少女のことを思うとそれは難しいと判断するしかない。
（ともかく、この情報は全員に知らせて置くべきか）
メールの内容を簡略にまとめ隊員に一斉送信し、司は研究室を後にした。

篤倉の夜。人と灯から離れた暗い通り、喧騒から遠ざかり本来静寂に包まれるはずの路地裏に男の怒鳴り声が響いていた。
綾瀬の私兵団に所属する村木は電話の相手に本気の怒りをぶつけていた。《蒼天級》具現師であり平時は遊撃任務に就く彼は、普段は軽い調子で周囲を盛り上げるムードメーカーとしてチームの和を大事にしている。
そんな彼も今は我を忘れ、電話の向こう側にいる相手と罵り合い

をしている。
相手は何度か同じ作戦をこなした後輩の女性具現師である。前作戦で村木が体を張って守ったことが切欠でアドレスを　交換、休日などに会いたいという連絡がくるようになった。
恋人がいる村木は友人として付き合っていたつもりであったが向こうはそうでなかったようで、思い込みの強い性格が　災いし自分を彼女として扱ってくれていると誤解したらしい。
そうなったには村木の和を大事にする優しさ、優柔不断とも言える悪癖も一因となったため強く拒否ができなかったわけだが、今日、村木の恋人に勝手に会い一悶着あったらしい、その事実を恋人の口から直接聞きついに決心を固め、電話をしたのだ。
当然の如く口論となったものの、自身の思いをはっきりと伝え、最後は泣き始める彼女を宥めた。
「信じていたのに」女の声はとても細く弱弱しい「私は絶対許さない」
そこで通話が切られた。
疲労に鈍る足取り、その先に先に誰かの影が落ちていることに気づいた。視線を上げて確認、その井出達に息を飲んだ。
評すなら狂気絢爛。
重厚なレッドドレスを纏う女がそこにいた。
まるで演劇の舞台、もしくは宮廷の舞踏会から抜け出したような華やかさ、しかし指先から肩までタイトする黒の手袋越しには金属塊、憤怒の表情が彫刻された凶貌の手斧が握られていた。
見る者に警戒以外を与えない不可解な衣装、一瞬あの女かと疑ったか体系がまるで違う。彼女は小柄な方だ。対する女は細身であるが背は高い、おそらく村木と同じ程度はあるだろう。
「罪には罰を咎には裁きを悪には正しき審判を」
「何？」
謎の発言に村瀬は聞き返す。眼前の女はそんな疑問を一切無視した。

夜の帳を引き裂く閃光、その色を確認するより先に村木は動いた。膨張する攻性レルナに危険を察し、懐に仕舞っている拳銃型遺物級具象《竜の喉》を引き抜く。

所有者のレルナを弾丸とする、そんなシンプルな構造を持つ具象が路上で炸裂。

爆風が薙がれ巻き上がる白煙に目を凝らす村木は、次の瞬間粉塵を押しのけ超低空の弾道で肉薄する女を見た。

地を滑る女の右手が跳ね上がり、すぐさま照準を狙い直す。

（近い……！）

自爆の危険性がチラつき発射を逡巡、それが岐路であり決定打。

村木が銃を握る右手が消失。真紅の血飛沫と共に骨と肉の砕片、そして切り離された手が銃を握ったまま頭を超えて背後に落ちる。

次の対応を取らなくては、攻撃手段を失った村瀬が何かを起こす間もない。女は既に懐、握るハチェットが次なる一撃を繰り出している。

重く低い音が裏路地に響いた――以後は一切の沈黙。

第三章・ライオンとギロチン

お前を決して裏切らない。
お前を決して傷付けない。
お前のために拳を振るい。
お前のために命を張ろう。
だからどうか知って欲しい。
お前は決して独りじゃない。

覚醒動悸、岩倉庸介の場合。

砂利と埃に塗れたコンクリの床面は、靴越しにざらついた感触を与え耳障りな音を立てる。光源など一つもない、だから夜ともなれば完全なる闇に閉ざされるこの空間も、今はまだ日が傾きかける夕暮れ時、仄かな明るさが残っていた。

「空気が悪い」

土と埃が混じる空気は水分を含まず吸い込めば喉にべったりと張り付き嫌な気分になる。人の住まぬ環境故に人に適しているはずもなく、ならばこんなところを根城にする進藤に非があり本来文句を言うべきではない。だから、最寄りのコンビにて買ってきたペットボトルのキャップを外すとスポーツドリンクを口に流し込み水分補給を行う。スニーカーの靴音の残響。玄関のない部屋に入り買ってきた食糧を乱暴に放った。

洗面所に向かうと割れた鏡に映る自分の顔を覗き込む。青白い病人のような自分の顔が見返して来た。

「これはさすがにみんな驚くね」

ここ数日ろくな食事を取っていない。飲まず食わずの生活……やつれて当然だ。

「まったく……情けないな」

目を落とし、自然と出た己への皮肉。だからこそそれに返答があ

るなど思ってもいなかった。
「ええ、同感ですとも我が同胞」
見上げれば、進藤の後ろに立つ者が鏡越しに目に入る。
「……《林檎売り》」
「今のアナタは見るに耐えません」
それは明確な糾弾であるものの、声色はまるで平坦で怒りを感じさせない。相変わらずの無感情振りに進藤は苦笑する。
「何が可笑しいのですか？」
「別に、お前は変わらないなって思っただけだ」
「当然です」機械めいた声音を絶やさず「それがワタクシの誇りなのですから」
「そうか」声は平坦、しかしその裏に強固な信念を感じた「なら僕と君はやはり敵だ」
進藤は林檎売りに向き直る。
「アナタは王を討つと仰るのですね？」
「君は戴冠式に勝てると信じているんだね？」
正面からぶつかり合う二つの視線。進藤は意識せず右手に力を篭める。その動作に気づいた《林檎売り》の視線も右手に落ちた。
「王から授けられたその力……《暴走思考（ブラット・トゥ・ヒート）》は万能ではありません」
「分かっているさ」
進藤は即答した。
「言われなくても、な」

グラスに水を注いだとしよう。
それを自分の人格（ベース）とする。その水は日々の経験、出来事を吸収し変化する、一〇余年で一応の完成を果たすだろう。人生を変えた切欠などと良く言うが、完成したベースを根こそぎ変化させるようなことはない。
何故なら、言葉であれば一瞬、映画ならば数時間、それがどれだけ強力な影響力を持とうと積み上げてきた時間を超えることがなけ

れば、結局は刺激にしか成り得ない。
《魔王の心臓》移植者を悩ませるのがこの問題だ。
《魔王の心臓》は移植者に莫大なレルナを配給する。『不可能域』を成しえる量だ、もはや筆舌に尽くせぬ代物である。だが同時に致命的な欠陥も併せ持っていた。初期獲得した源案に因んだ紋様として顕現する象徴痕に《魔王の心臓》は融合した。
ひとたび、心臓を起動すれば融合した源案から爆発的な速度、そして量の情報が流れ込む。源案とは『世界記録書』に刻まれた一項である。源案を風としこの星の年齢を七〇億と仮定すれば、風に纏わる七〇億年分の情報が流れ込む。
言うなればそれは九対一のカクテル。基酒（ベース）など跡形も無く消し飛ぶのは道理だった。

「林檎売り、要はどうした？」
「ワタクシが単独で行動している時点で検討は付いていると思いますが？」
「また消えたのか」渋面となる進藤に「最近は二日に一度の割合ですね」林檎売りは無機質に返す。
「既に保護されてしまいましたが、その者達、ワタクシが仕掛けるには少々手ごわい、また数日待ちますよ」
「頻度は増えている、それはつまり」
大きく息を吸い、言葉と共に吐き出した。
「要は」進藤は林檎売りを真っ向から見据える「もうじき《断罪するだけの存在》となる」
「既に会話もままならず自発的な行動は何一つない……落ち切る寸前の砂時計と言った所でしょう」
「……お前が知らせたあの方法を、あいつは結局選べなかった」
「なればこそ、ワタクシは《戦血君》樋浦要様に忠誠するのです。他の心臓を奪うことなく十日戦い続け生き抜いたあの方を、並の具現師達が一瞬で自我崩壊に至った情報侵食、例えるなら生身を洪水

に晒すに等しい蛮行、それほどの『存在干渉』に、彼女は良く耐え、そして今も戦っている」
「……『存在干渉』を唯一防ぐ手段が、己を除く八人の心臓を奪うこと、だったな」
「ええ、八柱の《魔王の心臓》を吸収することで正式に魔王位を継承したことになります」
進藤は要と共に受けた説明を思い出した。
情報侵食と言われる『存在干渉』をダイレクトに受けた場合、いかなる具現師も残らず自我崩壊に至る。そうならないのは、あくまで侵食を受けているのは《魔王の心臓》であり、移植者への影響は余波であるからだ。
本来、《魔王の心臓》は移植者に影響を及ぼさない筈だった。蓋であり避雷針となるはずの心臓は、しかし九分されることでその効果もまた九分される。故に移植者達が『存在干渉』から逃れる術は、他の八人の心臓を己の心臓に吸収することだけだという。
進藤はそう説明された。
「九分された心臓と『王の法典』、全て集め魔王九位の継承に至る、ね」
それが、現在この篤倉で秘密裏に行われている大儀式――『戴冠式』の全容。
「そっちの都合で選んだ九人をそっちの都合で殺し合わせる……君たちはいつだって無茶苦茶だ」
「承知しております。九分された心臓に本来の機能が備わっていないことはワタクシを含めた全ての従者に知らされておりました」
「それでも《戴冠式》を辞め様とはしなかったんだな」
「ええ、具現師に心臓を渡し九柱九者を争わせる、それを持って戴冠式とする、というのが先代九位《侵食王（ムエリカ）》様の御意思でしたから」
何度となくしたやり取りに進藤は大きく息を吐いた。
「……それで、お前はどうやって要を勝たせるつもりなんだ？」
「今はまだ種を蒔いている状態ですよ、芽吹かせるのはワタクシで

はありませんし、ワタクシの立ち回り如何では失敗も十二分にある」
「相変わらず要領を得ない奴だね、君は」
「仮にもワタクシ達は敵同士、答えただけでもマシと思ってください」
「ああ」進藤は頷く「最初から期待してないよ」
「では、改めて宣言します」
別段力など込めず飄々と、
「アナタの邪魔立てなど意に介さず、ワタクシは我が王の魔王位継承を成就させます」
告げる全霊の宣戦布告を、進藤は静かに受け取った。

少女は無感動に空を見上げていた。
自然公園の一角にあるベンチに守屋は腰を降ろしていた。隣に座る少女……司の調べによるに先月死亡とされていた筈の樋浦要はというと、何が面白いのか流れる雲をぼうっと見ているだけだった。
「樋浦、空なんか見ているだけで楽しいか？」
呼びかけに要は一瞬こっちを見るも、しばらくするとまた興味は空に戻る。
岩倉の家で預かっていた要は主に結花が面倒を見ていたらしいが、その扱いは四苦八苦だったのは言うまでもない。
会話を始め、自分から何かしようとする気配がない。恐らく放っておけば衰弱死するじゃないかなんて思わせる亡失振りだ。
司が名前を調べた後は多少声掛けにも反応し食事や入浴などもこなせるようになったらしい。「いい天気や、散歩でもしてきたらどうや？」なんて岩倉の発言により外にでた訳である。
「犬猫じゃ、ないんだぜ？」
なにやってんだか、と守屋も樋浦に習い空を見上げた。
のんびりするのは嫌いじゃない。しかし今は時期が時期だ。《林檎売り》は見つからず捜索は難航の一途で早くも挫折気味である。何もしないのはどうにも落ち着かないのであるが。

守屋の索敵圏は自身を中心とした5メートル程度。索敵具象としてのランクは《赤銅級》であり、正直ないよりはマシという評価である。
テキトーに歩いていれば遭遇するかも知れない。守屋が散歩役に選ばれたのはそんな理由だった。
「まあ実際、そんな可能性は殆ど無いんだけどなあ」
散歩で出向くような大通りに潜伏者が通るとは思えない。そもそも発見されたドゥルウにアタックを仕掛け迅速に敵を征圧するのが第一作戦室の役割だ。
監視・捜索・解析を旨とした第二作戦室でもない限り捜索行動の効果は薄かった。
何が言いたいかと言えば。
（気を使われたなあ）
ということだった。
得手不得手を考慮し苦手な分野で根を詰め過ぎて本番で本領を発揮できないよりは、休める時に休み本番に備えよという配慮だろう。
等級的には隊で二番手である守屋が、周りからフォローされるのは人生経験の差とも言えるが、
「……何もしないのはやっぱなあ」
それでもやはり性格の問題が一番を占めるのであろう。
結局、それから二時間公園でダレてから帰路に至った。

面倒なことになった。
それが進藤響の今の率直な感想である。
「おいっ！　進藤！　シカトかこらっ！」
男の乱暴な声に進藤は我に帰る。そこにいたのは月之宮学園指定の制服の集団五人。カテゴリー的にはクラスメイトということになる。
「ええと……安藤君？」
「何で疑問系だ？　テメーはクラスメイトの名前も覚えてねえのか

？」
「あ、いや」言いながら現状をどのように切り抜けるか模索する。
安藤とその取り巻きは学校内では大人しい部類に入る。普通ではありたくない癖に、しかし本気でアウトローになることもない。数を集め弱い者を囲っては小金をせびる程度の連中だ。
「あのよお、進藤」と、安藤が馴れ馴れしく肩に手を回しドスを利かせてくる。
「おめえ無断欠席とかどういう領分だよ？　掃除とか日直とか面倒なもんが俺等に飛び火すんだろ？　しかも俺等がそんな苦労をしている時におめえは学校休んで街でお遊びかぁ？　嫁も姿見せねえしハネムーンかこら？　いい身分だなぁおい？」
同意を求めるように安藤が取り巻きに振り返る。控える男達は嘲笑交じりに揃って頷いた。それを言うならお前等も学校はどうした、喉まで出かかった言葉は結局口に出しはしなかった。
「まあそんな訳で、だ。何だ？　そういう所お前はどう思っていんだ？　オメーの勝手で俺等が迷惑している訳よ？　気持ちとか筋とか通すものがあんだろ？」
「そう、僕の事情で君達が多大な迷惑を受けたことに謝罪と、そしてボクの代替わりになってくれたことには感謝する、ごめんなさい、そしてありがとう、じゃ」
片手を挙げてその場を去る、ことなどやっぱり無理だった。
「おいこら待て、進藤！　何のつもりだ、そりゃ？」
安藤の右手が肩を掴み、逃走を阻止する。
「君が今言っただろ？　気持ちや筋を通そうと思って感謝を述べて見ました」
「おうおうおう！　休みのうちに随分言うようになったなぁ？　随分と強きじゃあねぇか？　言葉の一つ二つで俺等の苦労が報われるとでも思っていんのか？　頭の悪いお前にも解るように言ってやろうか？　慰謝料と迷惑料を寄こせって言って・ん・だ・よ！」
伸びた手が頬を抓ると顔を持ち上げ、振り払うように離された。

痛みはそれほどでもないが頬が赤く腫れる。
「悪いけど、持ち合わせがないんだ、いつか払うからローンでも組んどいてくれ」
「テメェ、やっぱ喧嘩売っているだろ？　女房に守られているからって俺等が手ぇ出せないとでも思っていんのか？　あんなクソ女、学校外なら襲って犯ってもいいんだぜ？」
　瞬間、右手に秘められた遺物がぐつぐつと不穏な熱を宿すのを感じた。
　ああ、解るよ、溜め込んだモンを早くぶち撒けたいんだろ？
（でもな、こんな相手にお前を抜くつもりはない、それこそ大事な燃料を使う気も、な）
　だから、
「出来ないことを口にしない方がいいよ、僕がいうのも何だけど、相当かっこ悪いぜ？」
　進藤は敢えて殴られることを選択した。ここで受ける痛みも、心を燃やす燻りなってくれるなら、それはそれで安いものだ。
　予想通り、眉根を吊り上げ安藤は「シネ」何て物騒な言葉と共に拳を振り上げた。何だかんだでこいつ等に殴られるのは初めてのことだ。なので、どの程度痛み付けられのは予想出来ない。
　そして、拳が振られた。同時に脇を抜ける突風。安藤はぶっ飛んだ。
「――はい？」
　高速飛翔し対象に直撃したのは、ドラム缶サイズの青いポリバケツだ。
中身も満載で近くの軽食店のものだろう。空いた蓋から異臭を放つ生ゴミが溢れ、安藤の上半身に覆い被さっていた。
　問題なのはそんな物体を、割と飛ばした自転車並の速度で打ち出す膂力。高校球児どころか、プロレスラーですら在り得ない怪力の持ち主は、
「いぇ～い、ストライクゥ～！　多勢で無勢を取り囲む、何か見る

からに悪者っぽい連中発見！　正義的に死刑申請！　宇宙的に申請許可！　気分的に執行開始！」
「春日井さん？　これが本当に仲間同士でじゃれ合っている場合とかそういう時の対処とか考えています？　あとどうすんですか、あのゴミ？　連中絶対片付けませんよ？」
「あのねぇ相沢ぁ？　あたしがツキガク時代何委員だったか覚えておいて？　風紀よ？　風紀。風・紀・委・員。つまり悪者とか不良をぶちのめすのが仕事なの、解る？
――ゴミ掃除はお門違い、美化委員でも呼びなさい」
「あんたってやっぱどう考えても最悪最低だ！」
かなりのハイテンションで突っ立っている、一組の男女だった。
「な、な、な、何だっ、テメエゥッ等ァッ！」
「おー、おー、威勢が良いねえ？　ちょっと呂律が回って無くて聞き取り難いのがあれだけど、まあ、ギリギリＯＫかな？　どうする？　やり直したいならテイクツーまで待つけれど？　あんま格好いい台詞でもなかったし続行でいいかな？
――さて、私が誰かと問われれば、」
「省略しよう。ぶっちゃけカツアゲとかダサいし辞めない？」
「ちょっとおっ！　あたしの正義の名乗りを省略なんてどういう了見！　邪魔するアあんたは――エネミーか！」
「過去と未来はさておいて、この場だけなら味方以外の何者でもねえよ！」
何か男の方もノッて来てしまった。まあテンションは感染するものだ。飲み会とか宴会とか。ただし精神的耐久力＝堪忍袋がそれなりに強度な進藤と違い、安藤達は既にぶち切れモードに突入していた。血と怒りの温度の上昇を表すように真っ赤に染まる安藤達の顔、その中で青くなってガタガタと震える奴が一人いる。
「安藤、君、やばいっすよ、多分、その人、ぼふぁっ！」
彼は何と言いたかったのか、射出されたポリバケツの第二射の餌食となり続く言葉は成されなかった。ついでにバケツを放ったのは

男の方だ。何かこの人、さっきから女の方の名前がバレないように立ち回ってないか？　そんな疑問が進藤に浮ぶ。
「いいねえ相沢ぁ！　負けてられないわ、あたしも張り切って正義ぶちかますわよ！」
リボンで纏めた黒髪を揺らし女が突撃。繰り出す連撃は男達を確実に打ち抜いていく。頬とか脛とか肋骨に肝臓、腹、鳩尾、止めに金的。用は痛いところに火線集中大砲火。
叩きのめしたいと、思っていた進藤を以ってここまでするか？と同情させる惨状だった。
「……やっぱりだ、あの人だったんだ……」
バケツの直撃を受けたクラスメイトもようやく目を覚ましていた。這い蹲るように進みこの場を去ろうとしている。その唇が恐怖と共に、闖入者である女の名を告げた。
「……先代鬼風紀死刑執行（レディ・ギロチン）・春日井戒理！」
轟いたその指摘に、安藤達は一斉に固まる。
「い、一夜にして雷斗仁愚の精鋭三十名を病院送りにした、あの春日井戒理か！」
「乗り込んできた他校の族をバイク諸共素手で蹴散らしたという、ツキガクＯＧ！」
「直感裁判（フィフティー・フィフティー）・樋浦要を以って敵わないと言わしめる、歴代最強の鬼風紀！」
「……春日井さんって、相変わらず自己主張の激しい人生送っているよね」
呆れた風に言う少年の冷めた視線を受け、隣の少女は文句ある？的に見返した。
「い、いや待て……それよりあの隣に立つ男……！」
進藤は言われて男を見る。短く刈り込んだ金髪に鳶色の瞳。首にエスニック的なアクセサリーを吊るしたネックレス。半袖のカラーシャツからは鍛えられた腕が見えた。
進藤には強そう、という感想しか出ないが、安藤は違ったらしい。

「金髪、首に巻く鴉の羽根のネックレス――相沢桂か！」
今度こそ、安藤達は恐慌した。その顔から畏怖と畏敬以外が削げ落ちる。
「路上の掛け試合で百人抜きを成した喧嘩王！」
「災駆龍の頭をサシでぶち倒したという、あの！」
「春日井戒理と地獄の九本勝負を繰り広げた生ける伝説！」
「あらあら、随分と慎み深い人生ですね？」
にんまり、と意地悪く笑いながら肘で脇をつつく戒理に桂は本気で厭そうな顔をする。
「いあ、いや、ちょっと待ってくれ、下さい？　ははは、厭だなあ、僕達、単にじゃれ合っているだけでして」
そう言って安藤が肩を抱こうとするので半身を逸らし躱した。その顔には本気の殺意が伺えた。
「すっ、すいませんでした！」
もはや、それしか方法がないと言わんばかりに、安藤含む五人は一斉に土下座った。
「あら、自分の非を速攻で認めて、男としてのプライドを捨てての土下座なんて、中々にいい心がけね」
「じゃっ、じゃあ」顔に、一縷の望みを得たことで明るさが差した。だが、
「で、伝聞で知っている貴方達に問います。貴方達の知っているあたし達は、そんな薄っぺらい土下座程度で振り上げた拳を下ろすような、そんな緩い正義をしていたのかしら？」
投げられた視線は、ギロチンの鋭利さを宿していた。
「まあ、アレですアレ。僕等を前に僕等の神経逆撫でするような行為をした、そんな自分達の迂闊さを呪ってください」
浮かべる微笑には、肉食獣の獰猛さが滲み出ている。
いや、まあ、何ていうのかな。
進藤はこんな時にどうすべきか思考する。二つ名の通り執行される死刑を前に、合唱だけはしておいた。

「イタリアンプリン、アイスティラミス、たっぷり苺のモンブランとレアチーズケーキに杏仁豆腐パフェと抹茶パフェをお願いするわ」
「海藻サラダ、採りたてレタスサラダ、トマトサラダ、ほうれん草のソテー、コーンクリームスープに野菜ときのこのピザでお願いします」
「ギャグですか？」
『いや、マジだけど？』
オーダーを取りに来た店員の顔が若干引きつっている。気持ちはまま解る。
「ほらほら、ええと進藤君だっけ？　後輩の不始末に対する詫びなんだから、君も頼む、頼む」
店員の、オメーは何縛りだ？　みたいな視線が痛い。
「ど、ドリア一つ」
進藤は現在、近くにあった軽食店（桂がぶん投げたポリバケツの店）に来店していた。
理由は、戒理が今言った通りらしい。お礼を言うのは進藤のほうだと思うのだが二人は聞く耳持たなかった。
「それにしても、すごいオーダーしますよね」
「糖分に殺されるなら本望よ、これ即ち女の極み」
「肉は嫌いなんだ、匂いで吐く」
「はあ」などと気のない返事をしながら、進藤はようやく思考が回復してきた。
（それにしても、春日井戒理に相沢桂、か）
一年である進藤とは入れ違いのため顔までは知らなかったが、ツキガクに通うものなら誰しも一度は名を聞く人物だ。
二人の逸話はさっき安藤達が説明したような物が他にもごろごろしている。片や鬼風紀として学校の平和を守り、片や孤高のアウトローとして夜の街に君臨するカリスマだ。
前者は要が敬愛していた為に耳にタコができるほど聞かされ、後

者はその人に匹敵する敵として同じく話された。水と油ならぬ火と油。混ざらぬのでなく燃え合うような関係とは要の言であり、常に激しく激突しあい白黒付けるために行なわれた九本勝負は、結局四勝四敗で卒業日を迎えてしまったという。

一説には二人は高校を卒業した後、決着を付けるべく最後の一勝負を繰り広げているとも噂されていた。

続々と並べられるオーダーで魔境と化すテーブル、ドリアを口に運びながら、

「そう言えばお二人の進路は？　今日は休講ですか？」

ツキガク時代の話は良く聞くが、大学に行った後の二人の話は聞かない。どういう進路に進んだのか、興味から尋ねてみる。

「僕等は大学には言ってないんだ」

桂はそう笑うと懐から一枚の名刺を取り出した。渡された進藤はそこに書いてある文字を読む。

「ユーティリーティーワーカー……？」

名刺には聞きなれぬ職種と桂の名前が書かれていた。進藤が首を傾げるのを見ると、戒理が何故か勝ち誇った笑みを浮かべる。

「訳せば、何でも屋ってことになるんだよ」

「ほれ見なさい、何でも英語にすりゃいいってもんじゃないでしょ？　全然通じてないじゃん！　あ、これ私のねー」

そう言って戒理も名刺を出す。変っているのは名前くらいで、会社の住所も電話番号も一緒だった。

「二人で事業を起したんですか？」

「そんな大それたものじゃないよ」進藤の驚いた眼差しに桂は軽く手を振る「無名の零細企業だからまず仕事がない、殆ど遊びさ」

「確かに、犬の散歩に庭の手入れとか、普通に日雇いした方が儲かりそうな仕事ばっかりだしね。何か高校時代のバイトの延長って感じだわ」

「オマケにあんなオカルト紛いの仕事取って来ちゃって」

桂は飲み干したグラスの氷を口に放ると、一噛みで砕き咀嚼する。

どういう歯してんだろう。
「オカルト、紛い？」
うん、と桂は頷き、
「十一桁の零という名の制裁人……聞いたことないかな？」
その名を告げた。

篤倉市外の一角、高級住宅街に一つの舘があった。
高い塀で敷地を囲う要塞めいた舘は赤煉瓦作りの重厚な洋館であり、敷地の中にある洋風庭園には季節に合わせた色とりどりの花が咲き乱れていた。庭園の中心には噴水があり観光名所にでもなりそうなくらいに見応えがある。
一枚の名画の様に栄える舘は神崎一門に在籍する綾瀬の邸宅だった。当時の綾瀬家頭領が上尾に行き着き白銀に忠誠を誓った後に築いた物だ。
二階の、洋風庭園を一望できる部屋に一人の男性がいた。
二〇畳を超える部屋には上質な赤絨毯が敷かれた部屋には所狭しに本棚が置かれている。その他一切の家具はなく、むしろ必要ないと暗に示しているのかもしれない。
「進展なし、か」
男……綾瀬達巳はそう呟くと中指で縁なしの眼鏡の位置を正した。
「村木班捉えられない……増援すべきだな。橙の隠密能力でこうも逃げ続けられるのは異様だが」
ふむ、と綾瀬は思考する、それを遮るのは軽いノックの音だ。
「入れ」綾瀬の短い応答の後、ドアが開き屈強な青年が入室した。記憶と照らし合わせるに現在林檎売り捜索に駆り出している村木班の一員であった。
「どうした？」
言葉の意味は表裏に一つずつ込めた。表が、この部屋への訪室を行うレベルの報告内容についてであり、裏には訪室権は班長にのみ付与しており、一般班員の男が何故ここに来たか、ということであ

る。
「はい」と男は一度答えた数秒の時間を沈黙に要した。この部屋に訪れながらもその報告を逡巡する、そんな素振りに綾瀬は訝る。
「村木班長と連絡が取れません」
意を決した様に告げられる報告に、綾瀬は表情を変えず応じた。事実何も感じていない、出来の悪い小説でも読んでいる様な心境である。
「昨夜、市内にごく短時間ですが高密度のレルナが発現し、即座に偵察隊を投入。現場は無人でしたが、現場には戦闘の痕跡がり、更に遺物級具象《竜の喉》と人間の右腕が放置されていました、識別印はC‐?です」
綾瀬の私兵団に支給している具象にはそれぞれ所有者専用の記号を烙印してある。現場にあった《竜の喉》は村木が携帯していた武装でまず間違いないようだった。
「林檎売りに接触、そして倒されたというのが妥当か……?」
自ら出した推測に、しかし綾瀬は納得できない違和感を抱く。
ドゥルウの特殊能力である『皮被り』を考えれば体を一部であろうと残すことは不可解だ。違和感を肯定するように青年の報告が続いた。
「……同時に水澤班の班員が現場で錯乱しまして……」
この世界で生きるなら身内の死など雨が降る程度の割合で遭遇する。その程度で錯乱するなど正直、覚悟が足らないと一笑に付す他なく、態々伝える内容でもないだろう。
それを伝えたからには続きがある、綾瀬は先を促した。
「その班員は村木班長の遺物級具象と腕を見て『私が殺した』と泣き崩れまして……」
直接報告など経験がないからだろうか、男は説明慣れしておらず言葉にまとまりがない。
「その班員はプライベートで村木班長ともめていまして……先日、喧嘩の流れで興奮しある噂を試してしまった、そう自供しました」

そして核心。

「《十一桁の零》に村木班長の制裁を依頼した、と」

第四章・十一桁の零

退屈と停滞は思考を腐らす猛毒だった。
欲するのは絶間ない変化と激進。
未知を領(し)る、という行為の追及。
積み重ねた知識がバベルの頂きに達するまで。
私の心は伽藍堂、満たされない欲が疼くのだ。
覚醒動悸、柊司の場合。

「赤い衣装の女らしい」
桂はそう切り出した。
「この辺りで流行りだした噂でね０００-００００-００００という番号に電話を掛けて憎い人の名を告げると、赤い衣装の女が手斧を携え復讐を行うってものらしい」
心臓が、一度強く鳴った気がした。
「まあ被害者しか知るはずのない犯人像まで作りこまれている時点で明らかに創作だろうけどね」
「あら、作り物を作り物として楽しめないあんたの感性に乏しいのよ」
「煩い、都市伝説のような迷惑存在はおまえ一人で十分だよ」
「というか僕の感性は関係ないだろう」そう付け加え、グラスの水を一息で飲み干す。
「オカルト紛い、つまり件の《十一桁の零》のことでね。様は検証に付き合うことになったのさ」
「危なく、ないですか？」
桂は片手をひらひらさせながら否定した。
「二度目だけどそんな迷惑存在はこいつだけで十分だ、この界隈じゃわりとメジャーな噂になりつつあるみたいだが」
桂は柔和な笑みで進藤に問う。

「例えばそんな赤い衣装に手斧を持った女、例えば不可解な傷害事件、そんな話を耳にしたかい？」
「ないです、ね」
「現実なんてそんなものだ」
もし本当にそんな噂の怪人が存在し、有名な噂なら既に何人かは試しているだろう。しかし、怪人の実在を証明するような確かな痕跡がない。
「ガセと見ていいだろうね」
桂の断言に進藤はどこか安心している自分に気づいた。
（要はまだ、《断罪するだけの存在》となっていない、ひとまずはそういうことかな）
だが無視するには看過できないものも感じる。
（符号、だよな）
手斧は《戦血君》樋浦要の武装だ。真紅の衣装はともかく、恨みを晴らす、罪を裁く、そういう属性はどこか彼女を思わせる。
ならば、
（林檎売りは言った、言い切った、あいつを勝たせると、今は種を蒔いているだけだ、と）
全く関係ないはずもない。
（むしろ、これは林檎売りの仕掛けだろうな）
あいつが企てる《戦血君》必勝のシナリオの。
「えっと、一ついいですか？」
この二人の仕事が林檎売りの仕掛けなら、そこにドゥルウが関わるのは確実。多少無茶でも一般人であろう彼等にドゥルウの相手は不可能。何より敵対する者の仕掛けならば潰す必要がある。
（僕にはこれがあるし）
右の拳を強く握り、言葉の続きを待っている桂に進藤はある頼みをした。
「僕もそこに同行させて下さい」
虚をつく懇願に桂の顔には困惑、戒理には何故か「お？」という

期待が過ぎっていた。
「どういうこと？」
「僕もそこに連れて行って欲しい」
「うーん」桂は困り顔だ「物見湯山としては危険だよ？」それは諭すような声だった。
「オカルトを肯定するつもりはないけど、かといって絶対安全とも言えない」
「それも理解しています。でもボク、腕には自身がありますから」
「ほお」と桂、「へえ」と戒理。まあ、戒理よりも小柄で特に鍛えた風にも見えない年下にそんなこと言われてもあんまり信用はないだろう。
「いや君面白いわ」
くすくす、と笑った後、戒理が瞳を真剣にして問うて来た。
「何か色々訳ありみたいじゃない、君にはそこに行くことが必要なのね？」
「はい」
「うん、決まり、ならいいわ。相沢、連れて行きましょう」
「……春日井さん」
「別にいいでしょ？　それに彼、とても困っている風じゃない？　私達は何でも屋よ？　解る？　何でもするのよ。正義っていう言葉は好きだけど、正義の味方は好きじゃない私が、何かの味方になるとしたら、それはきっと困っている人なのよ。
だから私は何でも屋になったの」
「僕は思いっきりとばっちりだ」
「それが九本目の勝負だもの、嫌ならさっさと負けを認めるのね」
「さて、進藤君、行こうか。ユーティリーティーワーカー相沢桂。君の為になれるよう尽力するよ」
華麗に無視した桂が席を立つ。進藤も後に続いた。背後から「このヤロ」という声と共に戒理が追ってきた。

「だーかーらーメイド服に猫耳は必須装備じゃん！」
「ユカちゃん思うに、隊長を焼けばそれで万事解決する気がする」
右目の封を解こうとする結花を岩倉のごつい手が頭を抑え制した。
岩倉の営む喫茶店で行われる喧々囂々のやりとりは、端的に表せば利穂のお人形の着せ替え遊びである。
因みにお人形は樋浦要であり、服は利穂が買ってきた物だ。
要の着替えを調達しにいった利穂の帰還、その物資の数々を開封し色々着せ替えている間に隊員達が戻りぎゃあぎゃあ言い合っているわけである。
メイド服を着込んだ要は頭上に？を浮かべ置いてきぼりだ。他にもゴス着物、ナース服、巫女衣装、軍服、お前は普段こんなものを普段着としているのか？　思わずそうツッコミたくなるラインナップである。
司が用意した服に着替えてもらっている間に、利穂は渋々ながら散らかした服を片付ける。
「やー」そんな彼女から零れるのは子供のような弁明だ。
「可愛いものを愛でるのは性ってやつでしょ？　やっぱ？」
「時と場合と限度を理解しよう、あと本人は普通に鬱陶しいと思うぞ」
「道理など説くだけ無駄だ」
個室から戻ってきた司が辛辣に言い捨てた。
「それで改めなおすような人種ならそもそも、こんな奇行に至らない」
にべなく言い切る司の横に要はいない、部屋に置いて来たようだ。
「まったく無駄な時間を要した」
特に感情がこもっていたわけではない。ただ、今までの付き合いの中ら皆は知っていたそれが柊司の前置き、なんらかの行動に移る前のフリであると。
その言葉だけで守屋達は意識せず姿勢を正し傾聴の態度となる。
既に心境は戦闘態勢にシフトされた。

「ユカちゃん思うに、司っちが隊長やればいいんじゃない？」
隊員の共通意思を結花が代弁し、皆が深く頷いた。
利穂が部屋の隅での字をなぞりだした。

「やることはいつもと変わらん」
利穂が受けたという依頼を、どこかぞんざいに説明する司は傍目に見ても面倒臭そうだった。
「敵を斃す、それだけだ」
「敵の詳細は？」
「不明」岩倉の質問に司が返し。
「新顔か」司の返答に岩倉が納得した。
一呼吸。
「敵は《十一桁の零》と呼ばれている。このドゥルウ、どうにも妙だ」
架空の番号を媒介に対象に傷害を加える性質について軽く説明が行われる、案の定真っ先に反応したのは利穂だ。
「憎い奴倒してくれるなら三郷にでもけしかけてみる？」
「やるなら好きにしろ、第二の捜査を掻い潜れると信じるならば、な」
「あら、冗談よ、冗談」
けたけたと笑う利穂に皆が「ほんとかよ」という疑念を抱く。因みに三郷とは第二作戦室の室長である。戦闘を担当する第一の土台、敵の戦力分析、作戦立案を担当する。
成功すれば自分達のバックアップが優れており、失敗すれば投入された兵士が脆弱なのだ、と断言する性悪で第一作戦室から須く嫌われている人気者である。
「どうにも噂が回るのが早い……意図的に流し広めている者がいると思われる」
「理由は？」
「情報が少ない……憶測だぞ？」

「聞くだけならタダでしょ？」
「普通に考えれば恐怖を煽り自身にレルナを集めている、というところだが」
数多の人間が同一の個に対して共通の意識を持つことで、それぞれの思いをその対象に注ぐ簡易儀式。戦争中、戦場の英雄などはこの効果の恩恵を多大に受けていたとも言われている。
「罪を裁く制裁者、そういう存在を流布することで自分への畏敬を誘発させてレルナを絞りとろうって魂胆なわけね」
「ああ、どう思う？」
「問題外、赤点で落第だわ」
一応の理があり、筋は通っていた司の推測を利穂は一言で斬って捨てた。
「やるなら少なくとも具現師組織が常駐するような場所は選ばないでしょ、得られるレルナも高が知れているしメリットとデメリットが釣り合ってないわ」
「だから情報が少ないと言っただろう」
司も己の論の穴が自覚していたようで反論はなかった。
「結局、当人に当たる他ないわけか、内容はどうなってんだ？」
「《十一桁の零》を検証する、そういう動きがある、我々はその場に立会い本丸を叩く。囮捜査だな」
質問は？　司の問いに皆が首を振った。
「初見の相手だ、抜かるなよ？」
統計的にドゥルウとの戦闘による死亡で最も多いのが初見の敵との戦闘だ。
（嫌でも気が引き締まるな）
「はいはい、じゃあご飯でも食べて出かけましょう」
緊張が高まる中、間の伸びた声が場を弛緩させる。
「マスター、適当に作って、私の奢りで」
「隊長のツケは約三ヶ月分滞っているわけだが？」
「あら、口約束なんて所詮は確率論よ？」

「踏み倒す気満々やな！？」
それでも料理を作る辺り岩倉の懐の深さを感じた。
「銀髪、あいつに持っていてやれ」
早めの夕食を取る形となり、要の分も作った岩倉が守屋にトレイを差し出す。デミグラスソースの掛かったオムライスだ。
「あいよ」
片手で受け取り個室に向かう。「夕飯だぞー」と声を掛けてドアノブを回した。部屋に入ると冷たい風が頬を撫でた、ひんやりとした空気に包まれながら守屋は数秒凝固。
「おいおい」
窓は全開。
カーテンが風に揺られていた。
部屋は無人であり、かくれんぼでもしている訳でもない。
「これってつまり」
樋浦要が消えていた。

レストランを出た後、進藤は桂の単車の後ろに乗り一〇分程掛けて移動、篤倉運動公園にたどり着いていた。空気は冷え夜の帳が落ち始めている。
「人もまばらだ、場所としては上々か」
緑と調和の取れた潤いある敷地は三四ヘクタールに及び、サッカー、野球、テニスなど殆どのスポーツが行えるコートの他、体育館や温水プール、遊具にバーベキュー場というレジャー施設も完備している人気スポットだ。
「それで、この後の展開は？」
「夜七時に《十一桁の零》の検証が開始される、その後は本命が釣れるまで待機だね」
「検証者は？」
「周りをガチガチに固められたら謎の怪人だって出てきにくいでしょ？　検証者には悪いけど本丸が釣れるまで我慢よ」

そう言って戒理は近くのベンチに腰を降ろす。桂と進藤も続いた。
「……現れるでしょうか？」
「さてね、僕としては何事もなく終わってくれればそれでいい、ベンチで座っているだけで謝礼が出るなんて最高だと思わないかい？」
桂が意地悪く笑う、進藤も釣られて笑、おうとして引きつった。
なんだかさっきから嫌な予感を感じる。
（杞憂だよな、もしくは考え過ぎだ）
緊張の所為と決め付けて桂と戒理の会話に戻る、間もなく七時になる。

「結構集まっているわねー」
運動公園を行く利穂はすれ違う利用客を一瞥しながらそう呟いた。
「顔見知りでもいたか？」
「綾瀬主導の検証だからやはり『神崎一門』関係者が多数ね」
「綾瀬がこの手の検証を主導するのは珍しいな」
「そうね、綾瀬に限らず『神崎一門』は銀に脅威となる存在にしか興味を持たないからね」
不意に静止。
「見える？」
利穂の視線が木々の合間を抜け、すり鉢上の、恐らくスケボーなどの練習スペースであろう窪地を指す。
その一角、斜面に足を投げ出し俯いた女が携帯を握り締めていた。
「アレがそうか……一人か？」
「自分の名前を口にするみたい、検証者が一人で済むようにね」
検証者を確認した司は具象を発動するか迷い、辞めた、変わりに一つの疑念を問う。
「守屋達だけで大丈夫だと思うか？」
それは本来この場にいるはずの、しかし寸前で別行動となった隊員達への懸念だ。今まで別行動を取る際、司と利穂がどちらかにいた。

今回のような分け方は初なのだ。
「わたしとしては、そろそろ銀髪に一皮剥けて欲しいのよねえ」
「あの成長速度は異常だと思うのだが……」
僅か半年で『藍』の位階まで到達した異才にこれ以上何を望むというのか。
「あら、戦闘に関しては全然足らないわ、自分で手一杯で全然周り見ないもの」
「それで結花達と組ませて擬似リーダーをやらせることで視野を広げさせたい、と？」
「気を配るってことを意識すれば成功ね、今まで考えなかったことに気づけば取っ掛かりになるもの、どうせ戦闘になんてならないでしょうし」
「人が悪い」
と、言うものの、司も同意する部分があるからこそ反対しなかったわけで、それを踏まえれば同罪だった。
「そろそろ人払いの具象で擬似封鎖が完了している頃合、鬼が出るか蛇が出るか」
「空振りという選択肢も忘れるなよ？」
来ること前提で話している利穂に痛い指摘をしながら検証者に目をくれる。
実際、司は今回の検証は茶番と踏んでいる。思考通信による護衛の統制も組んでいない、作戦への意識の低さが覗えた。
こういう妙な噂が流れ始めた時、そこにドゥルウや具現師が関与していないか実際に試して真偽を図る。これは今まで何度と行いそして何事も起こらなかった一種の防災訓練、そんな心境だ。
検証者が携帯を耳に当てた、番号はコール、唇が動く、復讐して欲しい名を告げたのだろう、暫くして携帯を顔から離す。
そして、それが起きた。

「――ッ！？」吐息を殺す司「解析！」動揺を叱咤する利穂。
司はその場で待機、利穂は既に疾駆を開始している。
よりにもよってそう来たか！
起きていたことは全て見ていた。
携帯をコールし、顔から離した、まさにその瞬間、検証者の身体から青色のレルナが昇り、そしてぐらりと倒れたのだ。
精神疲労による失神ね。
即座に断言する。それほど凄まじい量を一瞬で、そして残らず奪い尽くしたのだ。
そう、奪いつくした。
（司、解析具合は？）
思考通信は即座に返る。
《完了！》
敵は制裁人、依頼した後、制裁を起こすまでに時間差が存在する。ならば具象は展開せず、敵に刺激を与えないように散りドゥルウの接近を警戒。その思考が仇となった。
《類別：事象種。等級：黄。《十一桁の零》にコールすることで依頼者のレルナを搾取、顕現する仕組みのようだ》
（依頼後、制裁対象の場所に即時出現して斃したら消え去る……理想的な暗殺者ね）
レルナが上空で渦を巻いている。そして少しずつ形を成していた。
《絶対数が少なすぎるから思考から抜けていた……忌々しい》
（それはわたしも、てか、ここにいる全員よ）
例えば、車を皮被りしたドゥルウより。
例えば、剣という形を持つドゥルウより。
事象種。
それは、人の理で計れぬドゥルウにおいてもなお群を抜く。
曰く、噂を皮被りしたドゥルウであるという。
女が現れる。噂通り、レッドドレスに身を包み、右手にハチェットを携えて。

「罪には罰を」
叩いた鐘のように良く響く声だ。
「咎には裁きを」
直撃すれば即死以外を想像できない、そんな無骨な手斧を振り上げる。
「悪には正しき審判を」
（間に合わない――っ！）
手斧に加わる力が増した。制裁対象は失神しており自衛能力は皆無、振り下ろされる一撃に為す術はなく命を絶たれるだけだ。
《利穂、避けろ！》
届かない距離、埋まらない間合いをどう対処するかに没頭していた利穂は司の檄で我に返り、すぐさま跳躍した。
緑と黄のレルナが爆ぜた。

その姿を認めた瞬間には飛び出していた。
桂が呼び止めていた気がする。
戒理が押さえつけようとしていた気がする。
それらを振り切り、進藤は右手に秘める切り札を解き放った。
手の平から抜刀された両刃の西洋剣。鍔と柄に歌う女が刻印された美しい造詣の剣にありったけの力を込めてなぎ払う。今まさに横たわる女の命を奪おうとしていた手斧が上空に跳ね上がった。
「哀叫（Heat）しろ！　号叫（Heat）しろ！　絶叫（Heat）しろ！　Ｂｌｏｏｄ　ｔｏ　ｈａｔｅ！」
再び吼える。爆発的に生まれるレルナは全て剣に一点集中、並のドゥルウであれば一撃で蒸発する威力が篭る。
手首を返し剣が翻る。西洋剣は無防備のわき腹に向かい、そして刃を通す、《十一桁の零》は一刀の下に両断された。

戦闘終結の静寂は喜びより猜疑、懐疑の念が多かった。
「何だ、アレは？」

思考通信すら忘れた司が信じられないように口に出した。
「黄級のドゥルウを一撃で撃滅したというのか……？」
乱入者の規格外の戦力に驚きを禁じえない司であるが、利穂はそんな言葉を聞いていなかった。
身体を両断され、恐らく核である《心臓》も破壊されたのだろう。求心力を失い身体を構成するレルナが端から解けている。
このドゥルウは間もなく消える。
それだけなら何の感慨も抱かなかった。
「　　」
自分で自分の声が聞こえない。利穂は口を手で押さえ崩れ行くドゥルウの顔を見ていた。
唐突に姿を消した、樋浦要の顔を。

「モーリス・メーテルリンクの童話に学ぶに、探し物は探し物を探している間には見つからんように出来ているようや」
「ユカちゃん思うに、迷子の捜索二時間にそんな大層なこじつけしてもチルチルとミチルに申し訳ないと思う」
「全くだ」
なんてことはない。
彼女は人の心配をよそに、気に止めず戻ってきた。
「たくよお、いきなり消えたら驚くだろ？」
次からは書置きでもしてくれ、そんな冗談と共に笑い掛ける。
「遅くなったが飯にしようぜ？　マスター温めて貰えるか？」
「任しとき」
守屋達の談話に、対する樋浦要はいつもどおりの無表情で見つめていた。

第五章・暗躍する者

その道は茨だと彼は言った。
狩人にして巻き餌、砂糖にして毒薬。
生き続ける限り終らない宿命。
死ぬことでしか終らない運命。
常にその身を危険に晒すこととなる。
だけど、二人で生きると決めたから。
だから、その道以外は歩けなかった。

覚醒動悸、三隅梨穂の場合。

荒い吐息を整えながら進藤は剣に残る手応えに思わず舌打ちした。
(温過ぎる……最近出始めた要の偽者か)
無駄足を踏んだという不快感が徒労感に変わり軽く眩暈となる。
揺れる体を支えていると、視線に気づき顔を向ける――近くで尻餅をついていた女と目が合った。塵を払いながら立ち上がる、女の顔には軽い不審が覗えた。
(思わず飛び出したのは軽率だったかな)
低位位階といえドゥルウを一撃で倒す、それは尋常ならざる手際だ。
(目立つのは好ましくなかった……けど)
眠る様に倒れ付す少女を見て、命を守れたので良とした。
「ま、とりあえず礼を言っておくわ」
「え?」
と進藤は再び女を見返した。無傷であり軽傷すら帯びていない彼女から礼を言われる所以が分からなかった。
「縁があるのよ、その子」
「ああ」
なるほど、と納得した。つまり命を助けてくれてありがとう、と

いうことだろう。
「枢機機関第四分隊の三隅利穂よ」
「進藤響です」
差し出された手を握り返すと背後からスーツ姿の女性が歩み寄ってきた。
「同じく第四分隊所属の柊司だ」
教師的な雰囲気を持つ人で無意識に畏まる。「別に取って食ったりしないわよ」と利穂が笑った。
「で、桂。この子は新しい門下生なのかな？」
「違うよ、そもそも具象持ちだと気づいたのは一秒前だ」
進藤の後ろに言葉を投げる利穂、振り返る先には桂と戒理が困った風に笑っていた。
「一般人だと思っていた人物をここに連れてきた、と？」
「そうよ、本人がどうしてもって言うからね」
悪びれない戒理に司が口調を強める。
「軽挙妄動だな、何かあったときにどう責任を取るつもりだ」
「当人の選択よ、責任は自己で負うものでしょ？」
言い切り、戒理は付け加える。
「ま、私と相沢がいて問題なんてあるはずないしね」
絶大な自身を孕む一言、反論はなかった。
ていうか。
（仲、悪い、のか）
「君って具現師暦浅い方かな？」
表情から内心を読んだのか利穂が耳打ちしてきた。
「……先月からです」
「なるほどね」
からからと笑い、「なら」と笑みを消す。
「覚えておきなさい。彼らは、『神崎一門』は、総勢七十余名の《紫紺》から成る篤倉最強の具現師集団。で、彼等は第九席春日井戒理と第十席相沢桂、八傑入りを射程に入れている最上級の具現師よ」

「《最強》三隅利穂からそう呼ばれるのもこそばゆいな」
耳ざとく聞きつけた桂の苦笑。司の態度に感化されてか桂も嫌味な口調になっている。
篤倉で上位の具現師達が固まっており、しかも空気が悪い所為か遠巻きに見ていた他の具現師達も早々に散っていった。数人が倒れている検証者を抱えていた。
検証者の移動を行っている一団、そのグループのリーダーがこちらに向かってきた。先ず出たのは礼だ。
「まずは感謝を、部下を救ってくれてありがとう」
明らかに進藤より年上である。下手すれば父や母と同年代。そんな壮年の男性から頭を下げられ進藤は言葉を窮した。
「あれはバカな奴だ……いや、わしも人のこと言えた義理ではないのだが」
男の顔は自責の念で歪められていた。
「彼女、一回試しているのよね？　《十一桁の零》を」
「……お前は、またそういう大事な話を」
「あんまり広めんでくれと言ったのはわしだ」
疲れたように息を吐き、男は済まないと詫びた。
「あれは恋人を持つ男に恋をした、その時はその事実を知らなかった、だから諦めろとは言えん、気づけば自然にどうにかなる、そう思った事が失敗だった」
相手も自分のことを好きなのだと思い込み、そして真正面から拒絶された。裏切られたと思った彼女は、勢いで噂の《十一桁の零》を試したという。
「救われん話だよ」
「そういう顛末か」
男の悔恨に構わず司は非礼な疑問を投げかける。
「部下の恥は己の恥、よって不始末はなかったことに、そういう意味での検証……綾瀬らしいといえば綾瀬らしい、なら、その話を私達にするのはまずいのではないか？」

「隠蔽隠滅は綾瀬の十八番、だけどわしはあったことをなかったことにはできんと思っている」
恥は晒される前に隠す、それは間違っている、見つめ認めるべきだと男は言う。
その言葉が、進藤の胸に突き刺さった。
「頭領にばれたら首が飛ぶわね、ま、嫌いじゃないけどそういう性格」
さて、と利穂は背筋を伸ばした。
「何はともあれ一件落着、お開きとしましょうか」

篤倉運動公園を背後に駐車場を進む五人が進む。
司を先頭に、桂、利穂と進藤が並び、最後尾に戒理の順で車の間を縫いながら薄暗い駐車場を進んでいる。
「お開きじゃなかったのか？」
進藤を送ろうとしていた桂は、何故か付いてくる利穂の真意が掴めないらしい。
「あら、固いこと言わないの、期待のルーキーだから唾くらい付けてもいいでしょ？」
「……この女が言うとどうにも冗談に聞こえん」
電灯の曖昧な光が照らす中、言葉少なく進むと桂の単車、そして利穂のステーションワゴンまでたどり着いた。
切り出すなら今だろう。利穂は最終確認を行う。
（進藤響は樋浦要の同級生、間違いないわね？）
《ああ、戦闘記録を参照した後、洗ったからな。クラスメイトで間違いない》
思考通信を終えると、利穂は口火を切った。
「進藤君、覚醒は先月って言っていたけど、もしかして切欠は『大侵略』かしら？」
『大侵略』？と不思議そうな顔をする進藤に対して残る二人は苦い顔になった。各々思うところがあるのだろう。

「九体の真紅級ドゥルウ……あの怪物共が現れた戦争、だ」
司が説明し進藤も得心したようだ。短く首肯した。
「あれは未だに謎過ぎる、倒れたのは四体。《水銀の竜》《装飾師》《赤毛巨猿》《有翼白鮫》。同じムエリカ派を名乗りながら同属同士で争い目的不明の大暴れをやってくれた」
利穂はワゴンに背を預けると夜空を見上げた……下弦に痩せる青い月が目に入った。
「逃げおおせたと思っていた一体、《林檎売り》も先日再確認された、あろうことかまだ篤倉に潜伏していたわ」
ねえ、と利穂は尋ねる。
「君はどう思うかな？」
《林檎売り》という言葉が出た瞬間の進藤の強張りを利穂は見逃さなかった。
「どう、というのは？」
（埒が空かないわ、切り札使うわよ）
《好きにしろ》
「わたし達、第四分隊は樋浦要を保護している」
途端、進藤の態度は一変した。
まず硬直、そして静かに飲み込み、最後は冷たく零度の意思を宿した声音で告げた。
「それは、本当なのか？」
「ええ、何言っても反応ないし、司が名前調べるまではご飯食べさせるのにも一苦労よ」
その状態に心当たりがあるのか、無事でいる彼女に進藤は安堵しているようだ。
「これはまだ公表されていない事実だが」
司は一瞬視線を切り桂、そして戒理に一瞥する。不自然な間を置いて残りの言葉を吐き出した。
「先月から黄金色の幻想色の確認報告が多数挙がっている、つい先日もうちの生徒が研究室に飛び込んで来てな、見間違いだろうと一

蹴したのだが」
　悪いことをした、と司は自嘲的に笑う。
「《林檎売り》から《戴冠式》《戦血君》等、報告を裏付ける様々なキーワードを得た」
「進藤君、出来れば教えて欲しい、君は今、篤倉に起きていることを何か知っているのかな？」
　興味の視線が進藤に集まる。彼は無言、瞑目。沈黙を三秒ほど守りそして答えた。
「『大侵略』は九体の真紅級による篤倉侵攻、それは誤りです」
　進藤は続ける。
「あれは九柱の黄金と九体の真紅による王位簒奪戦だ」
　どうゆうことか、尋ねようと思ったが寸前で辞める。今はまず説明を聞こうと考え直した。
「九大魔王第九位《侵食王》は自分の《心臓》を九つに分けて九人の具現師に移植した。移植された九人は移植が元である毒に感染、その解毒条件は自分以外の八人の心臓を奪うこと、それを為せば毒は完治し、魔王九位を正式に受け継ぐことが出来る」
　一息で行われた説明はもろもろの事情をおおまかにしたのだろう。第三者に分かり易くした分、細かい事情を述べていない感がある。
「何ていうか、まあ」
　桂も衝撃を受けているらしく、珍しく動揺しているようだった。
「つまりアレね、今この篤倉には九分の一の魔王、略称「なんちゃって魔王」が九柱潜伏しているってこと？」
「ツッコミどころしかねえよ」
　桂は首を二度振ってから頭を抱えた。
「九体の真紅ですら三本足を出陣させて、四体斃すのにやっとだった。それが今度は九柱の魔王だと？　上尾八傑を出陣させても足りないな」
「四柱は撃破されているので残るは五柱です、魔王の場合、倒すというより吸収ですので純度はむしろ上がりますが」

利穂は即座に斃すという方向に持っていった桂に聞かせるように問う。
「待ちなさい、移植、と言ったわね、進藤君」
殆ど直感であった齟齬。
「『皮被り』ではないのね？」
真紅級ドゥルウ《水銀の竜》に遭遇し即死したとされる樋浦要。防御手段は皆無であり生き延びる目は絶無。
もし、そんな方法があるのなら。
「その言い回しの違いには明確な差があるのかしら？」
利穂は結論した、樋浦要は恐らく九人の移植者の一人である。
次に疑問した、樋浦要の今の状況は『皮被り』では説明できない。
「九人は『皮被り』されていない、彼らは人間のまま魔王の力を譲られた」
「その副作用があの亡失ってわけ？」
進藤は頷いた。
「要は、どんな状態ですか？」
「さっきも言った通りよ、こっちの呼びかけへの反応がとことん希薄でさ、色々と困っていたとこ、おまけにいきなり姿を消しちゃうしさ」
「……消え、た」
「ええ、今部下に探させている。心当たりがあるの？」
進藤は答えない。ただ変わりに唇をかみ締めた。
「……確認してみたが、樋浦は見つかったようだ」
「……マジ？」
「嘘を言ってどうする？」
利穂は思い出す。消え去る寸前に見た《十一桁の零》の顔を。
あれは紛れもなく樋浦要の顔だった。
「こっちの仕事が終わったことも伝えた。マスターが喫茶店を営業するようだ」
送るぞ、と司が視線で告げる。進藤は一瞬迷うが桂が手をひらひ

ら振る。気にするなといいたいのだろう、一度深く会釈した。
そして、思い出した様に進藤は口にした。
「今の保護者は手ごわいって、それは貴方達のことだったのか」
電子ロックを解除した利穂の動きが止まる。
「それ……誰が？」
「《林檎売り》です、態々宣戦布告をしに来たのですけど、その時にそう言っていた」
「迂闊……！」
乱暴に運転席を開け放つと飛び込むように乗り込む。司も慌しく助手席に乗り込むと利穂の叱咤が飛んできた。
「ぼさっとしない！」
乗れ、という意味だと悟り進藤も乗り込む、とその後ろから続くのは声。
「手伝いは要るかな、隊長さん？」
「知っている仲だ、安くしとくぜ？」
「要らないわよ」
即決で却下しアクセルを踏み込む。座席に叩きつけられるような急発進で利穂は運動公園を抜け出した。
「断って良かったのか？　恐らく八割善意だと思うが？」
「あいつらを屋内戦で起用とか正気の沙汰じゃないわ、店潰れたらマスター泣くわよ？」
物騒な物言いに進藤の混乱は加速したようだ。
利穂は無視した。
「進藤君、もう一個聞いていい？」
是非より先に言い切る。
「《十一桁の零》は樋浦要の顔をしていた……それは何故？」
「敵が何を企んでいるかは分からない」
「つまり手段に見当はあるのね？　そしてアレはオリジナルの樋浦要でもない、って訳か」
前方に交差点、信号は赤で直進車線には三台の車が待っていた。

対向車線に乗り出し交差点に突っ込む。無数のクラクションとブレーキ音を置き去りにして無事通過。
「さっきから何ですか一体！？」
「《林檎売り》は言ったのでしょう？　今、樋浦要を保護している奴らは手ごわいって！」
怒鳴る進藤に利穂もまた怒鳴り返してきた。
《林檎売り》は樋浦要の保護者に目星をつけている。恐らく拠点、そして戦力も。
「そして今、わたし達は隊を分散した、分かる？　戦力を分散したのよ！」
「迂闊」ともう一度利穂が吐き捨てた。ようやく、進藤も事態を察した。
「《林檎売り》について知っていることを教えて」
利穂は己の予想を口にした。
「恐らく、樋浦要奪還に動いているはずよ」
岩倉の喫茶店は、今夜襲撃される。

岩倉が経営し結花が住む喫茶店『Ｒｏｏｓｔ』はねぐらという物々しい名前とは別に落ち着いた雰囲気の洒落た店である。　迷路の果てとまで言われる入り組んだ住宅街の片隅にあるその店は、立地条件と店主の凶面が相成って殆ど客入りがない。
なので、今日の様にゴールデンタイムに客が入る日は奇跡と言って良かった。
テーブル席に座る家族客を横目で見ながら結花は唸った。
「ユカちゃん思うに、そもそも戴冠式ってどういう感じで行なわれるんすか？」
「皮被り、みたいなものらしいな。つまり後継にワザと食われるわけだ、それで自分の全てを委ねる。規模が違うだけで、やっていることは前の共食いとおんなじだな」
説明に結花が嫌な顔をする。気持ちは分からないでもない。

「魔王は情報が少ないから放置で良いと思うぜ？　目下の敵はやっぱり《林檎売り》だな」
《戦血君》の騎士を名乗ったあのドゥルウを捕縛して、第二に引き渡せば恐らく魔王の有無は解るだろう。しかし、その捕捉手段が問題だった。
もし篤倉市にドゥウルが侵入すれば枢機機関や綾瀬の索敵圏に引っ掛かる。それを掻い潜る方法は、自己の能力を八割以上封印する『皮被り』だけだ。
そして《皮被り》中のドゥルウを索敵するのは酷く困難である。
「何時になくやる気っすね？」
「まあな」守屋は「あいつの所為でタダ働きになったと思うと、な。せめて休日返上分は稼がないと」
「ユカちゃん思うに、そもそもちゃんとした契約もなしに突貫したのが問題じゃね？」
「だよなあ。非番の夜に招集掛けられる隊員の身も知れ、と」
「これは次の給料日には隊長の奢りで決定ですね」
ここぞとばかりに団結する隊員達。まああの隊長が素直にそんな罰を受けるとも思えないのだが。
「五名しかいな分隊で追跡するってのがまず無謀か」
守屋が諸手を挙げて降参のポーズ、結花が反論する。
「ユカちゃん思うに、敵は黄金。この世に九柱のドゥルウ最高等級っしょ？　もうちょっと危機感持ったほうがいいんでない？」
無視して言いと言ったのにも関わらず蒸し返す結花に、仕方なく付き合うことにした。
「んー、神崎一門と連携を図っているとか、か？」
「ユカちゃん思うに、その神崎一門って強いの？　綾瀬とか嫌味な奴って印象しかないんですけど」
疑問、とうより疑惑に守屋は「嗚呼」と即答。
「余裕ぶっこいているだけだな。なまじ特大戦力者の集りだし、赤より下のドゥルウなんて蠅くらいのウザさでしかないんだろ？」

平安時代から銀の護衛を続けてきた神崎一族が興した武装集団、神崎一門。
護衛長、神崎興里、三本足、天宮眞子、美禄叶、鳳翼、四大将、玖珂秀玄、鵜飼将義、桐谷燈泉、綾瀬道総、総じて上尾八傑。
篤倉においての絶対権力を獲得後、一般的な活動は八傑の下、即ち序列九席以下が執り行うことになり、八傑は赤以上のドゥルウが篤倉に入場した時のみ発動する最終措置となった。
「ドゥルウの討伐は複数で執り行われる、それはドゥルウの戦力が単体で具現師数人から数十人に匹敵するからだ」
だが、と守屋と続けた。
「上尾八傑は単独でドゥルウを撃滅する、俺も結花も『大侵略』じゃ、世話になったから連中の規格外振りは知っているだろ？」
そうすっね、と結花の記憶も過去を掘り起こす。守屋も結花も『大侵略』の際に神崎一門に命を救われているのだ。
「話しを戻すぞ、あんまり悠長はしていられないと思うんだよ、《林檎売り》の能力、つまり領域の効果には謎が多い」
特に追及しなかったが二〇以上の無位の使役など、やはりどう考えてもおかしい。
隠蔽能力を持たない無位を大量に上尾に持ち込める理由、
（《林檎売り》の領域がもし、無位を増やすようなものならば、時間を置くのは拙いよな）
突然、椅子が勢い良く倒れる音が店内に響き渡り、反射で守屋は確認した。家族客の一人、七歳程度の子供がトイレに走る途中で滑り、勢い良くテーブルに突っ込んでしまったようだ。
「元気っ子、怪我はないか？」
カウンターから出てきた岩倉がのっしのっしと向う。少年は「大丈夫です」と笑顔で返事をして立ち上がると、倒した椅子とテーブルを丁寧に起こし始めた。
岩倉が一瞬不思議そうな表情を浮かべる、直に表情を戻すと倒れた最後の椅子に手を掛けた、同時、子供が飛んだ、飛燕の如く跳ね

上がる全身、縦回転と共に峻烈な蹴りを繰り出す。
完全なる奇襲、しかし、回転を終えた子供に浮ぶのは驚愕、埃を巻き上げながら岩倉の右踵が天井を衝き、そのまま雷撃となり振り下ろされる。
かくして、燕は落雷に打ち落とされた。フローリングに叩きつけられた子供は、そのまま横転し距離を稼ぐと警戒態勢で岩倉を睨んだ。
全てが終わってなお呆然とする守屋と結花、守屋のピアスが子供を指していることに気付き現状理解に至った。
「そう何度も同じ手くらうか！」
一喝する岩倉を家族客が仮面の無表情で眺めている、今までの団欒を拭い去り、冷たい機械めいた無表情がただただ不気味だ。
「こいつら全員皮被りかよ！」
守屋が岩倉の隣に立ちつつ応戦態勢を取る。その後ろに着く結花が尊敬に近い眼差しを向けた。
「ユカちゃん思うに、良く分かったっすね？　索敵具象なんて持ってないっしょ？」
「当然や」その声には絶対の自信があった。「ワイの顔見てビビらへんガキは普通じゃないからな」
気まずい沈黙、抱いた尊敬が吹っ飛ぶと、それぞれに哀れみと訊かなきゃ良かったという思いが浮ぶ、が、それぞれ割り切って表情を引き締めた。
少年からブチリ、という異音が立つ。
頭から、正中線をなぞるように黒線が下りる。股間まで到達すると無表情の顔が二つに分かれ左右に剥がれていった。
それは脱皮。最初に見えたのは顔、人間の、成人男性と同じくらい大きな蟻の頭だ、赤錆色の表皮から揺れる黒い触角が不規則に揺れる。背中まで見えるほど前傾に反ると、その甲殻には大小無数の穴があるのが見えた。
胴に供えられた足は六本ではなく一〇以上ある、なので蟻という

外見だが、昆虫ではなく甲殻類か、なんて場違いな感想を抱く。
元の形の三倍はある体積を持つ本体、その全てが出現した。人間並みに巨大な直立歩行する蟻、それが三匹、肥大した下半身から伸びる七本の足が大地に突き立ち、巨体を支える支柱となる。徐々に細身になっていく上半身には八本の手がキチキチと音を立てていた。
赤錆色の甲殻が光を吸収するように赫々と赤熱。石と石を擦り合わせるような音が穴から鳴る、カッ、カッ、と二度、三度目と共に噴泉の勢いで灼熱が迸り、周囲に火の粉が飛び散った。
伸びる紅蓮は翼で、七対十四翼の羽ばたきと共に黒煙と火の粉、そして大量の生ごみを燃やしたような悪臭を吐き出した。
踊る火の粉もまた奇異だ。ゆらゆらと揺れながらも一向に地に落ちる素振りが見えない。しかも空中で漂いながらこちらを窺うような動きですらある。
守屋は火の粉を注視、そして気付く、アレは火の粉ではない、蠅だ、爛々に輝く炎の翼から分離した火の粉の正体は、《燃える蠅》だった。
《燃える蠅》が集い蠅柱を組み赤い渦を成すと、宙を舞いながら蛇の如く躍り掛かる。対象となった守屋は既に展開していた《銀輝槍》で一薙ぎ、風を逆巻いて渦を断ち吹き散らした、が、四散した蠅の群れはまた宙空で絡まり元の蠅柱に戻る。
「マトリョーシカ並みに切りがねえぞ！」
守屋の陰でオプションを度外視し、本体に狙いを付けた結花が《加熱の刻印》を発動。だが、《火炎甲虫》と結花の間に蠅柱が割り込み妨害、爆発により炎の勢いが増すも、初めから燃えているものを燃やすことに意味はなく、全くの無傷。
「炎棲類！　ユカちゃん思うに、相性最悪っ！」
耳に障る羽音を立てながら蠅の群れが再び襲来、迎え討つ守屋は颯の速度で突きを放つ、《燃える蠅》は群れを七つに分けて槍を躱すと、七重の螺旋を描き守屋に収束。蠅に集られた守屋は苦悶を漏らしながら地面を横転、群れから飛び出すと再び風を巻いて撃退。

衣服を焦がしながら吼える。
「的が小さい、そして多い！　槍じゃどうにもなんねぇ！」
「本体狙いやな、心頭滅却すれば火もまた涼し、の精神で蠅は我慢、蟻を叩くで！」
　同時に大地を蹴る。それぞれ狙いを定めた蟻に突貫、守屋は風を纏い蠅の接近を拒みながら蟻に接近、肘から鋭角に曲がる手は鎌を彷彿させるほど鋭利だ。それが八本、手数を見るに正面からの攻防は難しい、守屋は円軌道を描きながら側面に回りこむ、デカイ図体を機敏に回し守屋を捕らえようとするが、
（遅ぇっ！）
　守屋は軸足で強く大地を蹴り付けて踏み切る、逆手に握りなおした《銀輝槍》を《火炎甲虫》の背中に突き刺した。
「――つうか、堅すぎ！」
　渾身の一突き、しかし直撃したにも関わらず表面を削り取る程度の損壊しか与えらなかった。
《火炎甲虫》の体躯が守屋に向き、抱きつくように腕を振るう、八本腕のそれぞれが八つの軌跡を辿り襲来、人類には防御不能の攻撃を前に身を低くし転がるように躱す、標的を失った八本の爪は勢いをそのままに、背後の壁面と飾られていた絵画に爪跡を刻んだ。
「なあ銀髪！」距離を稼ぎ立ち上がる守屋に問いが来た「これって労災下りるやろか？」
　店内の散らかり様は空き巣に入られたというよりは特殊部隊が突入してきた、という方がしっくり来る。
「前、任務で自前の単車おしゃかにした時は下りたぜ」
「結局は室長を口説けってことかい、涙が出るで！」
　激越な物言いと共に岩倉が飛び出す。集る蠅による火傷は恒常発動する治癒具象が強引に塞ぐ、無類のタフネスに任せて攻め込むと、八本腕の斬撃が迫った。
　一撃目を右の甲で流し、二撃目を左手で払い、三撃目を右脛で受けながら大地を蹴り、四撃目と同時に拳を放つ、《火炎甲虫》が岩

倉の脇腹を、そして岩倉の拳が蟻頭の口腔に入り込み喉を貫通したのは同時、小刻みに痙攣する《火炎甲虫》は岩倉が腕を引き抜くと崩れ落ち、横たわった死体が黄色の粒子となって分散していく。
「まずは、一……匹、」
言い終えると岩倉が膝を折り負傷部位を抑える。治癒具象が発動しておらず荒い呼吸を繰り返していた。
「庸介っ」駆け寄る結花、倒れる岩倉に迫る《火炎甲虫》に向かって横薙ぎに槍を振るうと突風を起し、弾き飛ばした。
ドゥルウと岩倉の間に入る守屋に憔悴した岩倉の懇願が届いた。
「……あんま派手に壊さん、といてくれよ？」
「善処するよ、政治家的な意気込みでな！」
ドン、と床を叩く音は背後から。倒れた岩倉が激痛でのた打ち回っているのだ。横目で岩倉を視界に入れられる位置まで移動、倒れた岩倉を観察する。
（治癒具象が発動してねえ……『再生封じ』か）
それだけなら岩倉が倒れ呻きながら暴れる理由にならない。
（毒物？　だとしたら俺達がどうこうできる代物じゃねえ、思考通信は柊からじゃないと出来ねえし、携帯は……圏外だぁ？　通信遮断まで張ってやがるか！）
仕事が終わったという利穂達の通信からさして時間は経っていない、応援は間に合わないと結論、自力での突破しかない。
「結花！　マスターの様子で変わったことはないか！」
槍を向けられた《火炎甲虫》は機を測っているようだ。向かってくる分には風で吹き飛ばすことは可能である、しかし、二匹同時、それも多面からやられた場合、確実に一匹は抜けられる。
それは、後衛の結花、そして負傷した岩倉の死を意味する。
（させるかよ……そんなこと！）
肩を並べていた《火炎甲虫》は互いに距離を開け始めた。守屋を囲うような陣形は、先の予想をなぞる形だ。
「傷口が、膨れ上がっているっす、まるで膨張しているみたいに」

確認。蚊に刺されたように盛り上がる、歪な楕円形の傷痕。よくよく注視すれば不定期ながら脈打っているように見え、その度に岩倉の体が跳ねた。
「あん？」守屋のピアスが振り子のように揺れているのに気づく。左右に散る二匹と。
（後ろ？　マスターを示しているのか？）
岩倉がドゥルウな訳ではない。ならば答えは一つである。迷いは頭を振って追い払い、守屋は指示を出す。
「マスター、レルナを全開放出、結花、《加熱の刻印》で傷口を焼け」
不意の指示に結花と岩倉が固まる、が守屋の気魄に負け即座に行動に移す。視線の集中により傷口が白煙を上げる、肉が焦げる異臭と共に、熱さに耐えられなかった七センチ程の蟲が傷口から這い出てきた。ボトリ、と落ちSの字を描きながら逃げるそれを岩倉がゴキブリのように叩き潰し、激痛に顔を歪ませながら、無理に笑った。
「……なんやこれは」
「トンネルで綾瀬から奪った具象だ」
《兜小金虫》。
「外来種だな、綾瀬もまた面倒なもの輸入してやがる」
確かアイルランドに生息し、傷口に巣くい滋養と生命力を奪い取るというこの蟲がいる限り、寄生対象の傷は治らず、また体力は落ちる一方になるとされていた。
レルナで構成するドゥルウは急所である『心臓』以外ならどこを破壊しようが、構成レルナを再分配することで肉体の損壊を補完する。《兜黄金虫》は本来ドゥルウの再構築を阻止する手段として綾瀬が使っていたものだ。
「寄生対象のレルナを吸い上げて肥大化する……もう少しで腹の中ぐちゃぐちゃにされていたぜ」
無意識に腹を撫でる岩倉を他所に守屋は内心で舌打ちしていた。
「炎棲類といい、《兜黄金虫》といい、何かワイ等を完全にメタっ

てないか？　こいつ等」
「俺等は敵の領域に足を踏み入れて、個々の能力も晒している、下準備の時間は十分ってことだろ」
弱体化している以上、自分から動かない、そんな勝手な決め付けを呪いたい気分だ。
「《燃える蠅》で《加熱の刻印》を防いで、《銀輝槍》と風は甲殻で減殺、回避至難な八本腕による《兜小金虫》の寄生、やり難いにも程がある」
渋面を濃くする守屋の隣に岩倉が立ち上がり並んだ。
「分かったことがある、連中、堅いのは背で腹の方は全然や」
「簡単に言うなあ、こちとらマスターみたいなタフネスはねえんだぜ」
自分と殆ど同じ身長の蟻、更にはその八本腕を掻い潜って懐を目指す。それは想像以上のプレッシャーだ。
「背中から貫通できないんすか？」
「無理だな」
窮地を脱したことから守屋は平静を取り戻してきた、その過程で眼前の生物の情報が掘り起こされた。
「柊の講義で出てきた……ありゃぁ『溜息の砂漠』にのみ生息する蟲類種だ」
額に滲む汗を甲で拭う。爛々と燃える《火炎甲虫》の熱気によって集中力も消耗させられている、手早く決めなくてはまずそうだった。
「英国が保管する最上級遺物級具象《黒剣（ブラックソード）・嵐の運び手（トンウェザーシカー）》ですらあの蟻の背甲には傷を付けることが出来なかったって話だ」
守屋は断言した。
「俺の槍じゃどうあがいても突破できねえ」
岩倉の言うとおり正面から潜り込み、部分的に柔らかい懐から破壊するのが一番現実的である。
「銀髪、お前はサポートに回れ」

唐突に、というわけでもなかった、だから守屋は何も言わなかった。
「《兜小金虫》を排除したからワイの治癒具象も復活しとる、銀髪の言うとおりアレを正面から倒すとなるとワイの方が適任や」
「でも、また攻撃を受けたら……」
「虫を出せば具象が復活する……なら傷に指突っ込んで引っ張りだせばええ」
それで傷を治せば済む話や、と結花の心配を跳ね除けた。
「それで結花、おまえは今から二階に上がって樋浦を連れて逃げるんや」
反論はない、結花は強く、ただ強く唇をかみ締めた。
「完全に相性が悪過ぎるわ、戦力外どころか足枷や、だからおまえは樋浦を連れて通信遮断の具象の範囲から出て隊長に交戦報告、合流せい」
「ユカちゃん思うに、死んだら承知しないっすからね」
結花はそれだけ言うと駆け出す、戦闘中、巧妙に位置をずらし個室に続く道を背後に置いてあったのだ。
「憎まれ役にしちまって悪いな」
結花の足音が消えたのを確認してから守屋が言う。
「ワイが言った方が聞き入れ易いやろ、適材適所や」
そうだな、と同意して《銀輝槍》を解除した。
「維持費が足らなくなってきた、不甲斐ねえ」
レルナの練成量は精神状態で変化する。高熱と隊長と司令塔不在というプレッシャーから来る精神消耗がレルナの増幅率に著しい変化を与えたのだ。
現在、《象徴痕》起動によるレルナブーストで得られる総量は六、索敵具象で二、《銀輝槍》で二、要所で使用する風で二を消費している計算だ。
槍を解除して《風靴》を起動。両足に藍色の風は撒きつき翼となると、守屋の体が浮き上がった。

これが守屋の真骨頂、飛翔による三次元戦闘である。
本来なら槍も含めて同時起動してもまだお釣りがあった。不甲斐ないと自分を貶めたのはそういう理由である。
因みに、岩倉と結花の平均練成量は二であるため、戦闘中では再生能力、《加熱の刻印》しか使えない、守屋のそれは過ぎた望みであるとも言える。
「本調子やなくてもワイの二倍以上のレルナを練りだしているやろ、立つ瀬ないでほんま」
「位階を上げていけば、自然とプールは増えてくぜ」
雑談を交わす守屋と岩倉を二匹の蟻は計りかねるように攻める気配を見せない。余裕の態度から罠を張っていると思っているのだろうが、実際は時間稼ぎでしかなかった。
（人外の風貌を持つ敵は本当にやり難いわ、何を考えているのか本気で読めん）
（同感だ、このまま膠着が続いてくれると在り難いんだが……そうもいかねえか）
敵が動く。時間を掛ける不利は敵も承知の事実。正面からの戦闘では自分達が有利なのも同様、こちらに具体的な策がないことを看破し攻勢に出る。
「何か嫌な予感しかねえな、おい」
まず、《燃える蝿》が集まり巨大な火の渦となり室内を飛び回る、床や壁を擦れ擦れに飛び回る意図は一つ。
炎に触れ次々に燃え上がる室内、猛火と黒煙が熱気と焦げ臭さを増徴させ、ついにはスプリンクラーを起動させる。
赤、黒と続き現れたのは白。
降り注ぐ水が《燃える蝿》にぶつかり水蒸気を生み出した、瞬く間に広がり視界は白く煙る。
「煙に乗じてやる気や、気張るでぇ銀髪！」
煙の向こうで床を蹴る音、煙を突き破り一匹の蟻が飛翔、特攻してきた。

凄まじい速度、そして腕力から振るわれる八本の爪は身体能力を強化し易い器物系であれば対抗できるか守屋では部が悪く攻防は選択肢に含まれない、即時離脱を決行。
鉈に等しい爪がフローリングを抉り、削り飛ばすも守屋を捕らえるには至らない。跳躍、ではなく、滑る、でもない、奇妙な移動方法は翔ける、というのが適切だった。
床から数センチ浮き上がった足先。初動に必要な力みをなくし、行動に移せるこの具象は戦闘に技術を用いる者により一層の効果を発揮する。
「わけだが、あんまり期待出来ないな、こいつらには」
怪物という容貌の通り、人間離れした膂力と運動性能、そしてドゥルウ特有のタフネスで戦闘の理などお構いなく特攻を連続する。
「舐っ、める、なあっ！」
大気を引き裂く轟音、摩擦で空気すら焼き焦がすような速度、首を撥ねようとする爪を岩倉が左手を掲げて防御、衝撃と同時に左踵が床に陥没した。
返す左拳を今度は蟻が防ぐと、甲高い音が鳴った。受け、防がれた二本の腕を掴むとそのまま力任せにへし折ったのだ。
即座に後方に飛翔し破損箇所を復元する《火炎甲虫》に岩倉は追撃を躊躇わない、拳と刃が飛び交う奔流の攻防を前に、守屋は静観に徹し必殺の機会を伺いながら、岩倉を射線に入れない位置を保ち続ける。
距離を開けた《火炎甲虫》が急停止、向き直ると一本足のテーブルを器用に爪で引っ掛け岩倉に投げつけた。
「さっきからなあっ！」
飛んでくるテーブルを右手で払う、飛来した先はカウンターに並ぶ酒瓶、まとめてなぎ倒した。
「人の家ではっちゃけ過ぎやぞ！」
テーブルを投げつけた後、一気に詰め寄っていた《火炎甲虫》が爪撃を放つ、岩倉は跳躍した。

反応した《火炎甲虫》が上段からの振り下ろしを変化、飛び込んでくる岩倉に突刺を繰り出す、対する岩倉は蹴りで応酬。
爆光するレルナは一度で止まらない、連続して繰り出される爪を全て蹴り飛ばす岩倉は《火炎甲虫》の肩に着地、胡坐をかくように両足で頭を挟むとそのまま後方に転倒。
「しばき倒したれ銀髪！」
「応っ！」
飛翔していた守屋は《風靴》を解除、再び《銀輝槍》を顕現させると、逆手に持ち替え露になった《火炎甲虫》の腹部に刃を立てた。
霧散する黄色のレルナは核を失った証、消え去るのを確認した岩倉はすぐに立ち上がり守屋と背中を合わせる。
「さすがにこの火災はまずいわ、これ以上はホンマに窒息死するで」
「敵の気配がない、が、撤退したか」
守屋は《銀輝槍》を解除し、ピアスを指で弾いた。維持費を倍にすることで索敵範囲を広げると、戦闘の途中から消えたもう一匹の《火炎甲虫》の動向を探る。
程なくしてピアスが敵の方向に釣られ揺れた――示す場所は真上。
樋浦要の個室であった。

扉を蹴破り個室にたどり着いた二人が見たのは、右腕で樋浦を抱えるローブ姿のドゥルウと、
「結花ぁっ！」
八本の腕で抱きとめるように結花を拘束する《火炎甲虫》であった。意識がないのか、結花はぐったりとしており岩倉の呼びかけに一切の反応を見せない。
「我が王の身柄、確かに返していただきました」
ローブ姿のドゥルウが口を開く、返答は激怒の念を込めた岩倉だ。
「おどれ、結花に指一本触れてみぃ、その首へし折るで」
「勇ましいな、篤倉の具現師よ……即座に殺すことをしなかった以上、これは交渉と取って頂いて欲しいのですがね」

つまり、これ以上の戦闘行為は結花の命を保証しない、そういうことだろう。
「交渉じゃなくて脅迫やないか」
歯を軋る岩倉は今にも飛び掛りそうだが寸前で自制している。どう足掻いても結花を救うより敵が動くのが早い、現状結花を無事取り返す手段は皆無。
「賢い選択です」
嘲りとも取れる《林檎売り》の態度に怒りが増す、そんな二人に構わず《林檎売り》はふと、窓の外に目をやった。
「ふむ、ワタクシの果実が一つ消されたようですね」
謎の独白は《林檎売り》を思考させるに等しい情報だったらしいが、その間も隙は無くただ見守る他なかった。
まあいいでしょう、そう呟くと《林檎売り》は軽く手を振る。《火炎甲虫》の背中からガス爆発に等しい業火が荒れ狂い個室の壁を粉砕、紅蓮の翼を大きく広げ《林檎売り》を乗せて空に昇った。

消防車も出動する騒ぎとなった一連の火災も、《林檎売り》の撤退と同時に消火。事情聴取は面倒になりそうだったが、綾瀬が介入したようで驚くほど早く終了した。
善意などではなく、篤倉トンネルでの借りを消化したということだろう。
「まずいわねー」
ステーションワゴンに移った岩倉と守屋は経緯を報告すると無言となった。
「その場しのぎの人質か、それとも他に用途があったのか」
「攫われたのは具現師ですか？」
話の流れに入ってきたのは進藤、事情をまだ話していない守屋と岩倉が視線を受ける。強面二人から軽く睨まれ進藤も少し困った風になる。
「ええそうよ」

「ならすぐに殺されることはない」
確信を持った断言に、利穂は重ねて質問した。
「すぐに、ね。時間的に余裕はあるのかしら？」
「最短で一日、最長で三日が目安だ」
あくまで救出行動を取る猶予がある、というだけの話らしい。しかもかなり本格的に捜索行動を取らねば間に合わない。
「と、紹介が遅れたわね、彼は進藤響君。樋浦要の級友で先月から樋浦さんを攫った《林檎売り》を追跡しているらしいの」
魔王云々は敢えて伏せた。結花の席に座る進藤は一同に軽く会釈をするに留まる。
「彼はわたしたちより《林檎売り》に詳しいその情報を元に対策を取りましょう」
説明して、と利穂が進藤に話しを促すとポケットから振動、流行のメロディを通話ボタンで止める。番号は検証後に話をした隊長であった。
手で、待った、の合図を送り、話を中断。会話は三分で終わった。
「――了解、それも加えて説明しておくわ」
声のトーン、そして表情から吉報でないことを隊員達は察しているだろう。
「何があった？」
「検証者が殺害されたわ」
レルナ強奪による意思消失。彼女を綾瀬経営の病院に移送中、車内に《十一桁の零》が出現、仲間が動くより先に検証者の命を奪い消失したということだ。
「《十一桁の零》はまだ消滅してない」

第六章・誓約破綻

守りたいと思った。
それまで自分だけで手一杯だった己が初めてそう思えた。
戦う敵は強大で、街の不良如きでは手に負えなかった。
だが諦めてやるほど、己の意地は安くなかった。
死ぬより辛い生とは、誇りを失うことだから。
覚醒動悸、レナノルフの場合。

進藤響と樋浦要の出会いは幼稚園まで遡る。父親同時が天体観測という共通の趣味を持ち、家族ぐるみでキャンプをしたのが最初の記憶だ。
誰かに必要な人に育って欲しい、そんな願いを込めたと、彼女の父親に聞かされたのもテントの中だった。
両親の期待通り、彼女は多くの人から必要な人に育った。
純粋であり優しかったが、一本木で曲がったことが嫌いだった、自分にも厳しく決めたことは何が何でもやり遂げた。
両親の期待を超えて、彼女は驀進し続けた。
ドゥルウという怪物と具象という対抗手段、それを知った彼女は躊躇うことなく具現師として覚醒した。
その経緯を彼女は語ることはしなかったが、唐突に姿を消した父親がその切欠であると進藤は思っている。
慰めなかったし詮索もしなかった、小さな言葉一つで決壊してしまいそうだったのだ。当時の彼女はそれほどまでに危うかった。
進藤は何も言わずただ彼女の隣に立った。
「君の行く末を僕は知らない、だからその先を照らしたい」
それが進藤の誓言であり、『炎』の源案を獲得した契機である。
彼女は進藤の同行を許可し一週間という短い間だが共に戦う仲間として過ごした。

そして、アレが起きた。
九体の真紅による篤倉侵攻――『大侵略』。
毎日、夢見る光景がある。輪舞する《腐毒鱗粉》が周囲の具現師を瞬殺、予知めいた危険察知で後退していた要も左半身を溶解させられる重傷、数分で致死に至る瀕死を負った。
『キミは逃げなさい、そしてあのドゥルウの情報を生きて伝えるんだ、ここで死んだらもっと多くの死者が出る』
ボクはいいから、と要は笑う。その笑顔は進藤に一つの決断をさせるのに十分だった。
進藤は要を守るように抱きしめた。
死も覚悟した、恐怖は感じたが合わさる肌から伝わる要の心音でどうにか落ち着いていられた。
目を閉じた彼に届いたのは靴の音、尋常ならざる暴力が支配する凄惨なる殺戮劇の真っ只中に、ひどく抑揚の掛けた声が響いた。
「お答えください、篤倉の具現師、貴方はワタクシの王となる御覚悟がおありでしょうか？」

目が覚めれば見知らぬ天井があった。
のろのろと上体を起こし周りを見渡す、カーテンで仕切られた個人スペースと枕元のナースコールを合わせるに病室だと予測した。
徐々に記憶が回復してきた。
（そうだ、利穂って人に要を保護したと言われて）
一手早く、《林檎売り》が要を奪った。鈴木結花という彼女達の仲間と一緒に。
そして《林檎売り》について知っている情報を伝えて、記憶が途絶えた。
（集中力が切れたって訳か、本当に扱い難い）
カーテンを開ける音、仕切りを開けた岩倉は進藤を確認すると、ベッド横のパイプ椅子に腰を下した。
「大丈夫そうやな？」

「……他の皆は？」
「柊は《林檎売り》を追っている、あいつ……第二からしつこく勧誘されているからのぉ、そっちの能力は折り紙つきや」
岩倉は自販機から買ってきたであろう缶コーヒーを差し出す、受け取り開封、口に含んだ。
「隊長は上司への報告、銀髪は廊下を行ったり来たりしているわ」
落ち着きのない奴や、そういう岩倉の膝も小刻みに上下していた。
「結花は、ワイの姪や」
ぽつぽつと岩倉が語り出す。
「あいつもかなり難儀な生活していてのぉ、兄貴との生活がギクシャクしてワイが引き取ることになったんや。
あいつを守る為具現師になった、だから何がなんでも、どんなことでもやるつもりや」
足の震えが止まる、と頭を深く下げた。
「《林檎売り》の討伐作戦が組まれた、進藤、手伝ってくれ」
「あ、頭を上げて下さいっ」
なりふり構わない岩倉に面をくらいながら、進藤は慌てて呼びかけた。
「あいつとの決着はどの道つけなくちゃいけないんだ、だから戦う機会があるなら僕の方こそ頼みたい」
その後、なんとか顔を上げてくれた岩倉に連れられ、ブリーフィングルームまで足を運んだ。

部屋には第四分隊の面々が出揃っていた。入室した岩倉と進藤に柊が「座れ」と短く命じた。
「《林檎売り》の所在が割れた……場所は進藤の言った通りだったよ」
だが妙な点がある、と司が付け加える。
「戴冠式参加者はそれぞれ拠点とよばれる『皮被り』を解いたドゥルウを隠蔽できるアジトを保有している……そうだな？」

「《林檎売り》が言うには優れた結界を施した拠点は市内九箇所に設置されている、ってことだった」
「《林檎売り》の領域の能力は領域内からレルナを圧搾、ドゥルウを量産するというもので間違いないか？」
「樋浦要の姿を模した《十一桁の零》と、喫茶店を襲撃したドゥルウはその能力で造られた、と思っていい……それがどうかしましたか？」
　意識が途絶えた前に説明した情報の確認に、進藤は何か自分の与えたものに不備があったのかと不安になる。
「《林檎売り》の根城……廃墟となったボウリング場だが結界が解除されていた。だからこそ捜索などという手間も要らず発見できたわけだ」
「結界が……解除？」
「同時に《林檎売り》の領域も確認された、結界は領域と重複できない仕様か？」
「そんなことはない、同時発動は僕も確認している」
　そうか、と司は頷いた。
「タイミングが不自然過ぎるわ、何らかの罠であることは明らかね」
　つぶやく利穂の瞳に警戒が灯った。
「だが静観する訳にもいかん、先の鈴木結花拉致もそうだが」
　司が黒板の一部を甲で叩く、と波紋が広がり瞬く間に市内の地図に塗り換わった。そして続々と点る光点、その数は十四。
「これは？」
「《林檎売り》撤退後、お前が寝ている間に市内に《十一桁の零》が頻発しやがったんだ」
　守屋が引き継いだ言葉に進藤は絶句した。
「現在、枢機機関が全力を挙げて討伐に動いているが、《十一桁の零》の性質が原因で水際阻止もままならない事態だ」
「よってまずは早急に《林檎売り》を叩く。第一から第三、そして第五と第六分隊が市内に散っている、第四分隊は綾瀬と合同突入し

《林檎売り》を撃滅する」
説明を聞きながら《林檎売り》との対決、その後の要との決着について考えていた進藤は、自分の頬に刺さる視線に気づいた。
「それで進藤響」司が尋ねる「お前が倒れたのは、あの右手の剣に関係があるのか？」
どう答えるか迷った進藤は、司が隊では司令塔という立場であることを鑑み、結局はそのまま答えることにした。
「僕は『誓約破綻』だ」

広大な空間は在り得ざる木々の群れで茂っていた。
樹の太さは電柱程で天井に伸びる途中から三又に分かれている、変形した十字架を思わせる木々に葉はなく、まるで枯れ木。木の股には大きく開けた口のような空間がポックリ空き、薄い膜に覆われた球体が穏やかなリズムで脈打っていた。
まるで受胎する古木、受精卵を彷彿するその球体が何を生むのか、結花には分からないがろくなものでないことだけは確信できる。
（ボウリング場……っすよね）
記憶が正しければ市内のオオシマボウルの内装と一致する。
（確か『大侵略』の時にぶっ壊されて閉鎖していた筈）
一階にゲームセンター、地下一階にレストランとボウリングエリアを設置した市内でも人気のスポットと記憶している。
（ユカちゃん思うに、大ピンチってヤツっすか？）
視線を左右に移動、見渡す限りが古木の群れ、異変はそれに留まらない。
廃墟の地下に木々が生えていることが奇妙なら、その十字架めいた古木に磔に処される人間の群れを何と称すべきなのか。
枝と幹に手足を飲まれ拘束されている人体群――その数、実に四〇。
ぐったりと首を伏せている者も多いが、半数ほどはまだ明瞭な意識を保っていた。

「目覚めましたか？　篤倉の具現師よ」
数日振りの邂逅に結花は舌打ちを禁じえなかった。
「《林檎売り》……！」
「如何ですか、ワタクシの《腐実樹園》は？」
「最悪、トンネルの時の無位や団子虫はこれで作り出した手下って訳っすか？」
ええ、と《林檎売り》が首肯すると、拘束されている具現師の男が罵声をあげた。
「ドゥルウ、こんなことをしてただで済むと思わないことだ、あの歪な圧迫感が消えている、結界を解いたのならこんな高密度のレルナが探知されない訳がない……もうじきここに篤倉の具現師達が流れこんでくる！」
「存じておりますとも、故にこれが最後の収穫となりそうだ」
《林檎売り》の発言と共に、男は苦悶を漏らしながら身をよじる。
荒く、そして早くなる吐息、程なくして赤子が産まれた。
卵の膜を黒色の肌をした腕が突き破る。男も大きく上体を反らし苦痛を表した。身体を揺らしながら発汗した汗が雫となって飛び散ると、その下で黒の異形がゆっくりと、ゆっくりと木の股から這い出てきた。
「アナタの協力に感謝します、篤倉の具現師よ」
古木の消失、磔に処された四〇近い人間が自由落下し床に激突する、結花も小さく苦悶を洩らす。大した高さではないが、レルナを搾取された疲労から立ち上がることさえ出来ない。
男はただ見上げ、睨むことで反撃した。
「感謝、だと、ふざけているのか？」
「本心ですよ、篤倉の具現師よ。仕掛けも回り始めた、準備も万端、あとはワタクシが上手く立ち回るだけだ」
ようやくだ、と《林檎売り》は祈るように零す。
「日にすれば二週間にも満たない、しかしようやくワタクシは動き出せる。ワタクシに枷を嵌める王がいない以上、ワタクシはワタク

シの力を出し惜しみしない」
「……何を言っている？」
「アナタ達に与えた役割はレルナを生み出し、ワタクシの配下を生み出すこと、まずは数が、ワタクシには必要なのですよ……しかし、アナタにはもうそれが出来ないようだ」
結花は目を瞑る。これから起こる出来事を直視できないからだ。
立つことさえままならない男と、その目の前には生まれたてのドゥルウ。
闇で閉ざした視界、塞ぎようのない耳がいつまでも獣の租借音を聞き取っていた。
（庸介……っ）
心の中で一度、結花は助けを呼んだ。

オオシマボウル、市内で人気のレジャー施設は先月の『大侵略』、表向きはレストランからの原因不明の爆発及び火災という被害を受け閉鎖されている。
寂れた外観を眺めながら進藤は一度、二度遊びにきた記憶が蘇り、思い返していた。
「作戦参加者は綾瀬の私兵団と私達第四分隊を合して三〇名となる」
順々に車から降りる面々、最後に降りた利穂が周囲に待機している戦力を分析した。
「《藍》が二〇名、《夜天》が七名、《蒼天》以下が三名か、篤倉トンネルのような威力偵察部隊ではなく、本気の制圧戦のようね」
黒服の一団に目をやるとネクタイを直しながら歩み寄る指揮官が見えた。
「同じ轍は二度踏まんよ、《林檎売り》の領域の効果が分かった今、もう少し戦力を用意しておきたかったのが本音だな」
利穂と肩を並べると険しい表情で綾瀬が答えた。
「市内で暴れまくる《十一桁の零》に即応するため、全域配備を行っている、人海戦術だもの、これ以上数を貰うわけにはいかないわ」

「ああ、そうだな……そしてあれはどういうことだ？」
綾瀬の眉間に深い皺が寄った。
「領域が解除された？　いよいよ罠臭くなってきたな」
「あら、なんなら尻尾を巻いて退散する？」
「捻りもなく面白みがない冗談だな」
言い捨てて綾瀬は一度、手のひらを打ち合わせると注目を集めた。
「向こうが何を考えているのかは分からない、だが領域を解除したのならばそれは僕の具象の施術が可能ということだ」
言い聞かせるように綾瀬が続ける。
「村木班は副長が指揮、左から侵入、水澤班が右、黒木班が後方、僕と第四分隊が正面から突入する、津田班は四方を囲み逃げる敵があれば狙い撃ちにしろ」
綾瀬の瞳に強靭な意志の光が宿る。
「篤倉トンネルの返礼だ、全霊で《林檎売り》を叩き潰すぞ」
各々表情が引き締まっていくのを確認した綾瀬は、決戦場となるオオシマボウルを注視、誓言を唱えると具象を発動。
「戦闘区域の封鎖完了、全ての使用制限具象の使用を許可、一分後に突入開始する、散開」
配置位置に駆ける兵士達を見送り、進藤は心臓が早くなるのを感じた。腕時計を確認、秒針の進み、その一秒がひどく遅く感じた。

正面入り口の自動扉は守屋が生み出した烈風が叩きつけられ破砕、硝子を踏みしめ第四分隊と進藤、そして綾瀬班が侵入する。
様々な筐体が入り乱れる店内は、閉鎖されているため無音、異質な緊張感に包まれていた。
「司、結花の位置は探れるか？」
守屋の急かすような態度は答えがあれば即座に飛翔してしまいそうだった。
「逸るな新米、功を焦れば自滅するぞ」
口を開きかけていた利穂が綾瀬に先を越され閉じる、と綾瀬班が

横一列に並び前に出た。
「諸外国でドゥルウが篭城を行った場合、最も多く取られえる対応は何か知っているか？」
「知るか」守屋の返答を無視して「空想化処理した弾頭による建造物ごとの爆破だ」綾瀬は答えを示す。
「理由は明々白々」
綾瀬は懐から《竜の喉》を取り出し前に構える、部下もそれに続いた。
「何処に潜んでいるか分からないからだ、特にこんなごちゃごちゃとしているところでは、な」
綾瀬班六名による《竜の喉》の連続発動。衝撃波と爆炎が手前にある筐体群を破壊、砕片を散らし、爆裂音の奏者は掃射を続ける、鉄片を踏みしめながらゆっくりと前進。
「そろそろ来るぞ」
破壊活動の意味を理解できない進藤は綾瀬の号令で警戒態勢となる。巻き上がる粉塵を突き抜けて一匹の無位が綾瀬に飛び掛ってきた。
のっぺらぼうの顔に大きく開く真円の口、並ぶ犬歯も肌と同じく黒、闇色の牙が食らったのは綾瀬ではなく、立続けに発射される弾丸で、たどり着く前に四発を浴びて霧散した。
「掃射停止――風使い、煙を晴らせ」
短い指示は守屋へのもの、一拍遅れて理解した守屋は風で煙を退かせる。
見ろ、などと言われるまでもなかった。筐体に擬態していたドゥルウの群れが皮被りを一斉解除、店内に十数体のドゥルウが出現した。
もし守屋が即座に店内を飛翔していたら奇襲を受けていた可能性はかなり高い、すべてがドゥルウである可能性があるためすべてを破壊するという単純明快な理論。
「その究極が建造物ごとの破壊ってわけか」

「まだ予想範囲内だ、この程度でいちいち驚くな」
《位置解析が完了。地下に《橙》の幻想色を確認、恐らく《林檎売り》だ》
司の思考通信を聞き綾瀬は利穂に視線を向ける。
「雑魚掃除は僕達が適任だ、一階の制圧は任せてもらおう」
「了解、大物はわたし達が頂くわよ」
兵士達は静かに散った。

階段を駆け下り地下一階に到達した。
「結花！」
レーン上に倒れる数十人の人間を確認、結花の姿を見つけ岩倉が走り出した。
「待て、マスター！」
利穂の制止と岩倉の転倒は同時、血しぶきを撒き散らしながら岩倉が床に転がった。
後続していた進藤は急停止、視線を走らせる。
「蜂か……！」
岩倉を狙い撃ちにした狙撃主は壁に張り付いていた。中型車両並のスズメバチである。
「一匹じゃねえ！」
守屋の声を聞き進藤も合計五箇所に停まる蜂を確認、同時に成人男性の二の腕に匹敵する針が向けられている。
射線を遮るために階段まで後退、覗えば岩倉の体に針が突き立てられている。
「あいつら……！」
殺気立つ守屋の肩を利穂が強く掴んだ。振り返る守屋の瞳には責める色。
「何故止める！　このままじゃマスターが標本にされちまうぞ！」
「明らかに誘いよ、多角的な狙撃を回避しながらマスターと結花を救出するなど不可能過ぎるわ」

「……再生が発動してねえ、あの針にも《兜小金虫》が宿っている可能性が大だ」
「だからと言って無策で挑んでも蜂の巣よ、堪えなさい」
進藤が何か言おうと迷っていると、言い争いに割ってはいる声が一つ。
「然り、手段がないのであれば大人しくワタクシの指示に従ってください」
《林檎売り》だ。いつものローブを目深に被り、手には木製の籠を提げている。
「我が同胞、同じ王を頂く家臣の一よ。ワタクシ達を裏切ったアナタをまずは討たねばなりません」
出てきなさい、という《林檎売り》に応じようとすると利穂が腕を掴んできた。力は弱い、進藤を行かせることは反対だが代案がまだみつからないのだろう。
「僕は大丈夫だ」
利穂の腕を振り切り前に出る。
「要は何処だ？」
「奥の部屋ですよ、我が同胞、そしてワタクシには分かる、今日が樋浦要様の最後の日だ」
今日、樋浦要は《断罪するだけの存在》となる、《林檎売り》は断言した。
「お前は、《断罪するだけの存在》となったあいつにも仕えていくのだろうね」
「当然です」
《林檎売り》の即答。
「ドゥルウは名を偽らず、ドゥルウは誇りを捨てず、そしてドゥルウは信念を曲げない。ワタクシは概念存在、肉なきこの身であるが故、形のないモノに絶対の価値を置く。
ワタクシも、もう一度問いましょう。
《戦血君》の騎士よ、王が己の血と肉を使い生み出した剣の授与者

よ。
何ゆえにワタクシの邪魔をなさるのですか？」
「それが彼女との約束だからだよ、《林檎売り》」
進藤も即答する。
「人に害なす魔王があればそれを討て、《断罪するだけの存在》となれば彼女は人を殺す、なら約束の下、僕は剣を振るうだけだ」
「確かに今のあの方は意志も信念もない冷徹な現象そのもの。しかし《魔王の心臓》を完成させれば、させさえすれば、あの方の意識を取り戻すことも可能です」
「それだけは、絶対に許さない。彼女は選択した、八人の心臓を奪わないことを、魔王位を継承しないことを、解るか？　あの、正義感の塊が、鬼風紀なんて呼ばれる、あいつが他人を犠牲にして生きた事実を、目覚めた時に許容できると本気で思っているのか？」
「では、醒めない夢にまどろみながら、永遠の眠りを与えるのが優しさ、とでも？」
進藤と《林檎売り》の視線が正面からぶつかり合った。
「ワタクシは止まりません、この戴冠式において、彼女を王として従うことこそワタクシの誇りであり忠誠だったのですから」
「今更、曲げる訳にはいかない、か」
「ええ、戴冠式に残るはワタクシの王を含め五柱、宣言しましょう。《暴賢帝》も《斬切姫》も、未だ見ぬ一柱、そして王を追い詰めたあの憎き《粉砕王》を、ワタクシは打ち倒し、《王の法典》を完成させる。
それが、瓶詰めの心臓を彼女に渡し、仕えた、ムエリカ派の次期魔王《戦血君》の騎士《林檎売り》が出来る唯一の奉公なのです」
「結局、君と僕では平行線か」
「いいえ、違います、交わらぬ線であるならばここまで反目することもないでしょう。ワタクシとアナタの目指すところは対極、故にその場に到達するまでには必ず交錯しなくてはならない、アナタとの関係は今のワタクシたちの視線のようなものですね」

「……そうだった。曲げられぬ信念のもとに直進を続けるならばぶつかり合うのは必定、これは確かに平行線ではなかったね、して言うなら激突線、水と油ならぬ火と油、混ざらいじゃなく燃え合うような関係だ」

どこかで聞いたようなフレーズに進藤は苦笑した。

「言いえて妙ですが、確かにその通り。残りかすでも残せれば勝ち、最悪なのは双方が燃え散ることですが、退く気がないなら是非もなし、では――」

激しく燃えあいましょう、《林檎売り》は高らかに宣告した。

走りながら進藤は迫る三条の飛影を確認した、床を舐めるように這っていた切っ先を跳ね上げる。大地から逆巻く稲妻の如き一閃が一匹目を両断。蝙蝠の翼を持つバスケットボール大の蛙――《水妖》が真二つとなった。

切り返された《暴走思考》が迸る水平の銀光となって二匹目を迎撃、するうちに三匹目が間合いに入った。刃を返す時間はない、進藤は逆手に持ち直すと石突で《水妖》の頭を叩き、地に落とす、生きていることを確認するや、背中に刃を差込み床まで貫通、黄色の粉塵が舞い踊る。

「一撃で殺せなくなりましたね？」

「なあに、これからさ」

騎士を名乗る《林檎売り》だがそれは王に仕える者の意味であり、本来の属性は個人で大量の部下を生み出し使役する《軍団職》。

（つまり、僕との相性は最悪ってことだ）

《暴走思考》の能力は装備者のテンションに呼応してレルナを増幅させる、というシンプルなもの。

レルナのプールを乗算するこの効果は使い手さえ選べば破格の破壊力を誇るが今の進藤が使っても固定値が低く、生み出したレルナを攻撃力に変換しても《黄》や《黄昏》を一撃消滅させるのが関の山だった。

「しかし、ドゥルウの核たる『心臓』を狙わずとも、《黄》とはいえ一撃で構成レルナの全てを消滅させるとは、ふむ、並の具現師が見れば卒倒モノの逸品ですね」
《林檎売り》の驚嘆に進藤は検証の際の周りの反応を思い返した。
「だからこそそれは返却させて頂く、その剣は王にこそ相応しい」
「確かに、テンションが常時マキシマムな彼女が使えば、かなりの破壊力になるよね、これ、僕でこうなのだから、あいつが使えば《赤》や《真紅》だって一撃で殺せるのかな？」
「でしょうね、貴方の一刀を浴び、《橙》に貶められたたワタクシの事実を鑑みれば、恐らく可能でしょう」
無駄話をしつつ進藤は額を拭う。肉体的疲労よりも精神の磨耗の方がよっぽど深刻だった。
(溜め込んだストックは使い切った、ここから先はボクの精神力次第か)
消費し続けるレルナは否応なく精神と意識を消耗させる。
進藤は感じる。意識が鑢でこそがれる感覚、意思が鉋で削り取られる錯覚、気を抜けば肉体は人形のように倒れるという確信。
だからこそ、
「Oooooooooooooooooooooo——！」
獣のように、赤子のように、鬼のように、声を振り絞る。
「哀叫しろ！　号叫しろ！　絶叫しろ！　喚き散らせ！」
刀身に刻まれた歌姫の美声に声を重ねて進藤もコーラスに加わった。感情を薪にテンションを燃やせ、常軌も正気も必要ない、狂気を注いだ凶器を握り、啼いて、嗤って、叫んで、吠えよう。
「Yeaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa——！」
胸を反り息が続く限り声を絞り出す、音圧に周囲の《黄》が痺れたように動きを止めて《林檎売り》でさえ凝固した。
「——ワタクシに一太刀浴びせた時と同等のレルナ総量、これは少

々以上に分が悪い」
《林檎売り》が指を振る、と、壁面に張り付いていた蜂が一斉飛翔、空中で絡まり合う。
「なんやあれ」
唸る岩倉に全面的に同意しながら進藤はそれを見上げた。
姿は変わらず蜂であった。
しかし、大きい、否、大きいなんてものではない、とてつもなく巨大なスズメ蜂だった。
部位として最も小さい頭部でさえ軽自動車とタメを張り、戦車級の体躯から伸びる、針はまさしく砲身だった。翅は戦闘機の爆音を何重にも重ねたような轟音を奏で、黄色の複眼が進藤を見下ろした。
《林檎売り》は仕上げとばかりに木製の籠を上へ放る、七つの林檎が蜂の体に取り付くと皮膚に進入、同化。
「先に言いますと、この《一角蜂》の等級は《橙》です」
《林檎売り》が右手を上げる。砲身が進藤に狙いを付け、
「全力で迎え撃たねば――死にますよ？」
火を噴いた。超速度で打ち出される灰白色の弾丸、二メートルを超えるそれは針というよりは槍、と呼ぶのも正確ではなく、形のまま評すなら円錐……コーンだ。
真正面から刃と打ち合う、着弾の圧力により進藤の片足が宙に浮く、何とか流し後方にすっ飛ばす、針は置き去りにされた自販機を貫通、壁にめり込んだ。
ただの一撃でこの様か――ッ！
いなしたとは言え尋常ならざる重みに右腕が消失したような痺れが走った。目で確認しなければ束を握っているという事実さえ忘れそうだった。
「進藤響、ワタクシはアナタを評価していた《戦血君》の騎士となることも、王の剣を受け取るということも、ワタクシに反論はなかった」
《林檎売り》は唐突に告白した。

「ですが、今のアナタは存在自体が不愉快です」
煙が尾を引くその先、打ち出された針の代わりが肉の奥から這い出て来る。構成レルナの再分配で針を再構築したのだ。
「具現師は皆、強烈な望みを持っています、それはどんなに焦がれ、求めても現実的な手段では決して叶える術がない絶望的な望みです。
具象という、自己の空想を『在り得ざる現象』として世界に顕現させる、なんて破茶滅茶な代物以外に縋ることが出来ず、そして命や誇りや魂を捧げてでも成し得たいという覚悟の基に彼等は具現師となります。
進藤響、樋浦要様の隣に立ちあの方を支え続けよう、そう決心し具現師となったアナタは評価する、認めます、だからこそワタクシはアナタを同等の同胞とした」
一息。
「だからこそ――ワタクシはアナタを侮蔑する。誓言を失い、具現師としての力を失ったアナタを――『誓約破綻』したアナタを。
王は《魔王の心臓》の移植者達が争う戴冠式への参加し他の心臓を奪わないと決めた、そして《断罪するだけの存在》となった折はアナタに己を倒すよう頼んだ、その剣もそのためのもの、魔王の『第二種空想顕現術理』を受け継ぎ、アナタもそれを了承した。
されどアナタは具現師の力を失った――何故か。
答えは単純にして明快過ぎる。
――貴方は迷っているのですよ。『在り得ざる現象』となった王を討つということに、王の信頼と約束を無碍にするその行為、本当に辟易する。
錯綜しながら迷走し、躊躇いながら躊躇して、未完の覚悟で戦場に立ち、半端な意思で友を斃すと嘯く。
思いを欺かないことを信念と言うのです、行き先を決められない子犬が持てるようなものではない」
それは激烈な糾弾、初めて見せる《林檎売り》の内心の吐露。
「せめてアナタが『誓約破綻』しなければワタクシも王を倒す助力

も考慮できた」
進藤は反論をしようとし、そして出来なかった。
「この期に及んでまだ誓いを取り戻せないなら、貴方はやはり臆病者だ」
再び砲身が進藤に照準を合わせられる。
「御さらばです。進藤響、同じ王に仕えた者として、せめて苦しむことなく一撃で終らせましょう」
――そして発射。

床から鈍色の壁が三重に生える。厚さ六〇センチを超える鋼の壁が針を防ぐが貫通、穂先が進藤の鼻先数センチのところで止まった。
《Cのデーモン》が組み立てた壁が間に合ったのを見て、梨穂はほっと胸を撫で下ろす。
「割り込みとは無粋、そもそも人質の存在をお忘れか？」
《林檎売り》はそう言ってレーン上に纏めておいた具現師達を見る、そして瞠目。
「……驚いた、ワタクシが全く気づかないとは」
その全てが消えていた、体を縫いとめている針を引き抜き岩倉が立ち上がる。
よろめく岩倉に飛来する弾丸、白刃が迎え撃ち、二分した針が梨穂の左右に別れ飛んで行く。背後で鳴る二重の破砕音。電光石火の抜き打ちが針を両断してのけた。
「弱った相手を狙い打ち、少し無粋が過ぎるわよ？」
《林檎売り》は無言、その顔には小さな驚きが含有されていた。
「やりますね？　確実に殺ったと思ったのですが」
「あーよく言われるわ、因みにわたしに倒された時に出る敗られ台詞の断トツは『馬鹿な貴様如きにこの私（一人称により変化）がっ！』だけど、あなたは何て啼くのかしらね？」
言葉を終えると共に疾走開始。走りながら握る双剣を投擲、二条の銀光は《林檎売り》に殺到、払うように腕を振るうが空を切る、

寸前で短刀二振りが霧に戻り、《林檎売り》の周囲で再び組みあがる――そして爆発。
吹き荒れる猛火の中から《林檎売り》が抜け出す、梨穂は霧を纏いながら追走。
「決めるぞ、全員で仕掛ける」
《一角蜂》は立て続けに針を速射、豪雨の如き痛爆、上空から降り注ぐ鉄柱の如き針、足を止めず駆け抜ける。接敵すれば針による射撃は《林檎売り》に被弾する可能性があり、動きが鈍るとの判断だった。床を叩き割る騒音が鳴り響き、コンクリ片と土煙が宙を舞う。一瞬の遅滞もなく《林檎売り》に肉薄した梨穂は、再び双剣を握り接近戦を挑んだ。
繰り出すのは最速最短の直線を辿る刺突、迎撃する右腕が橙色の閃光を弾き短刀を吹き飛ばした、手から離れるや霧となりバラける刃、一拍の間も置かず《林檎売り》の上段蹴りが唸る、腕から伝わる圧力で姿勢が泳いだため回避動作に移れない、直撃は避けられず当れば即死の一撃は、しかし横合いから飛び込んできた進藤が刃で受けた、が、威力に負けて数メートル後退、その間に利穂は姿勢を戻した。
右手で握る直剣による突き、長身を生かした片手突きは、短刀ではリーチ不足、も余裕を持って後方に下がる、霧が渦を巻き短刀に絡まり形を組み替えた、《Cのデーモン》の効果の一つ、《変成》ホワイトキューブを合わせることで形を即座に変化する能力により、短刀は攻撃の最中に槍に変化、一気に間合いが倍以上に伸びる。
目測を外された《林檎売り》は床を踏み抜く勢いで《点火》を発動、橙色の火花が散り、その身が飛翔、間合いを一気に空ける――筈だった。
「――ッ！」
跳躍が停まる、突如生まれた壁が後方への離脱を妨げたのだ。その間に梨穂が迫る。下手に逃げるのは返って危険と判断したのか、自ら近接戦に移行、急激に迫る両者の間合い、激突する寸前で梨穂

が横に飛翔、その先に柱を生み出し着地、即跳躍、三角飛びの要領で背後に回り込むと、槍を強く握り締め三度の刺突、回転しながら《林檎売り》が左腕で迎撃。烈々極まる攻防は弾幕の剣戟、火花と金属音が咲き乱れ吹き荒れる、嵐は三秒で過ぎ去った、二十四手を終えた所で梨穂が半歩退くと、槍を双剣に《変成》、両腕をピンと伸ばし切っ先を向ける。大よそ剣術の構えではない、続いて《変成》、変えた形は銃、同時に《林檎売り》の左右と背後に壁が出現、退路を絶たれ動きが止まった所で十二発の弾丸が炸裂、《林檎売り》の全身に浴びせられた。

「――全く……！」

両腕を交錯し顔、喉、胸を守りながら、重く響く声を絞り出した。

「どれだけ怪物ですか、アナタは」

「そりゃこっちの台詞よ」

梨穂の戦闘スタイルは殆ど奇術の域だ。戦闘空間に放出される超微細なホワイトキューブを組合し、雷撃や爆裂という現象、更には剣や柱と言う器物を速攻展開。更に攻撃の最中で《変成》すれば間合いが読めない一撃となり、回避しようとすれば、その先に罠を置く、予測不能の戦闘で敵を抹殺するという戦術は、暗夜の礫の如く、正攻法で対応することは果てしなく至難。ここまで食い下がった敵はそうはいない。

「わたし達で戦っていたら苦戦だけじゃ済まなかったわね」

「どういう意味です？」という《林檎売り》の問いは背後から響く重低音と震動にかき消される。

翅は破れ、針が損なわれている、複眼も潰れもはや飛翔もままならない、《一角蜂》が墜落したのだ。

「茶番は終わりだ」

不意に現れた綾瀬が幕引きを告げる。そして現れたのは一人ではない、《林檎売り》を囲うように二〇名を超える具現師が《竜の喉》を向けている。

「人質を消したのはアナタですか」

「死んでいたと思っていた村木が生きていたのも驚きだ、《十一桁の零》の初期被害者は殺していたのではなく連れ去っていた、という訳だな」
進藤は堪らず声を出した。
「待て、そいつは」
「つまらん執着だ、犬にでも食わせておけ」
綾瀬は一蹴する。
「それより貴様だ、これだけのドゥルウを抱え込み、さらに高度な結界まで所持しておいて、この最後の詰めの甘さ加減はなんだ？何を企んでいる？」
「ワタクシはただ、進藤響への制裁を執り行う、それだけです、あの者はワタクシが自ら手を下さねばならないのです」
「つまり、あの子供をここに連れ込むのが理由、と？　目的を果たしたところで集結する具現師を排除できると本気で思っていたのか？」
「ワタクシの、王への忠誠が本物であるならば、いかなる逆風もそよ風の如きです」
「もういい、逝け」
二十発を越える弾丸が《林檎売り》に集中した、『心臓』破壊による消滅は一秒必要なかった。

「一階の制圧は？」
「あんなもの三分で済んだ、柊からの思考通信でお前達のフォローに回ったに過ぎん」
「さすがは綾瀬の領域って訳か」
膝を突いた進藤の頭上で言葉が交わされる。進藤はしばし、呆然としながら、ゆっくりと立ち上がった。
「そうだ、要」
よろよろと立ち上がる、奥の部屋というのはスタッフルームか何かだろうか、進藤はそれらしき場所を探すことにした。

「拍子抜けだが、仕舞いとしていいだろう、村木を療養する必要があるので僕等は退くが、《林檎売り》の言葉の意味、《戴冠式》云々は後で報告しろ」
「……了解よ。さて、ドゥルウの量産を止めた以上、あとは生まれた分の対処ね、《十一桁の零》をどう対処するか、か」
背後の会話が遠くなる。予想通り要はスタッフルームにいた。
場違いに豪華なロッキングチェアは《林檎売り》が用意したのだろう。揺篭代わりに眠る要を見て、進藤は呼吸が速くなるのを感じた。
「約束、守るよ」
進藤は《暴走思考》を振り上げた。今の要は自らアクションを取ることがない、この剣は容易く彼女の命を奪うことができる。
一秒、二秒、刻々と時が進みカラン、という音が部屋に落ちた。
同時に膝を折る進藤は低く咳き込むように泣き出した。

第七章・風は去り、嵐来る

正義などではない。
己の正しさを強調するような行為には反吐が出る。
道徳などではない。
他人のために命を張る事に何の価値も見出せない。
奴等を滅ぼす理由など、単に目障りなだけだった。
覚醒動悸、綾瀬達巳の場合。

要が言うに具現師を続ければ次の三つの結果に行き着くという。
一つは戦い続け、誓約を果たすこと。
死者を蘇らせたいと思った者は命を、過去を変えたいと願ったものは時間を、どうにかする具象の完成を果たすことだ。
二つは、命を落とすこと。
戦闘か病気か、はたまた事故か、誓約の成就を為せぬままその生涯に幕を下された者だ。
進藤響は三番目だった。
『誓約破綻』。
最初の願いを諦め、誓約を失った者。
進藤は具現師であったが誓いを破り具象を失った、『象徴痕』も起動できず要から受け継いだ剣がなければ、ただ、その手の情報に詳しい一般というだけである。

市内のホテルの一室に分隊メンバー、要、そして進藤が休んでいた。
《林檎売り》討伐から数時間、とりあえずゆっくり出来るということでここが選ばれた。枢機機関が経営するものでメンバーであれば安く使えるということだ。
因みに店が直るまでは岩倉と結花の拠点となるらしい。

「事情は概ね理解した」
単に休んでいたわけではない、司に詳しい事情の説明を要求されたので話していたのだ。
戴冠式参加者は残り五柱と五体の真紅。
進藤は要に《魔王の心臓》から配給される莫大なレルナを元に鋳造された剣を受け継ぎ、
好戦的な存在を問われたので、進藤は《粉砕王》とその従者《百眼貴婦人》を挙げた、残りとは面識がないので人物像までは分からないと続ける。
「進藤響、お前はここで降りろ」
「それは出来ない」
進藤は即座に返す、司も止まらない。
「どの道、《橙》如きに遅れを取るようでは《黄金》と戦っても殺されるだけだ、その剣が魔王の『第二種空想顕現術理』であるなら、傷付けることは可能だろう、が、どう足掻いても魔王を仕留めるには至らない、殺されるだけで犬死だ」
司は目を瞑りながら答える。淀みなく、そして残酷に。
「具現師でないお前がその剣を使ったところで、戦えるのは雑魚だけ、それはお前が、一番理解している筈だが？」
それだけでも十分凄まじいのだが、と司がフォローを入れるが、気分が晴れることはなかった。
「僕は、約束した！」
叩きつけるように切り返す。
「あいつは僕に頼んだ、人に害なす魔王を討て、と。戴冠式に参加する者全員を示してこそいるが『存在干渉』に飲まれればあいつもいずれ人を殺す、そしてあいつは心臓を奪うことを拒否した！」
樋浦要が《断罪するだけの存在》となるのは決まっていた、同時に自分を終わらす存在を必要としていた。
「あいつがどんな気持ちでそんなことを言ったのか、アンタに分かるのか！」

「そうだな、繋がれば解るだろう」
司は最低の冗句で応じる。精神同調を得意とするこの女は容易く人の心を読み取り暴くのだ。
剣呑な空気が広がる。進藤の怒りに応じるように右手の《暴走思考》も震え始めた。
「話を逸らすな、進藤。ちゃんと質問に答えろ、どう足掻こうが魔王には敵わん、これは絶対だ、お前はただ敗れに行くのが約束、とでも言うのか？」
進藤は沈黙、司が続ける。
「お前では魔王の相手は務まらない、その剣は誰か高位の具現師に貸与すべきだ」
進藤は咄嗟に拳を握りしめた。それは渡す気がないという無意識の所作であり、それを見た司はやれやれ、と肩を竦める。
暫し沈黙し、進藤はある問いを投げた。
「僕は」進藤が口を開く「誓いを取り戻す」
「無理だな、樋浦要を前に剣を掲げ、結局は斬ることが出来なかっただろう？」
ぴしゃりと切って捨てる司、思考通信のために同調していた為ボウリング上での出来事を見ていたらしい、進藤の顔は紅潮すると、隣から口を挟まれた。
「あのさあ」
結花である。視線は手元の携帯、高速で打鍵しながら面倒臭さを全身でアピールしている少女が続ける。
「ユカちゃんに思うに、うだうだうだうだと、覚悟と決意と信念とその他諸々が単に足らないだけじゃないっすか？」
具現師は思い一つで成れる、ならば進藤が誓いを失ったのは信念が脆弱であったためであり、誓いを取り戻せないのも覚悟が惰弱である、と結花は言う。
「僕の、僕の思いが軽いって言うのか？」
「ユカちゃん思うに、そうだと思うっす」

結花は迷いもなく頷いた。怯んだ進藤に結花は畳み掛ける。
「例えばっすけど」
結花は自分の前髪を掻き揚げる、岩倉が「おいっ」と声を掛けるが聞く耳は持たなかった。右目を隠すように伸ばされた髪の奥には、綺麗な狐色の瞳があった。
「ユカちゃんの右目は一回失明しているんすよ、煙草を押し付けられちゃって、因みにそれをやったのは実父っす」
唐突な告白に、進藤は生唾を飲み込んだ、難儀な生活と岩倉に説明されていたが予想以上の事実に硬直した。
「今は具象の再生治療を受けて元通りですけど、この前髪はその時の癖っすね、怪我を隠すために伸ばしていて、今じゃこれが一番落ち着くんすよ」
一息。
「ユカちゃんの具象は《加熱の刻印》って言うんすけど、こいつは相手が持つレルナを熱に変換するんす、具現師なら五秒で脳を溶解、ドゥルウなら十秒で爆殺っすね、因みにこの視線が最初に焼いたのはドゥルでも具現師でもないっす。
さっき言った父親を最初に焼いたんすよ」
自分が今どんな顔をしているのか、進藤には分からない。それ以上にそんな告白を受けてどんな言葉を述べて言いのかなど、もっと分からない。
「今は喋らないで結構っす、半端な慰めはウザイだけなんで、カチンときたら焼くっすよ」
喉まで出かかった言葉を塞き止めた、のを確認して結花は続ける。
「施設が動いて保護されて、叔父さんに引き取られるまで、ユカちゃんの毎日は地獄っすよ、会社切られて、酒と賭博に興じる典型的な駄目親父に、そうそう見切りを付けて別の男と一緒に蒸発した駄目母に、その腹いせに毎日蹴られて殴られるのはユカちゃんっすよ？　あの頃は本当に、今でも思い出したくないっすね。
繰り返される暴力への抵抗はただ睨み返すだけ、もう少し大きけ

れば武道でも習って撃退したかったけど、この体格差は絶望的で、だから毎日睨み返しました、
そうすると、また殴られるんすよ、目つきがイラつくって、それでも止めないのは単にユカちゃんが意地っ張りなだけっしたけど」
髪を下げて一度口を噤み、そして開いた。
「ただ想ったす『死ね』って、想い続けて睨み続けたんすよ『死ね』『死ね』『死ね』『死んじまえ』『死んじまえ』『死んじまえ』って、想い続けて二年が過ぎた頃っすね。
ユカちゃんの視線には殺意が宿って、その視線は人を焼き殺す魔眼になってたんすよ」
『第二種空想顕現術理（アーカイン）』。
莫大なレルナを消費し、世界に固有の則を認めさせる具象と異なる空想顕現式。眼前の少女はそれを、魔術の最奥とも超能力とも呼ばれるその境地に、殺意一つで至ったのだ。
それは一体どれ程の憎しみが込められていたのか、進藤には計り知れなかった。
「成れる者は自然と成れるし、成れない者は永遠に成れない、つまりはそういうことっすよ、最初に言ったすよね？
具現師足り得ないのは――ただ足りないだけ。
怒りも憎しみも覚悟も決意も信念も、その他諸々一切が。
自分の優柔不断を棚に上げてグダグダ文句ばかり抜かすな、ってことっす」

ホテルを後にして進藤は外に出た、天気は快晴、気分は曇天だった。
風を切るように足を速めた。思い出すのは最後の言葉。
『樋浦要は枢機機関で身柄を預かる、まずは《魔王の心臓》の解析、その後の対応は上が決めるだろう……《林檎売り》の話を鵜呑みにするなら処刑だろうな』
剣を振るう覚悟ないのであれば、代役を立てる、と司は言った。

樋浦要を救う手段は皆無であり、《断罪するだけの存在》となれば破格の戦力に指向性が生まれる。
そうなる前に、自失状態である今なら赤子の手をひねるより楽に彼女の命を断てるのだ。
『そうなった場合は連絡するわ、だから決めておいて、その剣をどうするか、君がどうしたいかを』
犬死してでも残る魔王と戦うのか、それとも剣を誰かに貸し与えるのか。
「畜生……！」
叫んだ。腹の底から出した大声に周囲の人が一斉に固まった。構わず進藤は歩みを続けた。
どうすれば最善か、そんなものは考える間でもない。戦えない人間が持つより戦える人間が持つほうが一番だ。しかし、彼女との約束を果たしたいと思う想いも捨てきれない。
「……それでも、僕は……」
煮えきれない思いのまま進藤はあてなく街を彷徨よった。

「どういうことだそれは！」
レナノルフの隻腕がテーブルを叩いた。衝撃でカップが揺れ珈琲が零れる。
ノートPCのディスプレイに映る男――枢機機関第二作戦室室長・三郷正規の顔はまったく動じなかった。
「二度は言うが三度目はない。我々枢機機関は、戴冠式を速やかに完了させるために樋浦要に助力する」
「ドゥルウを、最高等級の魔王を完成させるというのか？」
「君は話しの解る男、そして将だと思ったのだがね」
首を隠すまで肥大した丸顔、肥満気味の第二室の室長は冷酷な理論を諭す。
「《魔王の心臓》に関してはあらゆる具象解析が拒否された、伝説級ないし、下手をすればあれ自体が『不可能域』の具象という可能

性すらある」
　解析を専門とする第二ですら手が付けられない樋浦要に施された具象、それはある事実を暗に示している。
「《魔王》は確かに存在する、『戴冠式』の情報は正しく、九分されたとはいえ魔王級のドゥルウと真紅が五体、この篤倉に紛れている、そういうことだぞ？」
　現在、《林檎売り》討伐から二時間が経過していた。その後、進藤の情報と樋浦要を合わせ第二に引き渡し、《魔王の心臓》の解析を依頼した。
　同時にレナノルフは支部長に神崎一門との連携を計り最大警戒態勢を敷く事を進言していた、しかし、
「先月の『大侵略』を思い出せ、四体の真紅を前に我々が被った被害はどれ程のものか忘れたのか？」
　レナノルフは奥歯を噛み締めて沈黙した。
「《蒼天》以下の低位から中位の具現師が十三名、《藍》から《夜天》の中位から上位の具現師が八名、そして《紫》という高位具現師が六名！　延べ二七名だ！　支部の戦闘職員の三割が殉職した。
　元軍属ならこう言った方が分かり易いか？　我々枢機機関は全滅に等しい被害を被ったのだ、たった四体の真紅を相手に、な」
　たった四体でその被害、しかも討伐に動いておいて仕留めたのは神崎一門である。枢機機関は被害者しか出しておらず独力での勝利とは言えなかった。
　それを踏まえて、五柱と五体……《林檎売り》は破れ樋浦要は確保しているとはいえ、それでも四柱四者のドゥルウが存在する。
「解るな？　真紅ともなれば単体で都市制圧が可能な無極の戦力者だ、黄金など想像を絶する。
次は一体何人の死者が出る？　君は篤倉を地図から消したいのか？」
　それに、と三郷は続けた。
「話を聞けば魔王候補は皮被りをされていない、というではないか？　お前の剣は同胞に向けるためにあるのか？　そして《戦血君》

は害なす魔王だけを討つ、という人間よりの思考の持ち主と聞く、そんな彼女を魔王位にすれば、第九派を人類陣営に帰依することも可能だ」
そんな彼女なら信用に値する、と三郷は言う。
そういうことか、とレナノルフは三郷の考えを理解した。
「幻想爆発予想の打開策になるやかもしれん、試す価値はあるだろう。そもそも現在疲弊している枢機機関では前回以上の大規模戦闘に耐えられないのだよ」
「待て、《戦血君》の従者は《十一桁の零》や多くのドゥルウを生み出し事件を起している、その被害者関係からは反発がくると思われるが？」
返って来たのは疲れた反論。
「従者の暴走は自失状態では制御できない、進藤の言によれば『大侵略』時の彼女は《林檎売り》を御していたのだろう？」
「……ああ」
そこまで求めるのは酷だろう、と三郷は言い捨て結論に繋げた。
「これは決定事項だ、支部長の許可も得た。論議も議論も必要ないしあるなら支部長に申請し作戦撤廃を取り付けてくれ」
勝ち誇るように三郷は笑う。
「枢機機関は《戦血君》樋浦要に助力、以後は指示に応じ分隊を動かす、まずは――」
続く命令にレナノルフは激昂し掛けた、百万言の罵声を浴びせようと口を開くが、それよりも早く男が締める。
「作戦は以上だ――では、検討を祈る」
強制的に切られる通信。レナノルフは力の限りデスクに怒りをぶつける。破砕されるテーブル、しかし怒りは微塵も発散しなかった。
――一時間前。
レナノルフから《魔王の心臓》の解析結果から戴冠式の可能性が高いと判断した三郷は、一つ確認事項が生まれたことに気づき綾瀬

邸を訪問していた。
　クリスタルテーブルを挟み対面する男にその旨を伝え、同時に共同戦線を打診、『神崎一門』の協力と『王国』との交渉を約束した時である。
「待て、村木！」
「退け、俺は辰巳様に話しがあるのだ！」
　部屋の外で諍いの音。二人は部屋の扉に注目すると、勢い良く扉が開け放たれる。肩で風を切り進むのは包帯を頭部や手足に巻く黒服。精神磨耗により意志消失するまでレルナを吸い上げられていた男は、今目覚めたらしい。
　綾瀬の瞳に不愉快が灯る、外部組織の幹部との会合は基本的に余人禁制、でなくても思考通信でも行なえばいいので、態々直接会う必要はない。
　綾瀬は瞳だけで去れ、と射抜き、その顔に小さな驚愕が生まれる。象徴痕を発動させ紫紺のレルナを纏った。
「――遅い」
　男はあくまで落ち着き払った声で言う。すると、縦に走る黒線、村木と言われた男の体が左右に剥がれ、精悍な青年は細く痩せたローブ姿の浮浪者へと変る。
「《林檎売り》！」
　綾瀬は浮かした腰を停止、静かにソファーに下ろす……そして舌打ち。
　最後の最後で似合わない醜態を見せた《林檎売り》の狙いがこれだったのだ。何が目的かは知らないが、《林檎売り》は綾瀬との話し合いを求めていた。
　そして気づくべきだった、樋浦要の偽者を用意できるのであれば、自身の影武者も用意できない理由がない。
（突入前に領域が解除したのも合点がいく）
　村木に皮被りしここに潜入する為に、領域は解除する他なかった。
「この距離では僕の具象より貴様が速いな」

「あの三隅梨穂と切り結び生き延びたという事実を鑑みても、領域系の我々が近接戦を挑み勝ち目があるとは思えんな」
「話が早くて助かります」
言いながら《林檎売り》は半身を逸らす、背後から襲撃、止めに入っていたもう一人の具現師はドゥルウが同胞に化けていたことを理解するや攻撃、右手に剣を生み出し縦に薙ぐが回避、そのまま綾瀬を守るように立ち塞がる。その背中に枝が生えた。
赤く滴る雫を落とす細い突起の正体は、アンドゥリルの五指、一瞬で五メートル以上伸びた枯れ木の如く細い指先が防御していた剣を貫通し男を抉った。
指を引き抜くと男は倒れた、血振りをしつつアンドゥリルは睥睨する。そして口を開いた。
「さて、少々お時間を頂いて宜しいでしょうか？」
いいもクソもあるかっ。
三郷はむしろ開き直ってソファーにふんぞり返る。綾瀬は部下を一瞥、微かに息をしているのを確認した。
「そう硬くならずに、ワタクシの話はアナタ方にも少なからず利のある話なのですから」
「どういうことだ？」綾瀬が顔の前で手を組み尋ねる。
「現在篤倉で多発しているドゥルウ事件、あの『大侵略』ですら氷山の一角、この篤倉を舞台としたある儀式の話です」
「戴冠式か？」
もったいぶった言い方に我慢出来ず先に言う。三郷と綾瀬の視線を受け《林檎売り》は頷いた。
「進藤殿ですね、彼も口が軽い」二度首を横に振りアンドゥリルは続けた。「お話というのは他でもありません、お二人に、ワタクシの王の手助けをして欲しいのです」
無言。綾瀬も三郷も咄嗟に言葉が出ず、《林檎売り》の真意を測り兼ねた。
「我々に魔王の手助けをさせて何の得がある？」

「ムエリカ派が人類の傘下となります」
次に生まれた沈黙は、先ほどものとは様相が異なった。どういうことだ？　という綾瀬の視線に、《林檎売り》は微笑して応じる。
「ワタクシの王の名は樋浦要と申します、かつて枢機機関に協力していた具現師です。
ワタクシから《魔王の心臓》を受け取り、黄金の幻想色を発現しました。
彼女は人に害なす魔王とのみ戦う、という方針を取り、仮に全ての心臓を得、魔王位を継いだならば、ムエリカ派を一つに纏め、人類陣営に帰依する、とも申しておりました」
さて、と《林檎売り》は笑う。
「篤倉の具現師よ、魔王位を狙う者達は誰もがそんな思考を持っているとは限りません、『大侵略』を見れば分かるように、自棄を起こし具現師を襲う者も少なくありません、残るは五柱の魔王の中では、ワタクシの王は最も人間達に友好的でしょう」
「貴様の主観など当てになるか」綾瀬は鼻を鳴らすと「そもそも、人類との融和を謳う魔王となった具現師が既に戦える状態ではないだろう？　あれはもう風前の灯、救済処置として処刑するのが慈悲という状態だ」
「今のままでは確かに戦えません」
「何？」
「《魔王の心臓》の使用は『存在干渉』を誘発します」《林檎売り》は《魔王の心臓》に関する説明をし「つまり、力を使う毎に移植者は己の源案に由来する欲求を衝動として苛まれ、それを満たすだけの事象となるのです」
「心臓移植による記憶転移のようなものか」
三郷の呟きに「そのようなものです」と頷く。
「王の源案は《断罪者》、王は今日にでも《断罪するだけの存在》となるでしょう」
「《十一桁の零》のようにか？　魔王レベルであんな者になれば正

直洒落では済まんぞ」
　出現してから迎撃に向かってはまず間に合わない。検証の時のように出現条件を利用しての待ち伏せが最も効果的な撃滅方法であり、魔王級でそんな暗殺者めいた存在が生まれれば待ち伏せすら不可能になるだろう。
「一つ問う」
　綾瀬が凍土の如く冷たい声を放った。
「そもそも貴様の王が《断罪するだけの存在》となったなら、この交渉自体成り立たないではないか？　どうゆう形態を取るかは知らぬが、そいつはもう罪を裁くだけの……」
　そこまで言って、綾瀬は何かに気付いたように言葉を止める。口許を手で覆いアンドゥリルを睨む。
「愚臣、それが臣下のすることか？」
「しかし、ワタクシの王に信を置くには十分過ぎる筈です。何故ならワタクシの王が一般人に手をださず、篤倉に紛れる魔王と真紅だけを狙い打ち倒すことが照明されたのですから」
「《十一桁の零》も貴様の仕掛けだな、そう傾くように誘導したのか」
「あの方がそういう存在と認知されればそれを殻として扱うことも考えられます」
　三郷もまた、《林檎売り》の狙いに気付いていた。そしてそれを実行するこのドゥルウに激烈な不快感を抱いた。
　愚臣と綾瀬は言う、それは的確な評価だった。
《林檎売り》は己が仕えた王を勝たすために、その王を売ったのだ。
　盲点ではあったが、それが成されれば、たしかに《戦血君》は一般人を襲わない。篤倉に都合よく、魔王と真紅を刈取る凶手となる。
「さて、どうでしょう？　ワタクシの王にご助力する件、少しは考えて頂けるでしょうか？」
　三郷は思考する。申し出自体は破格だ。こちらに還るリターンが半端でない。ムエリカ派の吸収、これは文面以上の効果を発揮する。

現在の具現師とドゥルウの勢力は五分、第三派の助力と第六派の日和見を経て、このパワーバランスだ。
そこに九派の人類陣営への加勢が加われば、天秤は大きく動く、攻勢に転ずれば第六派も追随する可能性もあり、ドゥルウを圧倒できる好機になる。
人類史初の魔王討伐も現実味を帯びてきたのだ。
「だが逆に問うぞ？　その方法を知らせた今、お前を生かす必要もあるまい、実際貴様の安否は無視しても、魔王の制御は可能なのだ」
綾瀬の踏み込みに、《林檎売り》は歪に笑うのみ、そして一言。
「九柱九者入り乱れての戴冠式、命を賭けるのは魔王のみではありません」
《林檎売り》は告げる。
「ワタクシは、《王の法典》です」
告げられた事実に三郷は押し黙り、そして綾瀬は忌々しそうに舌を打つ。
「保身も完璧か、クソめ、何が望みだ？」
「……一つ頼まれて欲しいのですよ、《戦血君》樋浦要様がアナタ方にとって素晴らしいパートナーと成り得る存在ではありますが、少々、嫌な虫がちらついていましてね」
《林檎売り》は囁く様に、己の望みを答えた。
――一時間後、レナノルフにその報せは届いた。

レナノルフからの着信を取りながら、利穂はようやくか、と身を引き締めた。
「はいはい、こちら第四分隊でーす。要の処遇決まった？」
良く通る声が店内に響く、それだけでメンバーに緊張が走った。
『第二から緊急作戦が下りて来た、《戦血君》樋浦要を戴冠式に勝たせる、第一はその補佐に回れ、だとさ』
「ちょっと待って、待っててば、それって何？　どうゆうこと？」
『理由は不明だ、しかし恐ろしく質が悪い』

「どういう意味？」
レナノルフはあくまで冷静に続ける。
『下手に手を出せば最悪、魔王五柱が結託して全面戦争、その場合上尾は地図から消えかねない上に勝算も不安定、ならば魔王一柱を味方に付ける、という案は確かにありだ』
「そんな馬鹿な」
梨穂は信じられない、と言わんばかりに呟いた。
「色々言いたいことあるけど、一番重要なこと良い？　どうやって戦う気？」
対ドゥルウ戦術にあるように、ドゥルウの戦力は同等等級の約五倍、九分の一の魔王とはいえ独力で倒すのは不可能に近く、対抗できる戦力者である要は自失している。
「三郷はデブだし薄毛で臭いけど、それでも頭の回る指揮官だわ」
『前半が只の罵倒なのは気のせいか？』
「それとも要の状態をどうにかできるってこと？」
『主力を《戦血君》が担ってくれる、そんな手段があるなら確かにありだな。
正面戦力となる分隊の被害が減るのが一番のメリットだ、前回で戦闘職員は三割殉職、まともに掛かれば何人死ぬか分かりはしない』
「……具象解析の結果は芳しくないみたいね？」
『どころか解析不能とのことだよ』
「じゃあ一体どうやって……？」
レナノルフは敢えて答えなかった。
『では、三隅梨穂、第四分隊に任務を与える』
「何よ？　要をつれて魔王探しの旅にでも出ろって？」
『茶化すな、《戦血君》の制御、そして戦闘起動については後々説明する』
数秒の静謐、後に冷厳な声で任務を告げる。
『まず、そちらに向った者の指揮下に入り行動しろ』
部屋の鍵が開く音を隊員達が聞いた、そして現れる珍客――空気

が固まった。
『枢機機関は《戦血君》に助成するそれは、彼女が魔王位を継承した際にムエリカ派を人類陣営に帰依するとの確約を得たからだ』
ぐるりと部屋を見渡し、そいつは分隊メンバーに会釈した。
『同盟である以上、相補扶助は不可欠、《戦血君》側から提示されたのは、露払い、魔王に敵対し、魔王を害なす存在の排除』
「……レナノルフ」
誰も彼も動けずに突然の来訪者に視線が集中する。
『報告にあった少年は魔王に対し強い執着を持ち、魔王の剣を有している。よって前述した条件を満たし、魔王に敵対することが予想される』
「レナノルフ！」
声は被されて打ち消された。
『第四分隊は総力を上げて進藤響を拿捕せよ！　これは最優先特務だ！』
携帯を切られ、接続が切れた音がいつまでも耳に残った。そうしてようやくそいつが唇を動かす。
「話の通りですよ、篤倉の具現師諸君、さて参りましょう」
裏切りの騎士を始末しに、《林檎売り》は愉快そうに顔を歪ませた。
蛇が笑えばこんな顔になるのだろう、そう容易く想像させる笑みだった。

第八章・決断の日

これは、彼女の信念を守るための戦いだ。
これは、彼女を彼女として終らす戦いだ。
道潰えたキミの代わりに、ボクがその道を歩き続けよう。
いつか君を超えて見せるから、どうか見守っていて欲しい。
戦う理由も、それだけあれば十全だ。
覚醒動悸、進藤響の場合。

自宅に戻った《暴賢帝》はそのまま休養に入った。
倒れるようにソファーに沈む。排気ダクトがうねる天井は圧迫感がり好きでない、だから手の甲で視線を遮っていた。口から出たのは疲労の濃い溜息だ。
「いやぁ、散々だったね？」
「黙れ、オールレンジトラブルキャプチャー、少しは自重しろ、俺達の情報は篤倉の具現師には流れないようにするのが基本だろうが」
「ごめん、ごめん、私もあそこまで急変するとは思わなくてさあ」
「第四分隊との接触はこの際いい、あの《戦血君》の遺物が徴収されると面倒だ」
「ついでに言うと人に見られていない時のあんたの変わりようって中々笑えるよ」
「最近思うことがある――世間体は大事、曰く至言だろ？」
猫かぶり、とPCを操作しながら《斬切姫》が毒を吐き、《暴賢帝》が鼻で笑う。
「あいつは……どうするだろうなあ」
不意に呟く、と返答は数拍を置いて来た。
「さあ、どれを選択してもいつか後悔する日はあるでしょうね、痛みが残る、傷にもなる、今度こそ立ち上がれないくらいの重圧になるかもしれない」

椅子が軋む音と共に彼女は天井を見上げ、
「本当に、どうするのかしら」
問いを投げた、今ここにいない少年に向かって。

いくら考えても答えは出なかった。
空は夕暮れ、あと数時間で樋浦要は《断裁するだけの存在》となる。救済処置が決まれば連絡を寄越すと言ったが、それらしい着信はなかった。
「でも、そろそろだよな」
樋浦要の生涯は、間もなく終わる。
じっと目を瞑った、心に浮かぶのは今まで過ごした日々の記憶。
朝、夢心地で布団と戯れていれば彼女が飛び込んできた。一緒に登校するのは日課だった、放っとけばいつまでも眠り続ける進藤を、例え遅刻しようとしても両親はシカトする。
曰く、自己責任とのことで、それで遅刻して以来、朝に要が起こしにくるのが日華になった。
女の子と毎日登校すれば、茶化されたりからかわれたりする、気恥ずかしくて居た堪れなかった空気は、もう味わえない。
もう二度と訪れない、一番大切だった時間。
「ははっ」
進藤は弱く笑うと目元に手を伸ばした。
「……まったく、僕は」
一度流れた涙はとめどなく、溢れて止まることはなかった。

市内の公園のベンチに座り一人泣く進藤を見つけ、守屋はげんなりした。
進藤に対する感情からではない、今から自分が行う卑劣さに、である。
「よお、探したぜ」
声を掛けると肩が跳ねて顔が上がる。急いで涙を拭うと立ち上が

った。
「守屋、さん」
「樋浦要の処遇が決まった」
短く言い切る。
「『枢機機関』と『神崎一門』は樋浦要を『戴冠式』の勝者にすることに合意した、本日起こるであろう《断罪するだけの存在》となった後、残る四柱の駆逐作戦に移る」

呼吸が、停まった。
「なんの、冗談ですか？」
「大真面目だよ、進藤、《林檎売り》が生きていた、奴は樋浦の魔王位継承を訴え、上がその提案を受けた、それだけだ」
「そんなことをして、要が魔王位を得てどうなる、望まぬ者を殺してまで得た生であることを知ったら……」
「自殺でもするか？　答えはＮＯ、だろ？」
即答に、進藤は今度こそ絶句する、そして、同時に理解した。
「しない、だろうね。自殺者を責めるわけでもないけど、命を投げ出すのは逃避って考えが彼女にはあった、きっとどれだけ辛い生であっても、彼女は自分の力で出来ることをやり続け、その上で息絶えるだろう」
進藤の知る要なら、きっとそうする。
「関係ないんだね、君たちには、要がどれだけ苦痛を感じようが、どれだけ苛まれようが」
「ああ、魔王九位の派閥をまとめ、人類陣営に帰依する、上の望みはそれだけだ」
進藤は感じる。
「《戦血君》との同盟条件として彼女に敵対するないし害意ある者の打倒を提示された」
自身の心に広がる冷たい波紋。
「その条件を満たすお前は敵と想定されたってわけだ」

凍てつくほどの冷気を帯びてなお、それの芯はとても熱かった。
「これも篤倉の平和の為、進藤響、大人しく縛に付け！」
それは怒りである。
「ふざけるなぁっ！」
自覚した時には弾けていた。
「そんなことを、そんなものを認めろと言うのか！」
「お前が認める必要はねえんだよ、進藤」
進藤の背後から風が抜けた。
「この篤倉に存在する二大具現師組織のうち二つがその方針を決定したんだ」
否、守屋に向かい全方向から風が集まっているのだ。
「言葉でどうこうできるレベルの問題じゃねえんだよ」
幻想色を失った進藤には視えないが、恐らく相当量のレルナが今、守屋から放たれていた。
「二時間、これが残された凡その時間だと《林檎売り》は言った、それを過ぎればどうゆう手段かは知らないが、《戦血君》による魔王狩りが開始されるってことだ」
轟、と逆巻く藍色の風が足に絡まる、と翼を象り守屋を中空に押し上げた。
「分水嶺だぜ？　進藤響、覚悟を決めろ、意地を見せろ、お前の答えを示して見せろ！？」

「彼一人で宜しいのですか？」
モニターが映し出す映像を見て《林檎売り》が尋ねてきた、ええ、と利穂は即答する。
「テンションに応じたレルナの増幅、それが《暴走思考》の能力なのでしょう？」
なら簡単よ、と利穂は言う。
「彼は生み出したレルナを攻撃力に転化することでドゥルウを打ち倒してきた、具現師の基礎となる汎用具象しか使えないのなら銀髪

に任せた方が安全ね」
　他はむしろ邪魔になる、と利穂は結論した。
「攻撃の有効射程は踏み込みと合せて四メートル圏、威力は黄級が一発撃滅するレベル、マスターはタフネスが売りだけど基本は格闘戦だから論外、射程では結花が勝るけど接敵されれば同じく瞬殺なので同上、敵の射程外から一方的に攻撃できる存在」
　それは守屋だけなのだ。
「嫌な役を押し付けちゃった感じで悪いのだけどね」
「まあよいでしょう」
　含みある答えだ、と利穂は思った。
「ま、銀髪ならすぐに片すから見ておきなさい」

　垂直降下してくる風音を頼りに進藤は回避動作を続け、地表に突き刺さる見えざる刃は大地を切り刻み風塵を巻き上げた。
「どうした進藤、《暴走思考》は抜かねえのか？」
　進藤は茂みに飛び込み、視界から外れることで攻撃を封じようと試みた。
「時間稼ぎにもならねぇぞ！」
　低空飛翔に切り替えた守屋が高度を下げ再び進藤を視界に収める。風という特異な武器を扱う守屋は相当にやり難い相手であった。
（射程は軽く十メートルを超えている、おまけに風を刃にするあの具象はどうも誘導機能も備わっているみたいだし）
　追尾というより変化、しかも角度に限度があり、発生源も術者の周囲に限定されるようだ。
　守屋を良く見ろ、集中さえしていれば回避はできる。
「人鞘法で武器を仕込んでいるな？　出さなきゃ奪われない、なんて思っているなら甘いぜ」
　彼我距離は十メートルを維持、風の刃の発生を見過ごさんと最大警戒で備える。
「右手首、貰うぜ」

「――なっ――」
気がつけば大地が消えていた、強力な上昇気流で空へ放り出されたのだ。
地上の守屋と空の進藤、さっきまでとは逆の構図だが立場は超絶不利、進藤は空で姿勢を変えられない。守屋が構える、打ち出すのは恐らく風の刃、宣言通り進藤の右手を切り離し《暴走思考》を抽出する気だろう。
（出し惜しみはここまでだ）
歌姫が彫刻される剣を顕現、レルナを爆発させ風の刃に迎え撃つ、空中で爆裂し進藤も流れる、斜めから地面に叩きつけられ回転した。
「仕舞いだ」
衝撃に咳き込む中、守屋が止めを告げた。
（回避はできない、防御は、くそ、今あるレルナで足りるか！？）
押し寄せる烈風、次の瞬間には風が進藤に炸裂するという距離で、
（え？）
風が、進藤の目の前で消えた。
目の前にあるのは二人の背中、そして聞き覚えのある声。
「少年の窮地に颯爽と出現するあたし、超正義！　公共の場での破壊活動と暴行は元風紀委員として見過ごせない！」
「やあ、少年また会ったね？　どうやらお困りの様じゃないか」

守屋は進藤に向けて放った風をせき止めた存在を確認した。
鉄の鎧で身を包む一頭のライオン、その背後に一組の男女が進藤を守るように立っていた。
「相沢か！」
「ん？　顔見知り？」
「全く記憶にない」
桂の即答に守屋は血管が千切れる幻聴を聞いた。
「いいぜ、くそが！　ここで会ったが百年目だ、邪魔するって言うならまとめて相手してやる」

ズン、という異音、構えを取る守屋の動きが一瞬止まった。
守屋を囲うように生まれた四つの斬痕が大地を抉ったからだ。描かれた四角の中で守屋は冷たい汗が湧き出たのを感じた。
冗談が嫌いなら真面目にする、と戒理が態度を改めた。
「あたしがその気なら君は今の時点で四回死んだ、それが対価だ」
大人しく失せろ、と戒理が言う、気圧されそうになるも寸前で堪え反発しようとする、その時である。
《銀髪、退け》
司が撤退を命じた。

「何故、みすみす見逃すのですか？」
「あら、説明が必要？」
利穂は困った顔で《林檎売り》を見返した。
「貴方が綾瀬をバックに選んだ理由と同じよ」
指揮室のテーブルに腰掛け、《林檎売り》を見下ろし利穂が付け加える。
「彼等は九席と十席、達巳は十二席、序列は彼等が上ってこと」
「つまり、どうすることも出来ない、と？」
「時間は掛かるな、あの場では退く他あるまい」
司が補足したことで《林檎売り》は沈黙した、それを確認した司が更に続ける。
「方針を変える、隊を集めるぞ」

退却してきた守屋が乱暴に扉を開け放つ、傍目に見ても不満ありありだった。
「理由は？」
退散の意図を尋ねる守屋に柊が答えた。
「普通に考えれば分かるだろう」
「司、それが分からないのが銀髪の美点よ？」
「……『神崎一門』について知っていることを並べてみろ」

「あん？　あー、めちゃくちゃ強い集団とかか？」
かなり大雑把な答えに予想通りと利穂と司は目を合わせて苦笑を共有。
岩倉と結花は何も言わず隅の方で黙っていた。心情的にまだこの作戦を認めていないのだろう。
「色々掘り下げて説明しないといけないわねぇ、銀髪『幻想爆発予想』は？」
「《戦血君》同盟でそんな単語出ていたな」
「大雑把に言えば二〇二二年を持って今ある世界は一度滅びるという内容だ」
「以前流行した大予言の類か？」
いいえ、と利穂は手を振って否定した。
「現在ドゥルウは世界に二〇〇〇余り存在していると言うわ、因みに十年前は一九〇〇弱だった」
「増えているのか？」
「生殖能力が極端に低いのは第三派が人類陣営に付いた時に分かったみたいだけどね、ドゥルウを生むドゥルウもいることも判明したし、結果としては増加傾向だわ」
「そして討伐に成功しているのは最近生まれた最新世代、黄金やその側近の最古参クラスの真紅はここ百年、一体も討伐されていない。対して具現師の方は違う、一流、超一流という高位具現師が次々と倒されているのが現状で、戦力は減衰方向にあると言っていい」
このままずるずると進んだ場合、ドゥルウを押さえ込むことが不可能になる。その目安が二〇二二年。
「ポールマン博士は言うわ、ドゥルウの押さえ込み、情報規制や隠蔽が崩壊し多くの人にドゥルウという怪物が知られた時、《来るべき日》を境に世界は改変期を迎える、と。つまりドゥルウや具現師の存在が認知されることで人々が魔法や超能力を許容するってわけね、現在七十億の人類の共通認識である『常識』が魔法や奇跡を打ち消しているけど、その枷が解かれる。

魔法が許容される、超能力が存在する、怪物もそう、あらゆる幻想が認められ余に溢れる、それが『幻想爆発』」
「スケールがでかい話ってことは分かった、分かったが、それが今の状況とどう繋がる？」
「ポールマン博士の予想と同時期に北欧具現師連合が一つの予言を世界に配信したのよ」
「あそこは予知系……『時空干渉』に関する具象が発達しているからな、その予言の所為である連中が脚光を浴びることになった」
「話の流れからすりゃあ」守屋は得心した顔で続ける「『神崎一門』だよな？」
「北欧具現師連合が曰く、『神崎一門』はここ十余年内に魔王九派を殲滅すると言っているのさ」
そいつは、と流石の守屋も言葉を失っていた。
「神崎を邪魔するなかれ、それが現在の暗黙の了解、世界レベルの、よ。笑っちゃうでしょ？」
「つまりやつらは天下御免の免罪符を持っている、奴等が何をしようと、それが魔王九派を殲滅する力に繋がるのなら、と人々は何も言わん」
「救いは、そんな凄い特権持っていながら奴等はまるで興味が無いってとこかしら、相変わらず道場で修練するか、依頼を受けてドゥルウを討伐しに出向くかしかしてないし」
《林檎売り》が綾瀬に近づいたのも、味方に引き込めば多少の無茶が通ることになるからだ。
（想定外は桂と戒理の介入ね）
綾瀬の上には八傑を覗けば三人の上位者がいる。実力主義傾向が強い『神崎一門』であるため綾瀬でも彼等を退かせるには至らなかったのだ。
「話を戻すわ、司、わたし達の達成条件の優先度を明確化して」
「絶対条件は樋浦要を二時間死守し《断罪するだけの存在》とすること。

第二に進藤響が保管する《暴走思考》の奪取だな」
「オフェンスとディフェンスに分けた方が無難かしら？」
「その必要はありません」
割り込む声は《林檎売り》だ。
「綾瀬から決戦場確保の知らせが届いた、そこを使います」
移動しますよ、そう言って《林檎売り》は静かに立ち上がった。

地下の店は所有者に由来し『ライオンの穴倉』の俗称で呼ばれていた。
（何だか言いえて妙だけど）
狭苦しい階段を下りれば行き止まり、扉が出迎えた。穴倉などと呼ばれているだけあり、空気がどこか淀んでいて、妙な威圧感を感じた。
錆び付いた音を鳴らしながら扉を開き店内へ、進藤も恐る恐る店内に入った。
カウンターテーブルに酒瓶が羅列され、他にもビリヤード台などが置かれており、酒場めいた風情である。
正直に言うとまるで事務所という雰囲気はなかった。
「あのどうして助けてくれたんですか？」
進藤は思い切って質問した。
「ふ、困っている人を見ると正義の血が騒ぐのよ」
「一度目はそうだと思います、でも二度目は偶然じゃない」
進藤は否定した。
「あそこは具象で封鎖されていたはずだ」
人払いにせよ、物理的にせよ、と進藤が付けたし、桂と戒理は顔を見合わせた。
「低く見ていたつもりはないけど、うん、いい着眼点だ」
桂は感嘆とした様子で頷いた。
「そうだね、僕達は偶然じゃなく、自分からそうして助けに出た」
「どうして？」

「樋浦要への礼だよ」
自然と出た言葉に、進藤はすぐに反応できなかった。
「もう色々ぶっちゃけようか」
桂は微笑と共にそう言った。
「僕は《魔王の心臓》移植者、《捕食者》の《暴賢帝》で」
「同じく《魔王の心臓》移植者、《刃》の《斬切姫》よ」
気弱に笑う桂に釣られて、進藤も引きつった笑みを浮かべた。しかし、聞かねばならないことが一つある。
「樋浦要への、礼って」
「『大侵略』の時に僕は彼女に助けられた、《粉砕王》に追い込まれていた時の話だよ」
「私は単に後輩の友人だからって理由ね、ほら呆けてないでとりあえず座りましょう？」
ラウンドテーブルを指し、三人はそれぞれの席に着く。
「と、言ってもあんまりゆっくりできる状況でもないけどね」
「要を《戴冠式》の勝者にするって言っていた、けどそんなことできるんですか？」
今の要は戦えない、それは進藤も良く知る事実だ。
「恐らく《〜するだけの存在》の特性を利用するのだろう」
「《十一桁の零》に関してだけど、街が妙なことになっているのよ」
重傷ないし死者すら出ている事件が頻発、更に被害者が起こした問題が流布されている、という。その所為で、《十一桁の零》の行いが正義の鉄槌であると噂されていた。
「目撃者の中には樋浦要を知っている人物もいて、《十一桁の零》＝樋浦要という憶測もちらほら出始めてきた」
桂は静かに断言した。
「明らかな誘導だな、これは」
「《〜するだけの存在》っていうのはね、自身を『在り得ざる現象』に変換する、彼女がどのような形で断罪を執るかは不明だけど、こ

の流れは間違いなく要をそう傾ける誘導よ」
「依頼を受けてその人を殺す、そんな存在に要がなるっていうことですか？」
桂と戒理は頷いた。
「そんなこと……！」
「させたくないかい？」
桂は挑戦的な瞳で進藤を見据えた。
「大の虫を生かして小の虫を殺せ、具現師の中ではこの考えが鉄則となっている、ドゥルウとの戦闘は、それが例え下級であろうと人が死ぬ、犠牲なくして終われない戦いだからだ」
桂は、あくまで柔和に、そして諭すように続けた。
「もし、《戦血君》が魔王位を継承して九派を人類陣営に帰依したとしよう、ドゥルウとの戦闘を肩代わりしてくれたとしよう、死ぬはずだった人間が助かるかもしれない、どころか、人類史初の魔王討伐にさえ成功するかもしれない」
樋浦要を殺すということは、そういうことだ、と桂は言った。
「死人同然の女の誇りを守るために、君は顔も知らない誰かの未来を奪うかもしれない。
それが進藤響の選択でいいのかな？」
繰り返してきた自問自答で、答えの出ない迷宮の命題。
「僕は、要に生きて欲しかった」
進藤は認めた。
「もっと言葉をかわしたかった、手を重ねてずっと二人で過ごしたかった……けれど」
それは偽らざる本音だ。
笑い合い、泣き合って、指を絡めて肩を抱き、肌を合わせて一緒にいたい。
あの時、《水銀の竜》から逃れるためには《林檎売り》から《魔王の心臓》を受け取るしかなかった。
そして彼女がそれを受け取った理由は。

（僕、だよな）
要は、進藤響を生かすために《魔王》となることを選択した。
それしか進藤を助ける手段がないからだ。
もし一人だったのならあのまま死を選んでいただろう。
（要はどこまでいっても要だった）
樋浦要は、彼女が目指す樋浦要を全うした。
なら進藤響は？
「僕が彼女に生きて欲しい、そんな感情は考慮されない」
強く、言葉をかみ締めながら言い切る。
（《林檎売り》に口だけ野朗と罵られるのも仕方ないな）
これは、彼女の信念を守るための戦いだ。
これは、彼女を彼女として終らす戦いだ。
ならば、進藤響のつまらない未練など、迷うに値しない筈だった。
「要の背中を追うのは今日までにします」
「樋浦を殺すのか？」
「世界も他人も知ったことか、もし何か言うなら黙って見ていろ、僕が要の代わりになる」
勇者を目指す、そう言った彼女の道は潰えた。
道潰えた君の代わりに、僕がその道を歩き続けよう。
いつか君を超えて見せるから、どうか見守っていて欲しい。
「戦う理由も、それだけあれば十全です」
魂に火が掛かる、血は熱に、さあテンションを燃やそうか。
「ククッ、ハハッ、ハハハ、アハハッハハハハ、アハハハハハハハ――っ！」
破顔爆笑。
桂が突然笑い出す、嘲るような雰囲気ではなく、心底可笑しいように笑っていた。
「スゲー、スゲー、マジでどう答えるか分からなかったが、それだけ啖呵を切れれば上出来だ」
体をくの字にまげて笑い続ける桂、豹変した態度に進藤がギョッ

とした。
「嗚呼、気にするな、むしろ俺の地はこっちだ」
「獲物を前にした獣が息を潜めるよう、相沢は性格を擬態しているのよ、『この人いいひとかも』なんて思っていたのなら騙されているわよ、在学中にその手で何人の女が泣いたことか」
戒理が心底退屈そうに告げた。桂に気にしている様子はない。
「樋浦要を樋浦要として終わらす、そう言ったな？　進藤響」
「はい」
「もう迷わないか？」
「はい」
よし、と桂は拳を合わせた。
「猶予は二時間、あの《林檎売り》のことだ、もっと時間は切迫しているかもしれない」
桂の強い視線が進藤を射抜く。
「一時間だ、それで決めて来い、でなきゃ俺達が介入する」
「でも要は枢機機関が拘束しているのよね？　あそこに挑むのは彼一人じゃ無謀じゃない？」
「俺達が助力すればなんとかなる、といいたいところだが」
桂は頬を掻いて答えた。
「綾瀬から横槍が来た、貴君等と接触している少年は現在枢機機関と合同で行っている作戦の重要参考人である、なおこの件は『銀』の安全を守る意味もあり、可及的速やかにその少年の受け渡しないし非介入を願う、だとさ」
「対応は二つ、三つ予想していたけど無難なもので来たわね、因みに作戦内容に関しては？」
「秘密作戦につき説明は後日だと」桂は苦笑「道総経由で何か言われるより断然マシだ」
ここまでだな、と桂は歯がゆそうに頭を下げる。
「樋浦の引渡しまで要求したかった」
「いえ、十分です」

笑顔で返す進藤の携帯が震える、こんな時に誰かと思いディスプレイを開け絶句した。
「要、から？」
無論、本人ではありえない。恐らく《林檎売り》からだろう。
そして文面は。
「ツキガクで、待つ、か」
最後の決戦を行おう、そういうことのようだ。
「罠じゃなくて？」
「違うと思う」
進藤は即答した。
「策謀や姦計という搦め手を好みながら、ある一線を越えた敵は真っ向勝負を挑む傾向がある」
あいつにとって進藤は許せない怨敵。
「ならこれは本音だと思う」
「行くのか？」
頷く進藤に桂はよし、と答えた。
「ツキガク男児らしい生き様を見せてみろ」
バシン、と背中を叩く快音が心地よかった。

第九章・超えるべき壁

守りたいものがある。
救いたいものがある。
それは私にしか出来ないこと。
だったらやるしかないと思う。
覚醒動悸、樋浦要の場合。

夜。夕暮れはすっかり闇に追いやられ空はまばらに星が出始めていた。
校舎に人の気配がない、領域の展開は感じないので綾瀬が人を締め出したのだろう。
本当になんでもありだなあ、と思いながら眼前を見た。
立ちふさがるように佇むのは四人――司を除いた第四分隊の面々だった。
物々しい静寂を破ったのは利穂だ。
「で、桂と戒理。あんた達がついてきた理由は？」
「見届けに来た、それだけだ。別に邪魔はしないよ」
「そう、なら――」
「彼女を終わらすことを決めました、樋浦要との約束を僕は守る」
言葉を先取りした進藤に、一同は苦い顔をする。
「やる気になったのは嬉しいけど、銀髪から状況の説明は受けているのよね？」
「樋浦要を勝たせる、ですね」
微かな動揺さえ見せず進藤は返答する。
「本当に嫌なシチュ、それ以上に嫌な役回りだわ」
仕方がない、と利穂が小さく独白した。
「手出しは禁止、分かったお二人さん！」桂と戒理に釘を刺し「任務に則り、進藤響の身柄を拘束する！」

四人はそれぞれ誓言を唱え幻想色を発現する。
強大な意思力の増加は物理的な圧力となり空間を軋ませる、そのプレッシャーは進藤にも及んだはずだ。
しかし、進藤は動じなかった。
非難や罵声を飛ばしてもいい状況にも関わらず、彼はただ澄んだ声で詠った。
「覚悟は、歩んだ道が証明する」
それは誓いの言葉だ。
具現師が具象を使う根源。
具現師が具象を求める理由。
己の動悸を言語化した、具現師の決意表明、信念の祝詞。
纏う色は緑。
森色の幻想色はとても穏やかに波打っていた。
「要との約束、つまりは魔王を相手にする、それは分かっている？」
「――はい」
「勝つつもり？」
「――はい」
「ならいいわ、どうせわたし達に敗れるようならそれは分を弁えない愚物の妄想、それが戯言でないことを、行動で証明してみせなさい！」
「無論そのつもりです」
宣戦布告に、進藤は静かに笑う。
「蹴散らします」
「ハッ、上等よ」
一触即発の空気が即座に爆発した。

進藤は《暴走思考》を掌から引き抜く、鋼の刀身が淡い月光を反射し神々しい光を灯した。
「ヘイ、ルーキー、前言撤回のラストチャンスだぜ？」
唐突に口を開き、月光のスポットライトを浴びた守屋が進藤に一

歩を踏み出した。守屋の手元が陽炎のように揺らぐ、幻想色が環を紡ぎ組みあがり一振りの槍を成した。
「僕から降りるつもりはありませんよ」
「だよな、むしろそんな簡単に心を変えられるなら、具現師になんてなれない、か」
「はい、僕には僕の、貴方達には貴方達の通すべき我がある、それは理解していますが、やっぱり僕は止まれません」
「ホントに分かっておるんか、おどれ？」
割り込む声がある――岩倉だ。
「魔王と戦うって意味を、おどれは本当に分かっておるんか？　グランドキャニオンを要塞とする第五位や、バミューダトライアングルに巣くう第八位は、世界最強の具現師による軍隊を持つ米国が、二十年がかりで駆逐は愚か傷一つ付けられへん化物や。
人類史上ただの一柱も魔王は打倒されてへん、その最初におどれがなれる確証はあるんか？　なによりこの篤倉を戦場にする権利がおどれのどこにある！」
怒りはむしろ冷たく凍えていた。
「ワイは弱いで、少なくとも隊長やそこの銀髪よりは、確実に、な。結花もそうや、魔王と戦えば瞬殺や、そんでそんな微量な力量の具現師がなんだかんだで篤倉じゃ最も多いんや」
誰も彼もが勇者ではない、そう岩倉は続ける。
「弱いワイ等にやって守りたいモンがある、おどれは、自分がしようとすることで、どれだけの人間が危険にさらされるか！　そういうことを、一度でも考えたんか！」
獅子の咆哮の如く荒い声で、岩倉は進藤を弾劾した。
「惚れた女の尊厳を守りたいその心意気は買うわ！　結局は自己満足やないか！　おどれのエゴのために、この街を危険に晒す権利があるんかい！　おどれの理屈で、関係ねえ他人まで巻き込むなや！」
吹き荒む颶風のような非難に、返るのは柳のように落ち着いた声だ。

きっとこの剣は試金石。
《断罪するだけの存在》となった彼女を、本当に打ち倒せるかどうか、その束を鋼の意志で握り、その刃を鉄の覚悟で振れるか。
「僕の行動が貴方達の大切な物を踏み躙る、そうは言うけれど、ねえマスター、我を通すっていう事は、多かれ少なかれ敵を作るということですよね？　僕の場合、それがちょっと多いだけですよ、大を殺して小をも殺す、そんな何も生まず失うだけの答えで、決断で、行動で、そして結果を生むだけかもしれない」
だけど、と進藤は言った。
「そうでもしないと救われない奴がいるんだよ！　死ぬことも許されず、意思もないまま、己の信念を背き続ける、そんな奴がいるんだ！」
「女のために世界すら敵に回すかよ、言っちゃ何だが相当きちぃぞ？」
「孤立無縁なら孤軍奮闘すればいいだけですよ」
一息。
「そうかい」岩倉はうな垂れたように肩を竦める「なら仕方ないわ」
岩倉は横目で結花を見る、結花は岩倉の意を汲み取った。
「結花、オーダーや、ちょっと拳で語り合って来るわ」
「ユカちゃん思うに、恐ろしく一方的な話し合いっすよ、それ」
面倒臭そうに、結花は言葉を吐いた。
「――問う、其の身の意味は？」
「我が身は御身の盾にして鎧」
「――問う、其の心の意味は？」
「我が心は御身の敵を薙ぐ刃」
「誓え、私が独りでないというなら――」
「――己の全てで貴方の所望を叶えよう」
儀式、儀礼、そんなものを思わせるやり取りだった。終えた結花の顔は微妙に赤い。気にせず、岩倉は結花の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「ワイはちょっと面倒な具現師や、こういう風にこいつとやり取りせえへんと、本来の能力が発揮できないんや」
結花は無骨で大きな手を乱暴に払う。岩倉は剛毅に笑うと、顔を引き締める。
「これがワイの本気の本気、器物系神秘級具象、《敗れざる者（ナイト・オブ・オース）》や！」
叫ぶや馳突開始。青の幻想色が岩倉を纏いそして変貌させる。滑らかな黒耀を思わせる金属がくまなく衣服ごと全身を覆っていき、ただでさえデカイ岩倉の巨体が鉄の装甲の顕現で一回り大きくなる。
重量感ともに威圧感も増量。中世の騎士を思わせる風体、淡く青色が波打つ鎧はまさしく幻想。兜の正面、十字の穴から覗く瞳には激烈な闘志の炎、燃え滾る意思を表す如く、完全装甲化した岩倉が獣さえ怯ます雄叫びを上げた。
「始めるで、ド突き合い！」
死闘の開幕、火蓋は切られ、浅木幕は落とされる。

グラウンドを走り抜けるのは三人、進藤と、両脇に並び等間隔をキープする守屋と岩倉だ。
守屋が動く。滑るような疾走は滑空、靴裏に展開した風が守屋を浮遊させ低空飛翔で地面を翔けていた。守屋の手が翳る、と思った時には既に迸る槍の穂先が眼前に迫っていた。
超速の一撃を反射神経と勘だけで迎撃、緑と藍の幻想色が火花となって散った。
二度、三度、夜闇に光の花を咲き吹かせ、槍と剣の攻防が続く。七度目の剣戟は空を切る、守屋の体が跳ね上がり一瞬で視界から消失。半円を描くように《暴走思考》を上方に薙いだ。稲妻となって落ちてくる刺突を間一髪で弾き返す。
上空から降り注ぐ刺突の豪雨、半死角からの連撃を振り切るように駆け抜ける、肩や頭髪を散らしながら、頭上より声が降った。
「やるじゃねえか」守屋が笑う。「タイマンなら、な」

逃げる先には甲冑騎士。避けていたのではなく、避けさせられていた、呈よく誘導されていた事実に歯噛みながら、岩倉にも注意を向ける。
「見せてみぃ、テメェのエゴを！」
岩倉が間合いに入る、岩倉の光る篭手が突き出され進藤は反射的に受けた。逆手に持ち替えた《暴走思考》に膝をあてて衝撃に備える。尋常ならざる圧力の炸裂はその直後、吸収しきれない威力が足と大地を強制的に分離、進藤を吹き飛ばす。
――そして。
信じられないことに、進藤は宙を矢の如く飛び、二階の窓から校舎に叩き込まれた。

戦闘を眺めながら三隅梨穂は司と思考通信をしていた。
「司、どんな感じ？」
《レルナの数値化完了、現在《藍》の銀髪が十八、《蒼穹》のマスターが六、《青》の結花が三、そして隊長が一だ……もう少しやる気出せ》
「いいじゃない、何だか銀髪とマスターだけでも勝てそうだし、それで進藤君は？　結構プレッシャーあるけど」
「一七六だ」
即答に、息が詰った。梨穂は辛うじて感想を吐く。
「ちょっとした《橙》の構成レルナ並み、ね」
《《林檎売り》曰く《象徴痕》と同じ増幅機能。つまり彼はレルナの二重増幅により莫大なプールを獲得していることになる》
「ちょっと計算外だわ」
具象戦において重要な要因には『レルナのプール量』がまず上がる。
レルナは具象を駆式するのに必要な、いわばガソリンでありスタミナ。総量の差がそのまま勝敗に繋がるわけではないが、形勢は不利と言わざるえない。

ただの具現師なら、大技で集中砲火すればそれこそ瞬殺だったのだ。
《あのプール量なら《幻想鎧》に注ぎ込めば、十分防ぐことは可能だろう》
「微々ウザね、全く」
《よって対応戦術としては近接戦闘による制圧から《暴走思考》の奪取を行うのが最善》
「ＯＫ聞いていたみんな？　解ったらさっさと引導渡して上げなさい」

教室の窓から叩き込まれて廊下まで転がり、そのまま大の字に倒れながら進藤はゆっくりとした動作で身体を起す、頬にチクリとした痛み、硝子の破片で切ってしまったらしい。
見ぃつけた、とノリの軽い男の声が届いた。二階廊下の窓の外、藍色の風を纏い空に浮くのは、銀髪逆毛の槍使いと。
自らの拳で打ち出した軌跡を、跳躍一つでなぞる、岩倉庸介も窓から飛び込み追ってきた。
反射的に十メートル以上後方に退避する、
「――ッ！」
も、岩倉は床を踏み割り加速、弾丸となって進藤に驀進、廊下の端から端まで移動する。
進藤の抜き打ち、その一撃は岩倉に到達することなかった、胸甲に届く寸前で不可視の壁に阻まれるように威力が完全減殺される。
「無駄やで、お前が《暴走思考》と象徴痕によるレルナの二重増幅を行うように、ワイは《幻想鎧》と《敗れざる者》による二重の防壁を張っているんや」
常識外れの防御力の正体を明かす岩倉、その背後に高まる圧力、異変を感じる。
「燃費が悪いさかい、これ使うと再生能力を封じなあかんのがネックやけど、な！」
轟、と風がうねる。螺旋描き、穂先に集う藍色の風を束ねる守屋

は槍を横に薙ぐ。
放出されるのは秒速三十メートルの突風。軽自動車を余裕で吹き飛ばす風圧は、横幅三メートルに満たない廊下ではどうあっても躱せない。
廊下の窓から外へ飛び出る、そこに躊躇はなかった。削岩機めいた風の奔流、飲み込むモノ全てを食い千切り斬殺する魔物の顎に噛まれるより、二階から飛び降りた方がまだ安全だ。
着地と同時に重心をスライド、地面を転がり衝撃を殺しながら即座に態勢を立て直す。
「視認」
一秒――まず聞えたのは声。飛び降りた先に居た少女、結花が進藤を見つめ、進藤もそれを確認した。
二秒――そして違和感。周囲に感じる妙な熱。まるで自分の中に砂漠かサウナを埋め込まれたような、そんな熱を感じながら進藤は対応を模索する。
三秒――違和感は確信へ。体の芯が燃え上がる、比喩ではない、身体の奥が、否、精神が勢い良く燃え盛る、灼熱する思考、周囲の酸素が焼きつくされる錯覚に喉を押えた。
四秒――フラッシュバック。思い出すのは結花との会話、あの時、彼女は何と言った？　彼女の視線には何が宿り、自分は一体何秒あの視線を浴びている？
五秒――「視殺」と彼女は告げるより早く、進藤は《暴走思考》を地面に叩き付けた。
舞い上がる粉塵。視界から外れることで熱は除去された。進藤を犯していた超高熱が消えることで体が急速に冷える。　立眩みを覚えながら前進。
こいつは危険だ！
レルナを弾薬と仮定するなら、《加熱の刻印》は敵の弾薬庫に火種を放り込むようなもの、相手の保有するレルナをそのまま相手への攻撃手段とするのだ。

《暴走思考》を逆手に握る。視界から外れるように迂回し背後から一撃を見舞う、可能な限り迅速に、元々煙が邪魔になっているが、見られる要因はなるべく避けたい。
（背後から首筋に石突を叩き込む）
煙に浮ぶ人影を確認、進藤は更に肉薄する、瞬間だった。
舞い降りた守屋が結花の腰を抱くとそのまま飛翔、入れ替わりに岩倉が降下、着地。
「ロック」頭上からの声、岩倉の突進、応戦する進藤は内心で焦り始めた。
《加熱の刻印》を浴びている状況では、進藤の命は五秒で燃え尽きる。それを回避するには術者の排除か視界から外れる必要がある。
前者は不可能。何故なら彼女は守屋に連れられ空へ逃げた、対空攻撃を進藤は持ちえていないし、具象を行使しようとする隙を見逃すほど岩倉は甘くない。
後者は至難。唯一の遮蔽物である校舎を背に立ち塞がるのは岩倉、これをやり過ごし再び学校に戻るのは、中々以上にハードルが高かった。
だが、それしか方法がない以上、進藤は決行する。
岩倉はあくまで時間稼ぎに徹していた。こちらの攻撃を受けるが反撃はせず、しかし、校舎への道は開けない、そうする内に上空からの視線は進藤のレルナを熱変換し、その身を焦がし、焼き上げていく。
一秒、二秒、三秒、無為な攻防と共に時間を浪費する、それは死に至るカウントダウン。肉体の温度がどんどん上昇する。
映し出された立体映像には六人の人影が映っていた、それを囲うように観ているのは三人。
三郷、《林檎売り》、そして綾瀬だ。
綾瀬は退屈を噛み殺し映像に目を向ける。勝負は既に詰みに入っていていた。

「五秒で終いか、相変わらず容赦がない」
「それにしても学校への被害が多すぎる、やはり僕の領域を展開しておくべきだった」
《林檎売り》は薄く笑うだけだ。椅子に座り眺める様は中継試合を観戦する気楽さである。
「領域を展開されてはワタクシの《腐実樹園》が発揮できません。第四分隊が負かされるようならワタクシが出る、その時貴方の領域が張られていたら面倒なのですよ」
《林檎売り》は嗤う。第四分隊が勝てばよし、負けても消耗した進藤を己の《領域》に飲み込みレルナを吸い上げ無力化する。
「まあ、出来れば引導はワタクシが渡したい、そういう欲はありますが、ね」
くつくつ、と響く歪な笑声に応えるのは三郷。
「残念ながらそれは敵わないでしょう、煙幕如き風で払われれば時間稼ぎにもならない、もう決着ですよ」
戦況を冷たく分析し、三者は進藤の敗北を断定。モニターへの興味が薄れた。

「……ま、当然そうなるっすよね」
守屋に抱えられ空から進藤を見据える結花がつまらなそうに呟く。地面に大穴を穿ちながら時間稼ぎをしていた進藤は《幻想鎧》を展開、結花の具象を無力化した。
篤倉トンネルでもやられたことだ。あれ以上のレルナを保有する進藤なら造作もない。
《結花、《加熱の刻印》を切るなよ？　お前は進藤のレルナを分割使用させることに勤めろ》
「あいさー、分かっているっすよ」
《敗れざる者》を起動した岩倉なら《暴走思考》とも打ち合える、それを補佐するのが結花の役割だ、攻撃にレルナを割けないように《幻想鎧》を展開させ続ける。

《白兵戦闘の技術は岩倉に分がある、戦車砲めいた進藤の火力を封じれば制圧は時間の問題だ》

進藤を校舎の二階に叩き込んだ拳を《暴走思考》で打ち払った、《幻想鎧》による減殺効果で一度目のように吹き飛ばされることもない、攻防は成立している、が。

（埒が、空かない！）

敵の目論見は理解している。それを打破する手段も一つだ。

（なら迷うわけにはいかないよな……！）

何かを感じ取った岩倉が腕を交錯、深緑の幻想色の炸裂と共に、あの重厚な騎士が宙に浮き、踵を大地に噛まし何とか減速を試みるが、五メートルほどの強制後退を余儀なくされる。

「まだ、足りない、か」

進藤は呼気を整え警戒態勢を崩さない。吹き飛ばされた岩倉は今起きた現象を冷静に解析し、

「――無茶苦茶や」

その上で告げた、目の前の少年の蛮行に正気を疑った。

「お前、保有レルナを根こそぎ攻撃に使ったな？」

「正解、見たままだから特に推理の必要もないけどね」

「正気か？　確かに《加熱の刻印》がお前を焼き切るには五秒を要する、それ以内にワイを仕留めた上で《幻想鎧》を再展開し結花の具象を無力化する、それは分かるわ。

しかし、保有レルナの全てを攻撃に割くちゅうこうとは」

たった一合のやり取りでレルナが枯渇する。

「消費したレルナは象徴痕を起動すりゃ練成できる、せやけど、レルナの消費は精神疲労、毎回全力で攻撃して防御して、その度、象徴痕で練成するなんてやり方」

例えるなら、短距離走のペースでフルマラソンをこなせというのに等しい。

「無茶や、無理や、無謀や、そんなん、絶対途中で潰れちまうわ！」

「ふふっ、ははは」
道理を説いたつもりでいたからこそ、笑われた事実に岩倉は幾らかムッとした。
「無茶？　当然！　無理？　分かっているさ！　無謀？　だからどうした！」
ふう、と息を吐き、進藤は剣を向ける。
「逆に問うよ？　歴史上ただの一柱すら討伐出来てない魔王を！　貴方は常識的な手段で倒せると！　そう本気で思っているのか！」
反論はない、視界の端で桂と戒理が小さく笑っていた。
さあ、反撃開始の烽火を上げよう。
レルナはまだまだ足らない、現在の全力では岩倉に傷らしい傷を与えるには至らなかった。
「進藤響は炎だ。魔を滅ぼす業火であり、人を見守る灯火だ、樋浦要の代わりに成ろうって言うのなら、永劫輝き続けるしかないんだよっ！」
血は熱に、際限なくその温度を高めテンションを燃やせ。
「Ｙｅａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ——！」
声を振り絞る。《暴走思考》のコーラスに加わりながら進藤は更なる具象の発動を試みた。
今、進藤がすべきこと、それはあらゆる無茶を通すこと。
短距離走のペースでフルマラソンを、そんな非常識に望むにはまだまだレルナが足りない。
空想開始。
声が続く限り己の心は燃え続け、意志がくじけない限り己の足は走り続ける。
今から成すのは、そんなデタラメだ。
「法則系・白銀級具象《永遠炉心》発動」
顕れたのは、無数の記号が絡み合う二つの円環、円環は進藤の両腕に腕輪のように填まり紅蓮の輝きを放ち続けている。

一同無言、声など挙げられるはずもない。
文字通り爆発的な勢いで膨れ上がる進藤のプレッシャー、その正体を理解したからこそ、皆一様に言葉すら発せ無かったのだ。
「なんやねん、それ……？」
乾いた笑みが零れる、非常識過ぎる解答、だがもはや岩倉も結花も、彼を害なすことは不可能となった。
「レルナの、三重増幅やと……！」
「レルナが足りないなら、もっと生み出す手段を作ればいい」
「からきし、笑えんわ」
進藤は猛然たる勢いで岩倉に迫り、応じる岩倉に右薙ぎの一撃を見舞う。宣言通りの全力、レルナを凝縮した高硬度を誇る装甲に亀裂が走る、だけでなく、水を切るような感触で右腕そのものが宙を舞った。
血飛沫と苦痛を撒き散らしグラウンドを転がる岩倉は装甲を解除、同時に枯渇したレルナを増幅、結花の鬼火を宿す視線が向けられるも、同じく《幻想鎧》で防ぐ。
先ほどは逆の展開、しかしまだ安心できない。切り飛ばされた右腕は、既に再生しかけている、馬鹿げた治癒力は蜥蜴というより原生生物なみなのか、岩倉を行動不能にするには急所の破壊でも足りないかも知れない。
「容赦はしません」
大上段から膝をついた岩倉に《暴走思考》を振り下ろすと、電光石火の刃に阻まれた。
「銀髪、マスター、結花、退がれ、もうお前達じゃ手に負えない」
梨穂は霧を周囲に撒きながら有無を言わさぬ圧力で命令する。
「数値解析は聞いていたな？　総力二四〇だぞ、《真紅》の構成力並みだ、それを宣言どおりに攻撃に用いられれば……骨すら拾えんことになる」
まったく、と梨穂は苦笑し、次の瞬間、隊員は信じられないものを見る。

「お前もお前で、とんだデタラメだ」
《最強》と称される傲岸不遜の具現師が、進藤響を自分と対等かのように振舞った。
「ようやく真打か、進藤君、気を抜くなよ？　そいつは君と対極に位置する具現師だ」
背中から桂が助言する。意識は前、梨穂に向けながらそれに耳を傾ける。
「お前は疑問に思ったな？　レルナの三重増幅、そんなアホみたいなやり方で獲得した総量を、文字通り攻撃に注いだ、なのに何故その一撃が止められたのか？」
刃を離し一歩引く、長身な女は対峙するとより一層大きく見えた。
「何らかの具象？　否だ。純粋な破壊力を前に、対抗出来るのは同じく等しい威力だけ、今のお前は文字通り必殺で、その一撃はあらゆる防御を貫く矛に等しい」
ならば。
「この人も僕と同量のレルナを、その攻撃に注いだ……？」
「正解、勘がいいぞ、進藤君」
桂は続ける。
「二度目だが彼女は君と対極だ、三重増幅なんてデタラメ、クソふざけた倍率でレルナを増幅する君に対し、彼女はどうして君に匹敵できたか？　所有源案の数？　悪いが彼女も緑、つまり初期位階で保有源案は一つ。では同じく増幅能力の多様？　それでは対極にはなりえない」
つまり、と桂は告げる。
「三隅梨穂、奴は意思力そのものがデタラメだ。他に比類なき基本値が莫大過ぎる。更に能力は複雑怪奇、まともにやりあうのは骨が折れるが……これも経験、存分に味わってこい」
「よくよく口の回る男だね、彼は」
梨穂は右手の湾刀を前に、左手の直刀を逆手に握り半身を逸らす。
「では準備はいいかな？」

「いつでも」
それが、合図。
進藤が行なったのは至極単純な攻撃だった。つまり、真正面から飛び込んだのだ。何の策もなく突撃、本来なら愚の骨頂とも呼べる攻め、ただし速度が問題だった。
レルナにより強化された並外れた脚力、そこから繰り出す跳躍は、足場をまるで爆薬が炸裂したかのように吹き飛ばし、進藤の小柄な身体を超速度で発射させる。
獲物を仕留めるために余分な行動は不要、そう宣言するような直進、生身では反応すら出来ないであろう踏み込み、しかし、次の瞬間には、進藤は弾かれたように真横に飛び退いていた。直後、進藤が踏み込もうとした場所、その地面から無数の刃が生えた。剣、刀、斧、矛、収束した霧が無数の得物を成して剣山の如く地面から急襲する。歪な霧の動きを捉え、殆ど勘だが守勢に回ったのが功を奏した。
（武器の創造……器物系か！）
ひと息で十メートル以上移動し《暴走思考》を構えなおす進藤は、梨穂の追撃に目を剥いた。地面から生えた無数の武器、それらが残らず宙に浮き、その切っ先が進藤に向いたのだ。
果たして次に起る現象を想像できぬ者がいるだろうか？
立て続けに鳴る発射音。宙に浮ぶ武器群が見えざる弦に番えられ、矢群となり飛来。鋼の殺到に対し進藤は構わず前進する、速度は先ほど違い人並みで、乱射される武器を躱すほどの機敏さはない。
だが硬い。全面に収束したレルナの壁が、あらゆる攻撃を弾き、防ぎ、遮断する。雨風のように降り注ぎグラウンドを穿孔し、爆撃の如く踏み割る鋼鉄の礫を、進藤はまるで意に介せず直進し続ける。鉄の雨を凌ぎきった進藤は再び加速、目暗ましに武器を撒き散らし仕切りなおしを図る梨穂目掛け、身体ごとぶつけるように剣を突き出した。

（なるほど、これは厄介だ）
ゴリラにでも殴り飛ばされたような衝撃が肩に炸裂した。
胸を貫かんとする銀光は、実際のところ視認も反応も出来なかった。ただ歴戦の勘が生命の危機を知らせ、殆ど直感で回避行動に転じたのだ。
小石のように跳ねる梨穂だが、攻撃は当っていない、ただ掠っただけで、それも剣にではなく、交錯した進藤の肩と擦過しただけである。
至近距離を超スピードの物体が駆け抜け、それに身体の一部が触れてしまった。ただそれだけで、梨穂を数メートルも跳ね飛ばしたのだ。
必殺と乱入者が称したのも頷ける。当れば即死は免れず、剣圧だけで意識が跳びかねない。実際視界はぐちゃぐゃで、平衡感覚は完全にイカレている。
（相手の総量以上のレルナを破壊力・速力・防御力に注ぐことで防御不能・回避不能・攻撃の無力化を実現する、ね、なんて散財的なスタイルかしら）
ふらつく梨穂を好機と見たのか、進藤は《暴走思考》を振るう、弧を描き三日月を成す斬撃は、首を刎ねる速度と軌跡、そして威力を満たしている。
（つまらない幕引きね）
ドロドロに混ざり合った視界の中で、梨穂は退屈そうに心中で零し、
（迂闊が過ぎるわよ、ホント）
静かに笑った。

進藤の脇腹が数センチほど抉られていた。地面に滴る赤い斑紋を見下ろしながら、傷の具合を空いている左手で確かめる。ベットリと張り付く血液は不快だが、戦えないほど致命的ではない。
「迂闊が過ぎる、それでも反応速度は神憑りと評価するわ」

素直に全く嬉しくない評価だ。攻撃の動作の中で不思議な微笑みに不安を抱き、初撃同様に回避に移った訳だが、ほぼ同時に背後から生えた槍の穂先が進藤の脇腹を貫いたのだ。
具象とは空想の顕現であり、即ち、思考が術行使の鍵となる。意識をミキサーに掛けられたような状態で、マトモな思考など出来はしない。
つまり、あの瞬間、進藤と接触してたたらを踏んだ梨穂に、具象の発動は不可能であり、今の攻撃は成立しない筈だった。
「……貴女は権化系ですか」
「正解だ、冴えているね、進藤君」
答えたのは観戦気分の桂である。
「権化系については知っているかな？　生物のようなもの、化身を生み出し使役して」
「戦力が権化に集約され、術者は何の力も持たない、でしたっけ？」
記憶を頼りに口に出し、先の攻防を振り返る。
「思考不能にしたから甘くみていました、武具創造で器物系だと思っていた」
「その通り、微細な霧の一滴、その一つ一つが権化系具象により生み出された化身だ。術者を叩くのは対権化系具現師の鉄則だが、それは化身と術者を分断してからの話だぞ？」
相変わらず視線を合わせず会話をする桂と進藤を前に、梨穂は言う。
「他人にわたしを語られるのは好きじゃない、だからわたしから説明してあげるわ」
ボタボタと血が落ちる脇腹を無視して進藤が立ち上がる。
「わたしの《Cのデーモン》は最大六十億で群れをなし、状況に応じて《器物系》《法則系》《領域系》を使いこなし敵対者を迎撃する、具象を操る具象だよ」
「さて」と梨穂は呟く「はい」と進藤は返した。

「互いのタネはこれで知れた、位階は同列、プールも同等、条件は五分」
「だからこそ、ボクは貴女を超えます、次に続く魔王に挑むため」
「無理だ」進藤の宣言を梨穂は切って捨てた。
「タネは知れ、底が見えた、お前のスタイルも把握して、その対処も掴んだ、何よりお前とわたしのプールが同等というのが致命的だ」
梨穂は静かに宣言する。
「わたしの勝利、お前の敗北、決着としよう、新米」
言い終わるやいなや、恐ろしいほどの速度、そして量の霧が周囲を覆い尽くす。
「超えられるものなら――超えて見せろ」

梨穂と進藤を覆う《Cのデーモン》に注意を払いつつ、後手に回るのは上手くないと判断。進藤は梨穂の懐に一気に飛び込む、寸前、間に塞がるように霧が集うのを確認、跳躍方向を変更し左へと逸れる。
大地の爆発。集う霧が収束するやミサイルでも直撃したかのように炎と黒煙が巻き上がった。咄嗟に迂回し爆発をやり過ごすと速度を落とさず、背後に回る。
旋廻した進藤を待ち受けていたのは、鋼の槍の容赦ない爆撃だ。空を舞う《Cのデーモン》が次々に組み合わさり武器を成すと、そのまま落雷の速度で地面を目指す。
遥か高き天に浮ぶ無数の黒点、その量は空を覆うほどであり、人並み外れた反射と速度を持っても躱せない圧倒的な面攻撃。仕方なく、進藤はレルナを防御に回し、降り注ぐ兇刃を跳ね除ける。
梨穂はその間に間合いを広げた、敵の狙い、最悪すぎる戦術に進藤も気が付いた。
「相手の総量以上のレルナを注げば、その攻撃はあらゆる防御を貫通し、防御すればどんな攻撃も凌ぐに至る」
釘付けにされ、速度が一気に落ちるが進藤は強引に梨穂目掛けて

駆け抜ける。
「でも残念ね、わたしとお前の総量は同等だ、だから無茶な戦術に綻びが走る」
一向に縮まらない距離に焦れた進藤は、隙を見て幻想鎧から点火にシフト、四肢を掠める鋼の槍が進藤を刻み鮮血を飛ばすも、強引な突撃は梨穂への肉薄を実現させる。
右に薙ぐ、胴を引き裂く一閃は、突如として突起する巨大な柱が梨穂を持ち上げ不発、代わりとして鉄柱を叩き折った。
「プールは同等、相手の総量以上のレルナを注ぐという戦術は当然過ぎるジレンマに陥るわ」
七・八メートルはあろう柱が徐々に後方に傾いていく、緩やかな倒壊を前に進藤はその壁面を疾走し、天辺に立つ梨穂を目指す。
「即ち、速力・破壊力・防御力、お前が凌駕できるのは、三つの内の一つのみ、ということだ」
鉄柱は霧散し、進藤は宙に放り出される、更に霧が進藤に集まり即座に爆発した。
「速力を取れば、防御が損なわれ、防御を取れば足が止まる」
夜空を引き裂くように跳躍していた梨穂は、再び進藤から大きく間合いを開けている。
「中れば必殺の威力であろうと、届かなければ意味がない」
梨穂が選んだのは膠着状態。敵を磨耗させ疲労させる消耗戦だ。
「もう一度言うぞ――超えられるものなら、超えて見せろ」
一度に梨穂と同等のレルナを消費し、その都度《象徴痕》を起動する。その精神疲労は想像を絶する。心が折れれば、その瞬間に勝負は付くだろう。
（試しているのか、僕を）
テンションに応じて増幅率を変化させる《暴走思考》、それは、進藤の心が折れる時、即ち、レルナのプールが崩壊する。
「上等だよ、《最強》！　三隅梨穂！」
声を張上げ気分をハイに、血は熱に、心を燃やしテンションを爆

発させろ！
「これで限界だなんて、誰が決めた！」
逆に言えば、心を強く燃やせば進藤は更に強くなれる。
「超えられるものなら超えて見せろ？　ざけるな《最強》！」
だから燃やせ、テンションを燃やせ、もっと！　もっと！　もっと！
「こんな消極策で萎えるほど、ボクの心はやわじゃない！」
だから。
「これで止まると思うなら、止めて見せろよ！」
その時、梨穂は確かに戦慄した。
ダムの放水、そんな勢いで膨れ上がる進藤のレルナ。何より梨穂が目を剥いたのは、
（止まらない……！）
どれだけ増幅する気なのか、膨れ上がる勢いは一向衰えない。数値解析など訊く気すら起きない。
放つ武器群は、しかし、《幻想鎧》に阻まれる。しかも足も落ちていない。
（完全にこっちのプールを振り切っている！）
夜の闇を切り裂く深緑の幻想色の帯が、彼の移動を跡として残る、まるで翡翠の風だ。
（対応し切れない……！）
防御は絶対、あらゆる攻撃を遮断して、速度は極速、あらゆる反応も許さない。先読みと妨害、進行方向に無数の壁を生み出してラグを作るからこそ、回避が間に合っているものの。
（まだ上げる気っ！）
梨穂は見た、迫る剣に灯る幻想色が、不可解な点滅をしていたことを。
退いて下さい、喉元に刃を突きつけて進藤が懇願する。
「ねえ、あんた、自分が何をしようとしていたのか解っている？」

進藤が言葉の意味を理解できてないのを見ると、梨穂は直に前言を訂正した。
「いや、何でもない……退く云々は概ね、ＯＫよ」
その言葉を聞いて思わず脱力仕掛けるが、何とか気を引き締めた。
異様な圧力を感じ取ったからだ。
校庭の大気に亀裂が走る、輝から漏れるのは黄金の幻想色。
亀裂より出るは少女。
衣服は、流し、流させた血で編んだかのような真紅。
許せざる相手を睨み付けるような凶貌の手斧を握り。
感情の無い顔と瞳が、真っ直ぐに進藤に向けられた。
九大魔王第九位・ムエリカの後継候補九柱の一。
《魔王の心臓》移植者、《断罪者》の《戦血君》。
眩い限りの登場だった。

終章・ラスト・デート

泣いてはいけない、そんなことはない。
恐れてはいけない、そんなことはない。
屈してはいけない、そんなことはない。
ただ忘れてはならない、何故戦うか、その理由を。
アリス・ポールマンの手記より。

「アホなっ！　何でこのタイミングで魔王が登場するんや！」
悲鳴に近い絶叫。程度の差はあれ、皆一様に《戦血君》の登場に動揺を隠せないでいた。
そして何より、最悪なのは。
「進藤！　ここは危険だ！」
利穂は進藤が何かを言うより先に続けた。
「戦闘は二段構え、わたし達の失敗も考慮に入れてある！」
このシチュはかなり不味い、第四分隊の敗北を見届けたのなら奴が動く。それより先に何とかして、
「やれやれ、結局こうなりますか」
何とかして、やりたかったのに……！
「……《林檎売り》！」
梨穂を無視して歩みを進めるドゥルウは、進藤に語りかけた。
「お久しぶりですね、僅か一日でここまで変貌するとは、些か驚きですよ」
薄汚いローブを羽織るアンドゥリルは感慨深く要と、進藤を見比べる。
「要は、《断罪するだけの存在》となったんだね」
「ええ、《断罪者》という属性に染まった彼女ですが、それでも樋浦要様の要素が消えたわけではない」

「樋浦要が《十一桁の零》である、そんな共通認識を人々に与えることで要をそうなるように誘導した、それで要に魔王とドゥルウを始末させるつもりなのか」
「既に依頼は設定しました、《戦血君》、最初の敵はアナタですよ、進藤響」
告げられた事実にそうか、と進藤は呟いて、そして笑った。
「感謝する、礼を言うよ《林檎売り》、僕がここで要を止めれば彼女の信念は守れるってことだろう！」
「然り、ワタクシ達の成否、三人きりで決めましょう」
《林檎売り》は告げる。
「領域開放、腐実樹――」
領域が周囲を飲み干す、第四分隊を、桂と戒理を、存在するだけで、レルナを搾取する古木の森、これだけの具現師がいれば一体どれだけのドゥルウを産み落とすのか、そして、それらを前に進藤は果たして魔王とまともにやりあえるのか？
絶望が心を満たす最中、それは起きる。
声が途切れ、姿が消える。進藤、要、《林檎売り》、桂と戒理が唐突に、グラウンドから消失した。
「えっと、ユカちゃん思うに、これって何事？」
夜風が吹き、これまでの戦闘が嘘であるかような静けさに満ちる。
「領域が発動すれば、ワイ等も飲まれるんやないんかい？」
梨穂は虚空を睨む。
「空間跳躍？　違う、気配は確かにここに残っている」
ここではないここに、彼らは確かに存在する。
「任意の対象を位相空間へ転移させる、こんな領域は篤倉には一つしかない」
ハッと息を飲む隊員達、梨穂も半信半疑のまま、その憶測を口にする。
「綾瀬の領域、《八面鏡獄》だ」
「ユカちゃん思うに、何で今……？」

論ずるまでも無い。
あの晩、梨穂が言ったではないか。
「具象の基本原則にある様に『領域は重複しない』のよ」
紛れもなく、これは《腐実樹園》の封印行為。
「綾瀬の奴、土壇場でアンドゥリルを裏切ったんか！」
喜色を孕む岩倉に、迷いながらも頷いた。

「――な、に？」
第四分隊の姿は消え去り、周囲は凍土のような静謐に包まれる。
呆ける《林檎売り》、そして進藤とは裏腹に、桂が堰を切って笑い出した。
「こいつは、《八面鏡獄》？　ハッ、流石は綾瀬、真性のドゥルウ嫌い！」
「へえ、従う振りしてハメたって訳？　ちょっぴり好印象よ」
その事実を受け止め、《林檎売り》は大きく息を吐いた。
「やってくれましたね、篤倉の具現師よ」
その声は微かに震えていた。出し抜かれたことに対しての怒りか、それとも命の危機を感じ取っての不安か。
「第四分隊の姿は見えません、他組織を容易に使わないという、信条を徹底してとのことか、それとも疲弊している彼女達ではワタクシに吸収されるのを懸念したのか」
この領域の中に綾瀬は存在する。直接戦力が権化系並みに足りない領域系が、護衛も連れずに術を使った、ならばまずはそれを叩くべきか。
《林檎売り》がそう方針立てした時だ。
「つうかそこの腐れ家臣、当然且つ見事に俺達を無視するなよ」
「あたし等だけこの領域に取り込んだってのは、つまりは足止めってことでしょう？」
桂と戒理は、進藤と《戦血君》に背を向けて、立ち塞がるように《林檎売り》の前に立つ。

二人は告げる、どこまでも軽く。
「ここから先は進ませない、だからお前は眼前の敵だけを見ていろ」
「ラスト・デートよ、進藤君、だから彼女をちゃんと満足させてあげなさい」
そんなやり取りを、《林檎売り》は吐き棄てた。
「――度し難い、ああ度し難いぞ、篤倉の具現師！」
氷のように冷たく、機械のように冷淡に、起伏のなく感情味のない声に、始めて色が付く。
「何と言う侮辱。何と言う屈辱、初めてですよ、具現師、初めてワタクシは己の手で敵を殺してやりたい、そう思いました！」
激情は燃えるように、《林檎売り》を吼えさせた。
「ワタクシ達、三人の問題に土足で踏み入った、それは万死に値する、ワタクシが直々に始末して差し上げます！」
一息。
「九大魔王第九位、《侵食王》の後継、《戦血君》の騎士、《林檎売り》！　ワタクシはワタクシの王のため、如何なる敵にも屈しない！」
「へえ、いいわ、全然そそらない奴だと思ったけど、そんな貌も出来るのね」
受けて立つ、瞳で、声で、空気で、断言する戒理に桂が割り込んだ。
「腹壊しそうで気はすすまないが、仕方ねえか」
「そりゃ、私だって同感よ、あんなの刻むと変な感触残りそうで嫌だけどさ」
「……別に誰だって構いません、ワタクシはワタクシの邪魔をする者を等しく排除するだけですので」
煮え切らない二人に苛立ち、そう挑発した時である。空間が霧に翳ると、不敵な声が三者に届いた。
「――なら、私がお相手するわ」
ザッと砂を踏み、現れるのは女。驚きを見せたのは桂だ。

「お前、一体どうやって？　ここはあいつが認めた奴しか入れないはずだぜ？」
「ふっ、ふっ、ふっ、不法侵入と無断借用は私の隠された迷惑特技の一つよ！」
などとのたまい、三隅梨穂は剣を向ける。
「やられっぱなしは趣味じゃないの、付き合って貰うわよ、《林檎売り》」
「構いません、誰であろうとワタクシはその全てを薙ぎ払い、王の栄光を掴むまで」
梨穂と《林檎売り》は互いに身構える。視線は相手を外さず、梨穂は軽い調子で残る二人に釘を刺した。
「まあ、そんなわけだから、あんた達は黙って観戦でも――」
足元から伝わる地響き、何だ？　などと思うよりも早く、極大の衝撃破が炸裂し、続く言葉を閃々に引き千切る。

それは文字通り、戦闘の余波である。
切り結ぶのは進藤と《戦血君》、歌姫の長剣と凶貌のハチェットを叩き付け、ぶつけ合う、動作としては至極単純。
ただし周囲に及ぶ被害が絶大だった。
大量の攻性レルナを注がれた剣と斧は、実の所全く触れ合っていない。刃と刃が触れ合う間際、磁石が反発するように、ギリギリと無音の鍔迫り合いを展開、数瞬すると剣と斧の双方が弾かれて、同時に爆風が薙がれるのだ。池に小石を投げ込んだように、二人を中心に波紋が広がり、緑と金の幻想色が吹き荒れ八方に拡散していく、更に、逆巻く風に煽られるよう、もしくは重力が逆転したかのように、大地と、その上にあるものが順々に剥がされ、宙を飛んだ。
冗談のような光景、だが本当に笑えないのはこれが、校庭に生える木々や設置された鉄棒を引き抜き、体育館や校舎の屋根を掻っ攫う、風力階級十以上の風災が、実は剣と剣をぶつけあって生まれた火花程度の事象、ということである。

関係ない他人を巻き込むな、と岩倉が言ったのはこういうことだ。
ドゥルウで赤、具現師で紫、を超えれば戦略兵器に匹敵するとされる。
例えるなら、魔王級の戦いとは核兵器同士がぶつかりあうようなもの。
本来、街の一つや二つなど焼け野原と化すのが普通であり、ならば、
「魔王の戦いとしては、地味な部類になるのかな？」
と、進藤は苦笑する。
意図せず周囲を半壊させるような二次災害、そんなものではまだ温い、黄金、こと戦闘に特化したレベル・ナインと激突すれば、こんなものでは済まされない。
「綾瀬って人が裏切ってくれて良かった」
だからこそ、魔王と戦うためには、現実の篤倉に戦闘による大破壊を起さない《領域》が必要だった。
「約束、果たすよ？」
象徴痕が起動しレルナを増幅、《暴走思考》の歌姫が声を重ね更に強化、進藤の四肢に八つの装備された円環が更に増幅、際限なくレルナが膨れ上がった。
（何だろう？　この感覚）
肉体の温度は燃え盛り興奮と昂揚に熱る。
集中力が絶頂まで高まり鋭敏化していく。
死線にして死地、なのにまるで怖くない。
何をやっても上手くいく、何をされても対応出来る。
そんな錯覚。
一種のトランス状態だから？
半秒で生が死に反転する戦闘の最中だから？
（何かが、違う）
魔王を相手にしている、なのに負ける、ということを想像できず、必ず勝つ、そんな確信が背中を押す。

（本当に何だろう？）
進藤響は今、自分が神様になったかのように感じていた。
梨穂の生み出した鉄壁は爆風の直撃に三秒持たなかったものの、それでも四者が戦闘圏から離脱するには十分な時間を稼いだ。
「俺が言うのも何だか、もう少し慎ましく戦えないのか、奴等は？」
呆れたように呟いて、にらみ合う梨穂とアンドゥリルを見て、疲れたように息を吐く。
「やめとけよ、別にお前等が争う理由は無いはずだぜ？」
桂の言いように、顔を顰めたのは双方同時。
「まず《林檎売り》、散々煽っておいて何だけど、別に俺も春日井も進藤に加勢しようとは思わない、だから、態々俺達に喧嘩を売る意味はない」
《林檎売り》の困惑した雰囲気を置き去りにして、桂は続けた。
「そもそも、領域を封じられた段階でお前が出来るアシストなんて皆無だろ？　それとも剣戟の火花が暴風にまで発展する近接戦闘に突っ込むか？　蟻のように踏み躙られるだけだし、《王の法典》が失われれば本末転倒だろう？　だから三隅、お前がそいつに突っかかる理由もこれで消える」
会話の流れがこっちに及ぶとは思わなかったのか、梨穂は虚を疲れて慌てた顔を晒した。
「わざと負けたのは、進藤と樋浦を逢わせたかったからか？　ここに来たのはその戦いの邪魔をさせないためって訳か？　殊勝なこと何より、だけどこいつにはそんな力はない、だから戦う意味もない」
無言を守る二人に対して、口を開いたのは戒理である。
「わざと負けたの？　あの隊長さん」
「綾瀬の領域に踏み込んだ、そしてさっき自分で言っただろ？　『無断借用と不法侵入』とかどうとか、それはつまり、あいつは他人の具象に干渉する能力を有している」
「……確かに、そんな素振り見せて無かったわね、そもそも、ジャ

ック・スキルがあるのなら三重増幅をキャンセルできたワケだし」
微妙な空気が流れる中、両者はまだ納得し兼ねているようだ。やれやれ、と肩を竦めると桂は《林檎売り》に耳打ちした。
「じゃあこうしよう、《林檎売り》、お前は《戦血君》に、俺は進藤に己の命を預ける。この戦いが終るまで休戦だ」
告げられた提案の意味を、《林檎売り》はすぐには飲み込めなかった。
「進藤が負けたら、お前に俺の首をくれてやる、あそこまで頑なに挑もうとしたんだ、俺達の正体には察しがついているのだろう？」
「――正気ですか？　《緑》如きが《黄金》に勝てる、と本気で思っているので？」
桂は答えず、その場に黙って腰を下ろす。その態度で全てを語っていた。それが癪に触り《林檎売り》も隣に座る。
「訊きたいのは二つ、そこの女隊長がワタクシに危害を加えてきた場合は？」
「あれはあれで筋は通っている、構えも取っていない相手を殺しにくるほど無法者じゃないよ」
言われた梨穂は軽く舌打ち、楽しそうに微笑む戒理に促されその場に胡坐を掻いた。
「では、王が敗れた場合、ワタクシはどうすれば？」
「それは俺が決めることじゃない」
妙に力の篭もった言葉に《林檎売り》は首を捻る。これは一種の賭けである、なのに一方の掛け金が不明ではフェアではない。なら誰が決めるのか、その問を投げるより先に桂は戦いに意識を向けてしまったので、疑問は心中に残された。

戦いは既に人の領域を逸脱し始めていた。光り輝く軌跡を残しながら進藤は疾走。並走する《戦血君》と剣の応酬も行ない、生ずる無尽蔵の衝撃破が周囲に破壊の限りを撒き散らす。広大な敷地を持つツキガクの、端から端まで一気に駆け抜ける、その時、眼前に妙

な圧迫感を抱いた。
（領域の端、かな？）
封鎖型の領域は任意の空間を外界と完全に分離する。風景としてはその先があっても、見えざる壁が通行を邪魔し、脱出を妨げるのだ。綾瀬の領域は最大で篤倉そのものを封鎖できる、だが、今回は括る相手が魔王なのだ、硬度を重視してツキガクのみを対象としているのだろう。
だから、こんな芸当も可能だった。
見えざる壁とは見えないだけでそこにある。ならばと、進藤は壁目掛けて跳躍すると何も無い空間を蹴りつけ夜の空へと登り始めた。
垂直上昇する進藤と《戦血君》はその間さえ複雑に剣と斧を絡ませている。叩きつけ、切りつけて、時に受け、返し、また返し、その度に緑と黄金が藍の闇に華を咲かす。
荘厳華麗な戦闘は、しかし壮絶な削り合いだ。
進藤は全力である。上級ドゥルウ並みのレルナを一つの攻防、移動に消費して、象徴痕、円環の籠手、歌姫を刻む長剣を以って増幅。三重増幅を行って得たプールは、しかし3秒として保たない。
熱した鉄に水を掛けたように、進藤の身体からは絶えず緑の幻想色が噴出されていた。
同時に、《戦血君》も必至である。
《戦血君》は進藤の攻撃を全弾パリングしている。『在り得ざる現象』と化した彼女はドゥルウ寄り、恐らくレルナの再分配による損壊修復も有している、半端な攻撃なら即座に回復されるだろう。もしも進藤の攻撃が取るに足らないものならば、適当に身体を噛ませ接近し、一刀で息の根を止めればいい。
それをしないということは。
「僕の攻撃は有効ってことだろ！」
幾ら魔王といえ、真紅級の構成力を込めた攻撃を受けてなお突撃するなど無理があり、浴び続ければ只ではすまない、上に、そのペースに付き合えば保有レルナも壮絶な勢いで消費する。意志力が希

薄な要に象徴痕の起動は不可能、《魔王の心臓》のプールを失えば戦闘続行は不可能となる。
この削りあいを続けるだけで勝敗は決するのだ。
見えざる足場を利用しての上昇も長くは続かない、横としての限界があるように、縦にもその上限は存在する。
（月にだっていけそうだってのに）
天井の接近を感知して進藤は迷わず足場を蹴った。ぐるん、と宙返りをしながら夜空にその身を投げる。見下ろす校舎は粒のように小さく、そして遠い、街明かりが描く地上の星空に急速降下。《戦血君》もまた進藤を追い、担ぐような姿勢から斧を振り下ろす、寸前、進藤の肌が粟立った。見間違いではない、《戦血君》の武装が一回り大きくなっていたのだ。本能で危機を察知し思わず受ける、そしてそれが正しいことを、進藤は身をもって知った。
重さが倍増された一撃は、進藤を一条の流星として、ツキガクの屋上に叩き落し、三階天井、三階床、二階天井、二階床、一階天井と順々にぶち抜き、大地へと叩き伏せた。

「……死んだ？」なんて物騒な物言いは梨穂。既に超人漫画めいた戦闘となっており、目で追えている者は少ないだろう。
「いや、生きているな」
鼻を動かして桂は答える。その桂に疑問を挟むのは戒理だ。
「いきなり攻撃力が跳ね上がったけど、今まで手を抜いていたのかしら？」
「それはない」桂は即断で否定。「あいつは《断罪するだけの存在》だぞ？　断罪に全力で取り組むだけの存在、進藤同様に初っ端から全力だ」
「攻撃力が上がったのは、もっと単純なルールってわけ？」
梨穂の指摘に桂は頷く、答えを告げたのは意外なことに《林檎売り》である。
「能力ですよ、あれこそ、《戦血君》樋浦要様が誇る《第二種空想

顕現術理》その二振り目、《激情本能（レイジング・ハート）》はレルナが消費される毎に、質量を増大させ威力を上げる」
なるほどね、と戒理は納得した。
「どうやら要はあらゆる手段で進藤君の退路を絶ちたいみたいね。進藤君？　これが最後だから、一秒でも長く居たい、なんてセンチな理由は、彼女のお気に召さないみたいよ？」

数百メートルの高度から地上に叩き付けられたわけだが、外傷は一切なく無傷だった。常識離れした己に呆れながら、そんな自分を圧倒する《戦血君》に畏敬を抱く。
これが魔王。ドゥルウ最高等級にして、この世に九つ限りの最悪と称される、史上不敗の絶対者。そんな次元違いの存在になってしまった幼馴染に抱いたのは、不思議な事に今までの記憶だった。
「……そう言えば昔から焦れた奴は嫌いだったよね？」
パラパラと零れ落ちる埃や砂の雨を浴びながら、進藤は大の字で地面に転がり自身で穿孔した穴を見上げていた。
「ビシッと決めて欲しいのかな、やっぱり？」
決して明かすことのなかった二振り目の武装、《激情本能》。進藤はその性質を既に理解していた。
「半端に追い込めば逆に危険、つまりこう言いたいんだろ？」
確固たる信念と覚悟でもって、一撃の下に僕の心臓を穿ってみろ。
「やってやるよ」
正直疲労は限界だった。象徴痕の起動は三桁を超えている。恐らく気を抜けば一瞬でこの身は糸の切れた人形のように崩れ落ちる。進藤は無理やり身体を起すと数歩だけ歩き振り返った。奇妙な偶然だ、ここは進藤と要のクラスでもある。
もう二度と、彼女と共に来ることなどないと想っていた場所。
穿たれた穴は天井の月の光を誘い込み、青白い光柱を生む。無音の着地、月の光と共に真紅の衣装を靡かせ、《戦血君》が追ってきた。

《戦血君》の金瞳が水平移動、進藤を認め、双方同時に床を蹴る。

「哀叫しろ！」

上段より振り下ろされる斧、下段から掬い上げられる剣、前傾姿勢で激突する両者は、拮抗する破壊力を前に完全静止。

「号叫しろ！」

剣から放出される翡翠の幻想色と、斧からあふれ出す黄金の幻想色、二色が絡まり、荒れ狂い、教室に金と緑の光が渦を巻いた。

「絶叫しろ！」

信じている、ただ信じている。

彼女の望みを叶えたい、そう思う自分自身と。

自分を終らしてくれる、そう思ってくれた彼女を。

進藤響はただ信じて、

「喚き散らせ！」

この瞬間に、全霊をぶつけようと更なる力を込めて、

「Ｙｅａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ
ａａａａ——！」

放った一撃は生涯最高の一撃。

恐らくドゥルウであれ具現師であれ、防御不能な威力を誇る。

実際、魔王の手斧も大きく後方に跳ね上がり、無防備となった細身に、長剣が深々と突き刺さった。

まさしく生涯最高の一撃である。

迷い無く万人を退ける覚悟と意志の元振られた一撃は、誰にでも可能なものではない。そもそも、魔王に手傷を負わせた具現師自体が稀少である。彼は賞賛こそされ貶される謂れはない。

故に、

仕留め切れなかったのは、単純なる戦力差に他ならなかった。

「Ｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ
ｏ——！」

吼えたのは《戦血君》でも進藤でもない。彼女が握る手斧が叫んだのだ。
斧に刻まれる貌が更に醜く歪む、怒りに、憎しみに、殺意と闘志を爆発させ猛り狂う。
《戦血君》は頭上で一回、身の丈を超えるほど肥大化した斧を旋廻させた。
ただそれだけで、机を、椅子を、扉を、壁を、吹き上がる烈風が残らず蹂躙し、至近距離から炸裂する圧倒的暴力を前に、進藤は為す術もなく吹き跳ばされる。意識も思考も粉微塵、混濁し混沌し、自我が喪失、する寸前に見えたのは顔、黄金の光の中で無表情な瞳と交錯する、思わず手を伸ばし――
霧消する、消滅する、消え去り壊れる、進藤響は絶対的な虚脱感に沈んでいった。

一階が残らず吹き飛んだ、のみならず、支えを失った二階より上も、重力に任せ自由落下する。硝子細工を高所から落としたかのように一瞬で瓦解する学び舎は、例え現実のものでないにせよ、背筋を凍らすのには十分だった。
校舎から距離を取り、グラウンドの隅へと移動していた四者、暫し呆然とそれを眺めていた。夜気とは別の冷気が四者を凍らす、同時に、蒸すような熱が喉を焼き、乾いた口腔内に大量の唾液を生んだ。
「ええと、相沢？　今のって？」
「単なる斧の一振りだ」
目の前で校舎を爆破された。そんな超絶破壊力を、ただの一言で説明する。
「レルナの消費が攻撃力を上げる、とは、奴にとっては、命を削れば削るだけ威力が上がるってことだ」
進藤の攻撃に対抗するため、向うも多少なりとも《点火》による迎撃をした、だから攻撃力が徐々に上がり、そして今、進藤の攻撃

は《戦血君》に大きな傷を与えた。
「文字通りの致命傷、瀕死に等しいが、同時にそれは《戦血君》を爆発させる、奪われた分、失った分だけ威力を上げる《激情本能》、その結果があれだろう」
崩壊する校舎から雪崩の如く迫る煙、それを指す桂に戒理は声を潜めて耳打ちする。
「それは解るわよ、それを踏まえても有り得ないわよ、この威力、明らかに《粉砕王》を越えているわよ！」
「あいつに限らず同じことをやれ、と言って出来る奴なんていやしないよ、断言するが《戦血君》はこと攻撃力という一点において型に嵌れば、九柱九者の頂点だ」
掻いた胡坐の上で頬杖をつく桂は「さて」と改める。鼻はある事実を桂に報せていた。それは進藤の意思消失であり、このままではただ殺されるのを待つのみだ。
（咄嗟に展開した《幻想鎧》で即死は免れたか）
桂は、届く事のない言葉を投げかけた。
「進藤君、寝ていていはやられるぞ、まだお前は《戦血君》の心臓を破壊してはいないのだからな」

煙る視界、咽こむような土臭さの中で、進藤は両膝を付き《暴走思考》を杖として倒れることにかろうじて抗っていた。
「それとも、こう考えているのかな？　もう自分じゃなくても彼女に引導を渡せる、ならここで彼女に殺されてもいいのでは？　等と、そんなふざけた思考をしているのではないだろうな？」
耳に届く声は異国の言葉、かき混ぜられた頭では内容を理解するには及ばない、でも、とても大切なことであろうと、無意識で直感していた。
「ならば言おう、今死ねば無駄死にだ」
進藤はまだ動けない。
「《十一桁の零》となった樋浦要は綾瀬と三郷が管理するだろう」

《暴走思考》を握る拳が微かに動く。
「具象により一般人からのアクセスを退ければ、断罪の依頼はコントロールできる」
裏に秘められた悪意は進藤の予想を上回る。桂は続ける。お前がここで彼女を終らせないと、どうしようもない最後が訪れると、進藤に知らしめる。
「《戴冠式》の参加者を狩りつくす、だけじゃない、奴等のことだ、有用活用するため篤倉に迫るドゥルウ、具象犯罪者、さらには政敵にけしかける可能性もある」
「解るか？」と桂は告げる。その意味を、その結末をお前は想像できるかと、桂は問う。
「お前は何のためにこの戦いに臨んだ？　彼女の信念を守るためだろう？　いいのかよ？　今死ねば、彼女は戦奴確定だぞ？　望まぬ相手を殺し続けた、今後は魔王とその従者、更には神崎一門や枢機機関の便利屋として多くの具現師、ドゥルウを始末するだろう、その最後は何だと思う？　九分された心臓と《王の法典》の完成、再び目を覚ました彼女はこの世界に何を感じる？　知らずに殺めた者の中にはお前さえ含まれる。
それを知った時、彼女は己を許せるだろうか？　何よりお前は」
一息。
「お前は、そんな結末を許せるのか？」
無論、許せる筈は無い。
その言葉は文字通りの起爆剤、消えかかった炎を再び轟々と燃え立たせる。
気が付けば進藤は地を蹴って、悠然と歩み寄る《戦血君》に走り出していた。
象徴痕を起動、具象を起動、《暴走思考》を起動、再び発動する三重増幅。

増幅されるレルナは全て剣に一点集中、《戦血君》の間合いは必殺の殺戮圏、迎え討つ《激情本能》は止める術なく、如何なる活路も刈取る確約即死の一閃、

（なんて誰が決めた！）

相手の総量を越えるレルナを生み出して、それを望む一点に集約し、対象を凌駕する。それが進藤響きの戦術であり、烈々極まる暴力を体現する《激情本能》は、そんな進藤のお株を奪うものだ。斧の一振りで巨大な颶風が指向性を持たせて放出、前に塞がるあらゆる障害を駆逐せんと大地を奔る。純粋な大破壊は、小細工や浅知恵を無造作に打ち砕く。

（やることは変わらない！）

進藤は迷い無く突っ込んだ。守屋の風すら陳腐に見える、泣いて許しを乞おうが、蛮勇を持って果敢に挑もうが、無慈悲にして公平且つ区別も差別もない、死の旋風はまさしく大地を水平疾走する刃、生ある者を許さない。

《激情本能》は斧という白兵武器の形態こそ取るが、その有効範囲は刀身と刃筋から推測される射程を悠々と超越する、速度では決して躱せず、守勢に回ればジリ貧。

だから、圧倒しろ。

避けるな。

逃げるな。

躱さず、打ち合え、真正面から攻め込んで、正々堂々ぶち倒せ！

《暴走思考》も《激情本能》も、あいつが生み出した、付加された能力が異なるだけで、本来そのポテンシャルは同等。

《激情本能》は命を削ることで、比類なき威力を有した。

なら《暴走思考》は？

（決まっている）

まずは一撃目、《暴走思考》で強引に風を引き裂く、全身に浴びせられる衝撃を無理やり耐え、意思力だけで突破する。防ぐことすらままならなかった、それを今は、何とかやり過ごすことが出来る。

血を熱に代えて心を燃やせ！　例え灰になったって構わない！
続く二撃目、歩みが止まる。振られ続ける斧、生み出される破壊力、それを前に、進藤は防ぐことに成功したが、その動きを封じられた。
足りない、まだ足りない、彼女に届くためには、今の自分じゃまだ及ばない。
怖れるな、畏れるな、恐れるな、懼れるな！
出来ると信じて、やれると思い込め！
これだってまだ二次災害、本物の刃にはまだ触れてさえいないんだ。
「前戯如きに時間なんて使ってられるか！」
だから増幅、象徴痕を起動、具象を起動、《暴走思考》を起動、心を燃やしレルナを増幅、少しずつだが、進藤に殺到する圧力を、押し返し、この身は前へと前進する。
「まだまだぁっ！」
象徴痕起動、具象起動、《暴走思考》起動、増幅して増幅して増幅して、象徴痕起動、具象起動、《暴走思考》起動、増幅して増幅して増幅して、象徴痕起動、具象起動、《暴走思考》起動、増幅して増幅して増幅して、象徴痕を起動、具象を起動、《暴走思考》を起動、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅、増幅！
「――要！」
猛り狂う風を越え、ついに彼女に辿り着いた。
《暴走思考》と《激情本能》が鬩ぎあう。緑と金の炸裂。とてつもない耳鳴りが周囲を支配する。
斧と剣は彫像のように動かない、五分の状態で静止して、無音の攻防を続けている。
もうひと押しが足りない。
足りないのなら、燃やせ、もっと、もっと、もっと、もっと。

渾身の力と全ての思いを叩きつけるように叫ぶ。
「ボクは……！」

光が爆発した。
グラウンドの中央で反発する二色。
真紅の衣装に身を包み、怒りの顔を刻む手斧を持つ少女。
即ち黄金。
歌姫を刻む長剣を握り、喉を裂かんと絶叫し続ける少年。
即ち――白銀。
誰も彼も、その意味を知り愕然とする。ただ一人、梨穂だけが密かに笑っていた。
「ねえ、これって？」
「幻想色の変色、位階の上昇よ。具現師の位階、幻想色の色は何で決まるか知っている？」
疑問を露わにする戒理に対し、梨穂が質問で返す、答えたのは桂だ。
「空想の顕現、なんて無茶な術、具象でさえ容易には実現出来ないものがある。『異界創造』、『時空干渉』、『霊魂練成』、『終焉否定』、『万象改竄』、五つある『不可能域』に近い空想保持者がより高位の幻想色を持つに至る、だったか」
絡み合う銀と金。光の海を眺めながら梨穂は言う。
「あいつの空想は『終焉否定』。永久機関の類ね、テンションが燃える限り、際限なくレルナを増幅し続ける無限増幅ってとこかしら？」

ゆっくりと《暴走思考》は《激情本能》を圧し始めた。進藤の身に起きた異変、突然の幻想色の変色、《緑》から《白銀》へのシフト、細かいことは分からない、ただし言えることは一つある。
もう、負けない。
レルナは原泉の如く溢れ出る、消費した瞬間には、それを上回る

量がこの身に満ちる。
これは万能感、もはや己に不可能はないという自負。
負けない。
敗れない。
屈しない。
だから、
後は――勝つだけだ。

それは、幻のように儚い最後。
泡沫のように、弾けて消えた。

目も眩むほどの幻想色に包まれていた、だからそれは見間違いだったのかも知れない。
だけど、その場にいる全員は確かに、それを見た。
無秩序に繰り返される剣戟、もしくは完全に計算しつくされた剣舞、荒々しくも美しい、そんな一つの攻防は、唐突に終りを迎えた。
神速の応戦の最中、彼女の動きが不自然に止まる。動きだしていた、だからそれは止まらない。不意の停止に、剣は容赦なく《心臓》を貫き破壊する。レルナの収束機能を失い、彼女の体は徐々に四散していく。
一人は眼を疑い、一人は沈黙し、一人は息を飲み、一人は瞠目し、そして、進藤は叫んだ。
「要！　これで良かったのか！」
吹き荒れる黄金、身体の端から粉雪のように散って行く彼女に、進藤は声を張上げる。
「ボクは約束を果たせたのか！」
金色の瞳、感情を見せない顔、断罪以外の行動欲求を排除した存在は、確かにその瞬間、
「ボクはね！　進藤響は、キミのことが、樋浦要が！」
たとえそれが見間違いであろうとも、進藤響は忘れない。

「――――――」
言葉は大音量の爆音が呑みこんだ。自分の耳にさえ届かない言葉が、果たして彼女に届いたかは定かではない。
それでも、
進藤は忘れない、
あの時、
彼女は、
確かに、
微笑んだのだ。

からん、と《激情本能》が音を立てて地面に落ちた。

「――それがアナタ様の答えなのですか、王よ……？」
呆然と呟く《林檎売り》、疑問の鉾先は、先の《戦血君》の結末だろう。
抵抗を止め致死確実の一撃に身を晒す、あまつさえ、その最後は微笑さえ浮かべた。
それではまるで。
問うべき相手はもういない、同様に答えはもはや闇の中、だが、想像することは誰にでも出来る。
戒理は躊躇ったものの、結局言うことにした。
「これが、彼女の望みってことなのでしょう？　《断罪する存在》になった自分を、一瞬、元に戻してしまう程に強く望んだ、ね」
「……結局は独りよがりの暴走というわけですか」
《林檎売り》と進藤響。
似て異なる二人の従者。
「失われた王の復活を目指すあんたの忠誠も認めるし、友人を手に掛けてまで約束を果たそうとする進藤君の覚悟も凄いと思う、けどね、《林檎売り》、あんたと進藤君には一つの、決定的な差がある わ」

一息。
「あんたが仕えていたのは《戦血君》じゃない、自分の理想よ」
痛烈な批判は、恐らく《林檎売り》の心に深く突き刺さり、そして抉った。
「……そうですね……」
忠誠に狂う家臣を一概に悪とは呼ばない。ベクトルが違うだけで《林檎売り》の思いは確かに本物なのだ。恐らく、出会い方さえ変わっていれば、
「そんな仮定に意味はねえか」
柄ではないと首を振り、視線に気付いた桂は横を向く――《林檎売り》である。
「賭けはワタクシの負けです、好きになさい」
「それは俺が決めることじゃない、そう言った」
視線の交錯、数秒の沈黙、《林檎売り》は立ち上がった。腰を浮かす梨穂を片手で制し、大丈夫だと瞳で告げる。
「……礼は言いません」
「要らん。俺達は何でも屋、春日井曰く、困っている奴等の味方だからな」
不自然な顔の強張りは、思わず笑いそうになったのか、《林檎売り》はもう何も言わず歩き出す。
目指す先には、進藤響。

《激情本能》を拾い上げた。思ったより軽いその斧を進藤は暫し見つめている。
莫大なレルナを消費して世界に新たな則として加えられた斧と剣は、故に術者とは別個の存在として確立され、だからこそ要の消滅を以っても世界に残った。
右手に《暴走思考》、左手に《激情本能》、雌雄一対ここに揃った。
足音に気づき振り返る、そこに居たのは。

「……《林檎売り》」
理想に狂い、信念に狂騒したドゥルウは、膝を折ると深く頭を垂れた。
それは、忠誠を尽くす家臣のようにも見えなくもない。
「過ちは、正されるべきなのですよ」
膝を折り、頭を垂れる、一見すれば騎士と王の構図。だが、これはそんなものでは断じてない。
「……もしお前が望むなら」
言葉は不要。短い間だが共に過ごした、だからこそ真意にも気付いた。
「同輩、それは侮辱です」
膝を折って面を下げる姿は騎士と王、しかしそれは正しくない。
膝を折るのは無抵抗の表れであり、垂れる頭とは即ち首を差し出しているのに他ならず、処刑を待つ咎人と執行者、この場合、それで正解だ。
「こんなワタクシでも王への忠誠は本物です、ワタクシが命を懸ける主君は一人に置いて他にはありません」
安く見ないで下さい、そう《林檎売り》は突き放し、
「ですが、ワタクシの誇りたる王が認めた相手、甚だ不本意ながらアナタの行く末を祈りましょう」
最後は祝福で締めくくる。
「ボク、やっぱあんたのこと嫌いだ」
苦笑を分け合い、剣を上げる、瞑目する《林檎売り》に進藤は今宵最後の一振りを下ろした。

橙の幻想色が勢い良く周囲に飛散、夜風に乗って空に舞う。ここに一柱が消え去り、残る魔王は四柱。慌しくなるな、と桂は気分を切り替える。
そんな桂に進藤が歩み寄る。
「ありがとう、ございました」

まず出たのは感謝。
「それで、色々手伝ってもらった以上、報酬を支払うべきだと思うんですけど」
「お前も律儀だな」
桂は苦笑する、今は勝利に浸ればいいものを、やはりこれは性格なのだろう。
「報酬なら今出てくる、それを貰っていくよ」
夜空に舞う橙の幻想色が再び一箇所に集りだした。
「――ッ！」
有り得ない、《心臓》という収束点を破壊した、レルナを繋ぎとめるモノはなく、ただ霧散し消え去るのみ、では何故レルナは再び組みあがるのか。
桂は片手を上げる、今再び絡み合うレルナは次々に紙片へと形を変えると、鳥の羽ばたきのような音と共に桂の手に収まっていく。
「……《王の法典》」
桂は頷いた、これこそ《林檎売り》を綾瀬と三郷が害せ無い理由でもある。《断罪するだけの存在》となった時点で《林檎売り》は用無しだった。
「九柱九者が入り乱れる《戴冠式》、移植者同様、従者もまた命を懸ける、奴等はその身にこいつを宿したからな」
そう言って集った紙片の束を甲で叩く。
《戦血君》に助勢するのは《存在干渉》を克服して貰い、九派を統括して人類陣営に帰依するため。
そのため、派閥のドゥルウに強制力を発揮できる《王の法典（アンドゥリル）》に手が出せなかったのだ。
「じゃあな進藤、明日から凄いことになると思うが、まあ早めに方針は明かしとけ」
「篤倉で二人目の《白銀》ですもの、熱烈なラヴコールが待っているわよ」
踵を返すと最後に付け加えた。

「毎度、また困ったことがあったら言ってくれ」
《領域》が解除された校庭で梨穂を待っていたのは、無論第四分隊の面々である。魔王と進藤の戦闘、その結末を話すとやはり一同絶句した。
いつもアクセル全開ですっ飛ばす梨穂だが今日ばかりは低速だ。何故なら今やこの車は勇者が眠る揺篭なのである。岩倉と結花は歩いて帰ると言ったので、空いた最後尾の席をベッド代わりに進藤を寝かした。
あの後、二人が去るや、そのまま倒れ熟睡。仕方ないので梨穂が保護することになった。
魔王が倒された。
その事実を知った篤倉の具現師組織はどうするだろう。神崎一門、そして枢機機関、一度は敵対した間柄、どの面下げて交渉するのか、とも言えないが。
（恥を忍んでも余りある戦力、そういう意味では土壇場でアシストに回った綾瀬の方が有利かな？）
「でも隊長、何で綾瀬は《林檎売り》を裏切ったんだ？」
助手席の司は無言、それでも同じことを梨穂に問いたげだった。
「綾瀬はドゥルウ嫌い、だけど同時に恐ろしいまでの実利主義」
ドゥルウを蛇蝎の如く嫌うが、それが己の利益となれば平然と手を組む。感情を理性で抑え、徹頭徹尾、リスクとリターンを計算し行動する。
「今回で言えば、《林檎売り》の提案を受けることで魔王を手駒に出来る。枢機機関との分割支配ではあるものの、それは計り知れない利益になる筈だった」
重ねるが、綾瀬は実利主義である。
「《林檎売り》を裏切ることで、それ以上の利益を得る算段があった……？」
どうにもしっくりこない。

形としては新たな白銀に貸しを与えたことになる。だがそれを予想していたとは思えない、覚醒したばかりの具現師が、まさか魔王を倒すなど予測出来るはずもない。
こんな博打は綾瀬らしくもなく、ならば言えることは一つだけ。
「綾瀬らしくないなら、それはつまり綾瀬の本意ではない、ということ」
梨穂は確信する、綾瀬は誰かに《林檎売り》を裏切るように口添えされたのだ。
「でもよ、綾瀬にそんなこと言える奴なんて……」
言いながら守屋も気付いた。
そう、序列十二位である綾瀬に絶対服従の命令を下せるものなど。
「四大将か、三本足か、それとも護衛長の神崎か」
もしくは、『神崎一門』の姫君、篤倉の『白銀』か。
「八傑が動いた、それは間違いないでしょうね」

「何時来ても息苦しいな、ここは」
暗く狭い部屋は圧迫感の塊であり、綾瀬はどうしても好きになれない。
「それで、これで良かったのかな？」
「ああ、いい仕事だったぜ」
進藤響による魔王討伐直後、『ライオンの穴倉』に訪れた綾瀬は己にクソふざけた命令を下した存在を睨み付けた。
相対する男、相沢桂は涼しげに受け流す、それが例えようもない程に不快である。
「貴様のお陰で大損だ、どうしてくれる？」
「俺に進藤響捕縛の決定、なんて情報流す時点で、この返答なんて予想の範疇だろうが」
人払いの結界まで張り隠蔽されていた進藤の捕縛作戦に、土壇場ながら介入できた理由、それは綾瀬が彼に情報を流したからだ。
序列は彼等が上位、しかし戒理から命じられていたのなら綾瀬は

鼻で笑い相手にしなかった。
「遅かれ早かれ、裏切るのは確定していた、ならそれが今だって問題ねぇだろ？」
「そうでしたね、『神崎』桂――我らが神崎一門の次期頭領殿」
「間違えるな、まだ『相沢』だ。次は喰うぞ」
洌洌とした空気と獣の重圧を浴びて綾瀬は肩を竦める。
《林檎売り》の交渉は完璧だった。魔王を手勢に加えられる、そんな提案を受けて断る者など本来皆無。
ただ不足していた、《林檎売り》には情報が決定的に不足していたのだ。
「よもや、九柱九者が入り乱れる『戴冠式』、そこに『神崎一門』の頭領、その実の孫が参加しているなど」
どうして想像できようか？
「それはそうとさっさと神崎を名乗ったらどうだ？　三本足も認めさせた今、名実共に神崎は名乗れる筈だ、一体何に固執している？」
「俺の勝手だ」
「それとも単なる反発心か？　ドゥルウを斃すことにしか興味ない祖父や、息子を棄てて逃げ出した父親と、同じ姓を、」
「綾瀬、お前はもう下れ」
回転椅子に腰掛けた桂と綾瀬の視線が空中で交錯、綾瀬は仰々しく一礼すると、退室する、部屋を出る間際。
「どれだけ抗おうが貴様はやはり神崎だ、《魔王の心臓》をその身に宿してなお、紫紺の幻想色を持つお前が、どうして神崎でないと言う」
桂は答えなかった。
「これで残るは四柱だ、いよいよ大詰めだな」
綾瀬が去った後、桂は嫌な沈黙を打ち破ろうと意識を次の方針に切り替える。
「当面の敵は《粉砕王》、アレは《戦血君》を撃退して、更には二

柱打破している、従者も凶悪、最大難度の戦闘になるな」
話を振った相手はソファーに身を委ね天井を睨んでいた。
「おい、春日井」
「色々考えてみた」
自己投影、同情、憐憫、安い感情と戒理は言う。
進藤響と樋浦要、二人の関係は桂と戒理、その未来と言えなくもない。
「ねえ、相沢。もしあたしが《存在干渉》に飲まれたら」
「春日井、俺は負ける気はねえからな」
『戴冠式』にも九本勝負にも、そう桂は断言する。
「だから、負けた時のことなど考えない」
淀みない返答に戒理は思わず押し黙り、らしくない、と微笑した。
「そうね、その通りだわ」
「綾瀬の言うとおり、俺はやっぱり神崎だ。だから『戴冠式』のイレギュラーに成り得る」
だからこそ、こんなふざけた儀式はぶっ潰す。
「その上で九本勝負のラストを飾ろう、二度目だが俺は負けないぞ」
「それは私の科白、吠え面かいても知らないわよ」
視線は愚か顔すら外し、確認するように言い合った。
「惚れた方が負けたぜ」
「告白させれば勝ちよ」
赤くなる顔を反らしつつ戒理が「それはそうと」と流れを変えた。
「相沢も相沢で随分進藤君に入れ込んでいたじゃない？　『俺は進藤にお前は《戦血君》に命を預ける』ですって、仮に彼が負けていたらどうするつもりよ」
「決まっているさ」
桂はさも当然と言い返す。
「反故だ、反故、《林檎売り》は喰って、《戦血君》は《粉砕王》に嗾けるさ」
絶句する戒理は、引き攣りながらも言葉を続けた。

「あんたってやっぱどう考えても最悪最低よ！」

◇

背筋を撓らすと溜め込み圧縮した筋力により足元に輝が走り、獣が跳んだ。

弓のようにしなる姿勢から放たれる矢の如き突撃、射出と呼ぶに相応しい跳躍、一歩も地面に足を着くことなく少女との間合いを潰す。低空飛翔の体当たりに反応も対応も許さず成す術なく少女は押し倒される。馬乗りとなり無位が上体を大きく反らすと頭部が膨張、少女を丸呑みにしようと口が耳の辺りまで裂けた。

悲鳴は小さく、そして儚い。

こんな郊外の森で自分は果てるのか、そう思うと少女の胸中に表現できない悔しさが生じた。

第三分隊が受けたドゥルウ討伐作戦、それは難易度的にも楽な仕事の筈だった。

《林檎売り》の置き土産の掃討作戦に参加した彼女は運悪く隊と逸れ、そして続々と現れる報告以上のドゥルウと遭遇、ついに捕らわれたのだ。

自分の人生は今、終わる。

少女はそう確信した。

靴底で地面を蹴りつけ《激情本能》で馬乗りになっているドゥルウを殴りつけた。

緑色の燐光が中空を舞い消える、無位の活動停止を確認した。

「――ぇ？」

と少女が零した。助けが来るなど思わなかったのだろう。

「間に合って良かった」

少女の無事を知り安堵と共に息を吐くのは、見覚えのない少年で

ある。
「もう安心だ、ここから西に一〇〇メートルくらいに君の隊がいる、こっちに向かっているから合流するといい」
少年はそう言うと視線を前に向けた、その先には七匹の《火炎甲虫》。
「ここは僕に任せてくれ」
少年は気楽に言うが、これだけのドゥルウを単独で倒すことなど早々できることではない、と、そこまで考え少女は一つの事実に気づいた、彼が纏う幻想色だ。
「白銀って……え？　あれ？」
少女の驚愕に気づかず、少年は歌うように口ずさむ。
「それじゃあ、一発ジャスりますか」

立ち止まることなく、進藤は疾駆を開始した。
その足取りに迷いはなく、ただひたすら前だけを見ていた。

終章・ラスト・デート（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9207t/

クリエ・オスオン

2011年7月2日03時11分発行